
詰め合わせギフトパック

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詰め合わせギフトパック

【Nコード】

N98580

【作者名】

たまさ。

【あらすじ】

色々ごちゃまぜ企画のページです。

まさに闇鍋状態ではありますが、何か気に入るものがありましたら宜しいのですが。気分しだいで増えたりへったりするかもしれません。

本編とは一切関係がありませんので、まったくおかしい現象が多発します。本編ではありえないあんなことやこんなこともあるかもしれません。

楽しんでいただければ幸いです。

私立魔女猫学園（笑）

私立魔女猫学園　　もう企画からして阿呆ですか。開幕。

「役割の変更を要求する！」

律儀にも手をあげて言う生徒Aロイズ・ロック。もともとが警備隊の隊服姿なので、学生服も良く似合う。

というか、違和感はないが、学生は確かにある意味アウト。

「オレが生徒でおまえが教師って、ないだろう」

むむむっ、せっかくエリイフィアから乗馬用ムチを奪ってきたあたしに対しての暴言、あたしはびしびしとムチのしなりを楽しみながらにまーんつと口元に笑みを刻んだ。

「あらーん、こんな可愛い教師でいいじゃないの」

猫耳猫尻尾は相変わらずついていますが！

今日のあたしは女教師に相応しいツーピース。胸が大きいのはご愛嬌　上げ底パッド二枚の威力を思い知れ！

女教師はやっぱりほら、ある種色気を撒き散らしたいものです。

「問題は無い」

同じく生徒Bエイル・ベイザツハ。本を練りながら言葉にしたが、ふっとその灰黒の眼差しをあげてあたしをひたりと見た。

「悪くない」

……何に対して悪くないのか聞いたら駄目な気がする。あたしは力をうしなつてへこんだ耳に活力よ戻れとなその元気をおくりつつ、べしべしと机を叩いた。

「ロイズ、あなたに他の役割を振り分けたら確実に用務員よ！チリトリとか箒とかが似合うっ」

「くっ。オレ自身も似合うかもと思ってしまったじゃないか。もっと他に……体育の先生とかないのか」

「でもね、そうすると、あなたが用務員、もしくは体育教師。ダーリンが保健室の怪人になってしまうのよ」

「怪人ってなんだよ」

いや、なんとというか保健室にいそいでしょ。エイルって……

「そもそも、常々言いたいと思ってはいたんだが。そろそろそのエイルをダーリンと言うのを止める。少なくともこの企画では絶対に駄目だ。却下！」

激しく言うロイズに、あたしは眉をひそめた。

「なんでよ」

「教師が生徒をダーリンなんて言ったら倫理的に問題だ！」

エイル当人はそ知らぬ顔だ。

あたしは更に笑いを深めた。

「判った。ダーリンは駄目なのね」

「そう」

「ふふふ。じゃあロイズ、ハニーって呼んであげる」

ほおら嫌がれ。

あたしはロイズの机の近くまでこつこつと足音をさせて歩み、エリフィアのムチの先端でロイズの顎先をくんと持ち上げた。

「ね、ハニー？」

「あ、あ、ううっ」

「却下！」

ロイズからではなくエイルから物言いがつかまりました。

おや？

「そもそも、あんた達まで教師になったら生徒がいらないじゃないのよ」

「魔女猫は年齢が高いのです。」

「一番年齢が低いのは、見た目だけ14歳程度のティラハール。その実年齢は300歳超えです。」

「もし授業中にアレに説教がました日には、あの口から炎を吐きそうだしヤダ。」

「おまえが生徒でいいじゃないか」

「……だから、生徒が少ないのよ。あたしが生徒だとして、アンニーナはぎりぎり生徒？ 教師？ カス生徒でいいけど」

「あたしが指を折りつつ言っと、あたしの肩にふわりと何かが巻きついた。」

「あたしは教師！ 音楽教師とか英語教師がいいわー、お色気たっぷりに教えてあげるっ。」

「ふふふ、Rの発音は舌をうまく使うのよお。もっと他の使い方も教えてあげようかしら、子犬ちゃん」

「ふわふわと浮かんだエロ妖怪はそのまま生徒Aのロイズに焦点を合わせた様子。ロイズが完全にびびって腰を引かせた。」

「あんたの標的はエイルじゃなかった？」

「あたしは二人の阿呆な様子を見ながら言うが、アンニーナはロイズの顔に豊満な胸を押し付けながら笑った。」

「堅物を飼いならすのは楽しいわよお。それに、そっちは幼女趣味なんだもの。オトナの女の魅力が理解できないのよ」

合唱。

「誰が幼女趣味だ」

冷やかなエイルはあくまでも一人で個人勉強中。団体行動には向きません。

「ちよっ、ブランっ。助けてっ」

ロイズが泣きそうです。熊涙目。

さすがにちよっと可愛そうですよ、アンニーナ。

だがしかし、ロイズは現在無敵アイテム所持者だった。突然飛来したチビ獣形ティラハールが、その獅子の口をぱっかりとあけてアンニーナにかじりついたのだ。

「きゃあああっ」

「ティラハール、そんなの食べたら駄目だっ。病気になる。ぺっしなさいっ」

「あたしは病原菌かっ！」

「そもそも、この話が学園である必要があるのか？」

エイルはあくまでも冷ややかに言う。

「……ない、かな」

「とりあえず、この魔法理論についての見解をお聞かせ願おうか、ブランマージュ先生」

くいつと顎で呼ばれ、あたしは引きつった。

「ま、まほー、りろん？」

「それくらいは判るのだろうな、ブランマージュ先生？」

エイルの瞳が楽しそうに揺らめく。

あたしは両手を突き出すようにして「生徒でいいです！ 生徒でっ」

と役柄をかえることにした。駄目だ。教師っていう役柄は面白そうだけれど、人に教えるのは難しい。

「では私が教師で構わないな」

ふっと皮肉に言うエイル。

つて、あんためちやくちや楽しんでない？ この企画。

エイルは首筋のネクタイを緩めながら先ほど自分が読んでいた本をぱたりと閉ざした。

「ブランマージユ、魔法理論と魔導理論の違いについて答えなさい」

「え、えええっ？」

エイルの口元が緩く口角をあげる。

「放課後個人講習。逃げるなよ」

はろっくん

突然首の裏、襟の辺りをつままれてあたしは「うなうっ」と鳴きながらじたばたと足を動かした。

「とりつく・おお・とりにいと」

うふうつと謎の吐息を落としつつ、ぶらりとぶらさげた白猫相手ににんまりと笑ってみせる黒紫の巻き毛のアンニーナに、あたしは思い切り顔をしかめた。

「何してんの、アン？」

「いやあね、ハロウインに決まってるでしょ」

って、いつもと同じ格好だから決まってるって言われても判る訳がない。しかも、レイリツシユのように三角帽子をかぶって黒いドレスを着ている訳でもないアンニーナときたら、一見すればただの娼館のねえちゃんに見える。

ふわふわの巻き毛　魔法でセットするのではなくて、いちいち自宅にいる色男下男にきつちりと巻かせるらしい　に胸元を強調する真っ赤なドレス。サイドにはスリットが入り、絹の靴下やら生足かってくらしいのバリエーションのみ。

「どこがハロウイン仕様？」

「馬鹿ねえ。私は魔女なんだから、どんな格好していようと魔女なのよ。それに、あんたは観察眼が駄目ね。そんなじゃあたしの男にはなれないわよ」

いや、なんであたしがあんたのオトコになんなきゃいけないんだよ。

何故か胸を張るアンニーナは片手で自分の耳に下がるピアスを弾いてみせた。

……かぼちゃ。

金色のかぼちゃのデザインのピアス。

言っとくけどね、そのピアスでハロウィンって気づくような男はあたしの周りには居ないと断言してやってもいい。絶対に大雑把な口イズは気づかないだろうし、エイルなんて気づいたところで無視するだろう。

「それに、今日のネイルはハロウィンカラー」

「はいはい」

あたしはげんなりとしつつ、ぶらんつとぶらさげられている現状がイヤでぶるりと身震いするようにして人の姿へと変化した。

途端にいつも居るんだかいけないんだか判らないうちの蝙蝠が追従するかのように変化し、ぼわんつとあたしの背に張り付いた。

「あら、あなたの蝙蝠ってはまだ魔導師の顔じゃないの。あんたも好きねえ」

「いやいや、好きでその顔させてる訳じゃないってば」

何よりその話題は駄目だ。

魔術を紐解くだけなのだから、本来であれば大元の顔を忘れたところで問題が無い筈だというのに、あるうことが　なんか微妙に違うのだ。違和感ばりばり。

もつとのほーんつとした、もしくはのペーんつとした顔だったと思うんだけどね。色々いじくっていたら、のっぺらさんになってしまったのでシュオンは相変わらずエイル仕様だ。

「あ、でもそれっていいわよね」

ふいにアンニーナはにんまりと唇をゆがませ、あたしの背後に張り付く似非エイル　三割増しアホ増量をじろじろと眺め、ぱちりと指を鳴らした。

「いやあん、似合っわ魔導師」

「何するんですかあっ」

シュオンがわたたと慌てているが、あたしはべりりとシュオンを自分から引き剥がし、ふむっとその姿をじっくりと観察してしまつた。

はつきりいつて趣味がおかしいアンニーナには上出来の部類だろう。

エイル吸血鬼バージョン。

蝶ネクタイに真っ黒いマントといういかにもわかりやすうい感じの吸血鬼。

「つてか、考えてみればシュオンつてもともと蝙蝠じゃないの」

「でもぼく血い吸い系じゃないですしい」

そう、シュオンは蝙蝠だけれど血は吸わない。

フルーツを主な主食としているのだ。魔獣、もしくは使い魔としての自覚が足らん。気合で血ぐらい吸ってみろ。

「マスター、マスター、似合います?」

ばさばさとマントを羽のように広げてみせるシュオンに、あたしはいつもと同じように「はいはい」と適当に相槌を返してやった。

途端にシュオンの顔 三割り増し残念エイルが破顔する。

うおっ、なんかキショイ。

思い切り鳥肌がたってしまった。

あああ、早くコレの顔なんとかしないと。もういつそのことその入んの村人Aさんとかを見本にしちゃえばいいような気がするけどね。

「ブランっ、お菓子要らないからさ、ちょっとコレ貸してよ。なんなら、うちの鷹貸してあげるから」

「あー、別にいいわよ。でも鷹ってちょっと怖いし、なんならうちの蝙蝠永久」

「ひどいつ、ひどいですよっ。ぼくは身も心もマスターのものなのにつ。勝手にやりとりしないでくださいよおお」

びゃんびゃんうるさい蝙蝠をアンニーナに押し付け、あたしは「そかー、今日はハロウィンだっけ」とにんまりと口元を緩めた。

魔女にとってはやっぱりハロウィンってのは特別なお祝いよね。何より、「悪戯されたくなければお菓子をよこせ！」なんて、なんて素敵なフレーズ。勿論悪戯だつてやりたいし、お菓子だつて大歓迎だ。

あたしはとんつと床板を蹴った。

勿論　こういう時にからかう相手は決まっている。

「つーまーらーなーいいいいいい」

あたしはがっくりとうなだれた。

現在絶賛仕事中であるロイズ・ロックときたら、あたしが突然その背後に現れ、定番の台詞を口にした途端に菓子をひょいと出した。バスケットひとつ分。

「ほら。ちゃんと座って食べる。飲み物は果実水がいいか？　紅茶？」

「……いや、んー……お菓子は嬉しいんだけどね」
「この反応がつまらんわー」。

もっと嫌そうな顔したりさ、追い出すような素振りとかされたら面白いのにさあ。この準備万端待つてましたってという感じはどうなの

？
どうなのさっ。

警備隊の隊舎内　ロイズは自分の執務用の机に向かって本日の報告書に一枚一枚目を通していったようで、苦笑しながらあたしの頭をなでた。
まったく、いつまでたってもチビブラン相手にしているような態度
ってちよつと腹立つ。

あんまり腹が立つものだから、あたしはぼふりと自分のサイズをチビサイズに切り替え、ロイズの膝に乗っかり嫌がらせ全開で菓子子の包みを解き始めた。

「ブラン、ちよつと仕事ができない」

「しらなーい」

知るか、ボケ。

「職場なんだぞ、ここは」

「しーらーなーいー」

あたしは言いながら口の中にボンボンを放り込んだ。

熊は苦笑をひとつ落とすと、あたしの体をちよつとだけずらして自分の仕事をやりやすいようにと画策してみるが、当然そんなの許す訳がない。あたしは更に邪魔をしてやるうと、もうひとつ菓子の包みを解いてロイズに差し出した。

「はい、どーぞ」

ほら、どつだ。

こうなつたらとことん邪魔してくれる。

悪い魔女ブランマジュを舐めるでないわ。こちとら嫌がらせのエキスパートですよ。

当初の トリック・オア・トリートなどなんのその。菓子も悪戯もあたしの本領でございますよ。

親指と人差し指でつまんだボンボンをずいずいと口に押し付けてやると、実は甘いものが苦手なロイズが渋々という様子で口を開いた。

途端に、あたしはむぎゆりと口の中にほんぼんを詰め込んだ。ちよつと指先舐められたけど構うものか。相手の嫌がることは大好物です！

「くそつ、職場で鼻血がたらどうしてくれる」
ぼそりつつぶやく熊の言葉に、あたしは心の中で高らかに勝利宣言をしていた。

くははははは、ざまあみるおお。

「あんな、ブラン」

「んー？」
なによ？

機嫌を良くしたあたしがロイズを見上げると、ロイズはふいに眉間に皺を寄せた。

「ハロウィンだから来たんだよな？」

「当たり前でしょ」

「じゃあ、もしかしてエイルのところとかも……いくつもりか？」
なんだか口調が固いが、あたしは顔をしかめた。

「もう行った」

「行ったのか？」

「それ以上聞かないでくんない？ っとに、あいつってば腹たつうううう」

あたしはきいいいと怒りながら口の中に菓子を放り込んだ。

トリック・オア・トリート。

あたしが言うより先にあのエロ魔導師ときたらさっさと口にした。

トリック・オア・トリック。

本当に本当にほんとうにっ、あのオトコときたらこっちの斜め上の思考回路をしくさってくれてむかつく。

絶対にいつかぎゃふんと言わせてやる。

ごめんなさいブランマージュ様って言わせてやるんだからっ。
覚えてなさいよっ。

「ブラン、えっと、エイルと何が」

「うるーさーいいいい。御菓子がまずくなるっ」

あたしは真っ赤になりつつ、ばりばりと菓子の包装紙を破り捨てた。

ファティナ&ルティア対談。

企画！ ルティアとファティナを会わせてみた。

二人の名前は実に似ている。そして、二人の性格は正反対。ということ、お二人を会わせてみることにする。

【あたしの魔法使い。】ルティア。

【陽だまりのキミ】ファティナ。

「こんにちは、ファティナと申します。現在十六歳、夫と義息二人がおります」

蜂蜜色のゆるいウェーブのかかる髪に翡翠の眼差しでほやんと微笑むのがファティナ。対して、淡いブラウンの髪に同色の瞳の女性はヘッドドレスに侍女服、いわゆるメイドさんのような姿のルティア。

「ルティアですわー、二十四歳独身。婚約者アリですう」

二人はにこにこ言いながら小首をかしげた。

「名前は似てますけど、外見は随分違いますわねえ。年齢もちがいますしい」

外見ではなく、格好が違うが正解。

「ですわね。ルティアさんは婚約者の方とは仲が宜しいの？」

「ルティとエディ様は相思相愛のらぶらぶですわよあ」

あっさりと答えたが、ルティアの婚約者のエルディバルトは少し離れた場所で「ちよつと待て！」と声を荒げているが、完全無視。

「よろしいですわね」

ちょっと寂しそうなファティナは瞳をそつと伏せた。

「ファティナさんは旦那様と仲良しでいらつしやる？」

「旦那様と仲良し……かはちょっと判りません。ですが、義息とはとつても仲良しです」

気を取り直すようにファティナが元気に言つと、ルティアは小首をかしげた。

「旦那様との間にお子さんの予定は？」

「ふふ、今度旦那様に授けていただけきまわつ」

「まあっ、素晴らしいですわね」

ルティアは嬉しそうに言い、ファティナの手をぎゅつと握つた。

「産み分けの方法とか、私知ってますわよー。知ってるだけでいまのところ役立たずですけどお」

「産み分け？ あの、子供を産み分けるのですか？」

ファティナの常識の中では未だコウノトリ説が有力です。男女が同衾すると子供ができるという説はどうやら嘘だと学びました。何故なら義息と同衾しても子供ができないので、これは嘘なのです。

「そうですね、女性の方が上のほうが」

「女性が、うえ？」

ファティナはきょとんつと瞳をまたたてしまった。

「それに一回目と二回目では、二回目の方が新鮮ですから、断然二回目のほうが良いと思いますのよお。ですから、一回目は、口でしてさしあげると宜しいですわあ エディ様は上のほうよりも下の

……」

「え、あの……？」

「でも一回目の方が濃厚っていう説も捨てがたいのですわあ。ファティさんはどう思いましたえ？」

「あ、あの……？」

ルティアの背後からエルディバルトの手が伸び、その口をがしり

とふさぎ、ファティナの背後からは彼女の義息であるヴァルフアムがぐいつと力任せにファティナを抱き込んだ。

「よけいなことを吹き込むな！」

「バカなことを言ってるんじゃないっ！」

ルティア・ファティナ対談失敗……

このまま放置していたらファティナが許容量一杯で寝込む恐れアリ。ファティナには当然今まで通り無垢　　というおばかさんでいてもらいたいと思います。

【魔法使い】三人娘対談。

「【あたしの魔法使い。】の謎を暴露、対談です！」
マイク片手に元気なルティアさん。

あたしはうんざりとしながら彼女を見て、

「迷って、イロイロありそうですけど暴露しちゃ駄目ですよ」

「そうなのですよー、この話ってAさんは知ってるけどBさんは知らない。AとBさんは知ってるけどCさんは知らないってハナシ実は多いのです」

「半分以上誤解と勘違いでできてますわよね？」

「そうなのですわー！ 私はエディ様がXXする時XXXな癖を知ってますけれど、皆さんは知りませんものねっ」

「知らなくていいですっ！」

「え、あの、それは……」

「マリーはまだ十四歳なんですよっ、へんなこと教えなくて下さいっ」

ルティアさんっっ。

どうして何でもかんでも下ネタなんですか。

誰もそんなエルディバルトさんの癖なんて知りたくありません。

「じゃあ、各自これだけはお墓にもって行くこうという秘密暴露大会！」

「全然墓までもっていったくないじゃないですかっ」

「もぉ、リドリーさんってば頑固」

頑固とかじゃないです。

それに、墓まで持って行きたい秘密なんて……初キス話はすでにアマリージエにはばれていたし、きつとルティアさんにもばれている

に違いない。

「じゃあっ、公の秘密をばらしまーす！」

「ちよっ、ルティア様っ」

アマリージエが慌てたが、あたしはその話には俄然興味がわいてしまった。

「公は、十六歳で八歳児に初恋です」

……それは全然ちつとも謎でも秘密でもないです。

「八歳児に臆面もなくエロエロいキスをしましたあ」
だから、それはもう秘密でもなんでもないんですね。

「よく考えれば幼女趣味ロリコンですよね」

「よく考えなくても変態ですわよー」

二人とも元気いいですね。

「公はもともと色々と制約のある方ですから、遠く離れたリドリーさんに会いにいけませんでしたのよー」

「基本的に竜峰から長く離れられませんからね」

どんな人間だ。それともお勤めの関係で？

「それを寂しく思った公がナニをしたと思いますかー」

ルティアはまるで本当にナイシヨ話をする様子でふふふっと口元を緩めた。

なんだかとおもイヤな予感を覚えたあたしは引きつり、アマリージエは首をかしげた。

「水鏡で時折りリドリーの様子は見ていらっしやいましたわ」
なにそれ？ は？

「あまいですう。マリー、公は変態なのですよっ」
ちよっ、なにをっ。

「公の屋敷にはリドリーさんの部屋があります！ 愛の間と呼ばれていてその中には公がいがい誰も入ることはできませんが、本日はこつそりと内部を教えてさしあげますっ」
ナニその腐った名称！ 気色悪い。絶対あの男趣味おかしいって。

母があたしに用意した部屋は、お花畑のように乙女チックな部屋でした。

ええ……

そして、あのバカが用意した「愛の間」^{ハニ}は、

あたしの写真とあたしの絵姿とあたしの使った教科書やあたしの昔の洋服、あたしの……

「なんでこんなものまで！」

見覚えのあるリボンとかつ。

あたしが町の日曜学校で意地悪されて無くしたと思っていた数々の学用品！ 靴つて、えっ、どうしてこんなものまで？

あたしはその商品の数々に卒倒しそうになった。

「なんとというか、下着はもう完全に駄目ですわよね」

「見境いなくらい変態ですからーっ」

「いやあああああつ」

つて、なんで？

なんでこれ、どうして、えええ？

「変態とか言う前に犯罪ですっ！」

ああああ、もおやだ。本当に駄目人間っ。

これが神官長とか絶対にありえないっ。こんな最大の矛盾を許していいのか!？

【魔法使い】三人娘対談。(後書き)

一人ぼっち寂しい変態…

陽だまりCM&コネタ(前書き)

実は以前陽だまりの宣伝を他の作品のweb拍手の中に入れてました

そこから三つ。あと、他に+……ラストはぶちいやんな表示ありなので、駄目な人は見ない!

陽だまりCM&コネタ

「はじめまして、私フェアティナと申します。

宣伝の為に御邪魔させていただきました」

につこりと微笑むのは翡翠の瞳と緩いウェーヴのかかる金髪の少女。年齢十三歳のフェアティナ。たまさ。が書いている【陽だまりのキミ】のヒロインです。

「【陽だまりのキミ】は私と旦那様との愛を綴った恋愛物語です」
「嘘についてはいけません」

冷やかな言葉を発する男の姿に、フェアティナはふわりと微笑んだ。夫に良く似た面差し。色素の薄い金髪に冷たい碧玉の瞳のヴァルフアムは、フェアティナの継子です。

「ヴァルフアム様もいらしたの？」

「貴女に宣伝などさせてはどうなるか判りませんからね。案の定、そんな見え透いた嘘をおつきになる」
「嘘なんて」

「【陽だまりのキミ】は私が八つも年下の義母であるあなたを育てる涙ぐましい育児の物語です」

「……ヴァルフアム様」

「なんですか、義母うえ」

「言ってて切なくなりませんか？」

「」

「それに私は義母ですよ？ 育てるといえば、私がヴァルフアム様を育てるのが筋というものではありませんか」

「八つも年下の小娘に育てられる覚えはありません！ そもそも、あなたときたらっ」

陽だまりのキミは八つの年齢差の義母と継子の日常を書いた物語です。年下の義母に振り回されるヴァルフアムの、もしかして禁

断の恋？かもしれないませんが、まあ、基本的には育児かもしれませんが。

自分が何を見ているのか、メアリは正直理解できなかった。

階下と呼ばれる場所がある。

邸宅・屋敷の半地下を示す言葉で、一般的には厨房や洗濯場、リネン室、使用人の為の部屋がある場所を示し、主筋の人間がそこを訪れることは滅多にない。そこを取り仕切るのは女主ではなく、執事の仕事であるからだ。

だから、その階下の一室で執事を目にすることは何の問題も無い。あるとすれば、その執事の口には細身の葉巻タバコが啜えられ軽く手を添えて火をつけているというの現状だ。

「煙草 吸うんですね」

「すみませんが、嫌いでしたら他をあたって下さい」

クレオールはほんの少しだけ眉間に皺を刻み、中指と人差し指に煙草を挟むように言った。

メアリは逡巡したが、その珍しい光景に思わず退出ではなく留まることを選んでしまった。

自分はただ、菓子鉢を取りに来ただけなのだが。

「意外です」

「何がでしょう」

「煙草ですよ、勿論」

「」

「ファティナ様はご存知……ではないのでしょうか？」

半眼で睨まれ、思わず言葉が小さくなる。

しかし、クレオールは深く煙草を吸い込み、ゆっくりと紫煙をくゆらせながら壁にもたれた。

「問題でも？」

「ありませんけれど。でも」

くすりと笑みがこぼれてしまった。

「普段のクレオールさんからはちっとも想像できませんから」

「時々、ほんの時々　吸うだけです。精神安定剤のようなものです」

嘆息するように言われ、ふとメアリは好奇心にかられてしまった。

「胃痛にもききます？」

「」

「いえ、あの……最近ちょっと、胃が痛くて、ですね」

思わず視線を逸らせれば、クレオールは煙草を灰皿に押し付け、自らの上着の内側から小さなピルケースを取り出し、中からいくつかの丸薬を取り出して顎先でメアリに手を出すようにと示した。

「胃薬です」

「ありがとうございます」

そう告げながら、メアリは手の中の丸薬をしげしげと見つめてしまった。

クレオールさんもストレスがたまるのね。

そしておそらく、二人の胃痛の種は同じものだろうと容易く推察できた。

「お互い苦労しますね」

愛想笑いで言った途端、クレオールは半眼を伏せてメア리를睨みつけた。

……もう少し打ち解けたいものだ。

メアリは切実にそう思うのだった。

たまさ。が毎週水曜日に更新を（予定）している【陽だまりのキミ】は、八つ年下の義母と八つ年上の継子の物語です。

「義母さま……」

「駄目ですっ、私とあなたは親子なのですよ」

「血だつて繋がっていない。何の障害があるというんだ」

「お辞めになつて、私は旦那さまをつ、ああっ」

という物語ではありません。

「馬は危ないと何度言えばいいんですか！ あなたのよな体力の無い人間が乗馬などとあつかましい！」

「いいじゃないですかっ、ヴァルフラム様の意地悪っ」

「怪我をしてからでは遅いんですよ、ちよつとそこに座りなさい！」

「怒りんぼう。男のヒステリー……」

「聞こえてますからね！ 今日はおやつ抜きです！」

という 継子であるヴァルフラムが義母であるファティナを育てる涙ぐましい育児日記です。

今のトコロは……まあ、うん？

「添い寝は平気ですか？」

「親子ですから」

「キスは平気ですか？」

「親子ですから」

「御風呂は平気ですか？」

「 どうでしょう? 」

翡翠の瞳の少女は小首をかしげてしばらく考え込みました。

「 どうやら回答が思いつかないようです。 」

「 ヴアルファム様に聞いてみますね 」

「 につこりと微笑んだ少女でしたが、彼女の八つ年上の義息に小首をかしげて尋ねてみました。 」

「 ヴアルファム様、御風呂は一緒に入れます? 」

「 親子ですから 」

「 ……でもちよつと駄目な気がするのですけど 」

「 義母うえも子供の頃はご両親と御風呂に入ったりしたでしょう? 」

「 しなかつたと思います 」

「 それに今は子供ではないと思います。 」

「 私はしましたよ。義母うえのご家庭ではそうしなかつただけで、うちでは普通にありました 」

「 絶対に嘘だと思われませぬ。 」

「 普通は一緒に入ったりするものでしょうか? 」

「 ええ普通は 」

「 だから嘘ですよね。 」

「 恥ずかしい気がしますけど 」

「 何が恥ずかしいんですか? 」

「 恥ずかしいでしょう。 」

「 ……だつて 」

「 義母うえにとって私は恥ずかしい存在なのでしょう? とても悲しいですね 」

「 そんなこと思っておりません! 」

「 では何も恥ずかしいことはありませんね 」

「 そんな義理親子の二人を、執事クレオールが生あつたかい眼差しで見つめています。 」

ほやんなファティナと最近ちょっと「親子」の上に胡坐をかきだした息子の 下らない日常。それが【陽だまりのキミ】です。
毎週水曜日更新【予定】で連載中。

以下は暑中見舞いでweb拍手にして掲載されていたもので、ちょっとぶちいやんな表現があります。
そういったものがダメダメ！ な方は下に行かずにおとなしくバツテンクリックが心の平穩の為だと思われます。

白い肌にシーツをまとわらせ、胸元でそれを押さえ込んだ指先。見上げてくる瞳には戸惑いが溢れ、ぬれた唇は誘うように薄く開いていた。

「ヴァルフアム……さま？」

問いかけが、甘い。

いつもは結い上げられた髪がピンや飾りを全て取り払われ、その蜂蜜色の豊かな髪が白い肌の上でさらりと揺れる。

触れと それは命じているのだ。

きしりと片膝を寝台の上に乗せ、伸ばした指先がみっともなく震えやしないかと口元に笑みが浮かんだ。

「義母っえ……」

伸ばした手に白手があり、直に触れたい欲求にもどかしげにもう片方の手で白手を抜き去ろうとしても、みっともなく白手の上を指が滑る。

緊張と、期待に胸が震えていた。

咄嗟に自分の指に歯を果てて白手に緩みをつくり、今度こそ反対の手で一息に白手を抜き去った。

そのままの勢いに任せ、彼女の細い首筋にふれ、うなじの辺りをなで上げた。

ファティナの瞳が不安にゆれ、こくりと喉が上下する。

わずかに見えるおびえが、ぞくぞくと体内に新たな熱を呼び覚ます。喉が無意識に動き、いつの間にか溜まった唾液をこくりと飲み干した。

「何を、なさいます」

「黙って」

逃げないで……

囁きがかすれ、そのままの勢いで唇を押し当てた。

華奢な体をのけぞらせ、その唇をむさぼる。

唾液が、甘い。進入した舌先が相手の舌を捕らえようと奥へ奥へと侵略をしかけても、おびえた相手は必死に逃れるように身をよじり、舌さえ萎縮するように奥へと引き込む。

更に力を込めて抱きしめ、意地悪くあいた手でファティナの鼻をつまんだ。

口付けしながら酸素をむさぼるなどということができない小娘は、すぐに苦しさにも身を震わせて体をこわばらせた。

力が抜けそうになったところでふさいだ鼻を自由にやられば、慌てたように身じろぎし、その舌が動く。途端に自らの舌を絡ませ、引き出し吸い上げる。

自分の口腔にファティナの舌を招きいれ、ついで彼女の唾液を吸い上げた。腕の中の少女の体温があがる。もっともっと反応を引き出したくて、わざとびちゃりと音をさせた。

小さな吐息が耳に入り込み、羞恥に身もだえする義母に自身が固く強い欲望を募らせるのを感じた。

こうすれば良かったのだ。

笑い顔を護る？

泣いた顔だつて愛しいのだから……もとから、こつして閉じ込めてしまえばよかった。

そのまま肩を押して寝台の上に倒せば、ファティナの潤んだ眼差しが不安ばかりをにじませて自分を見上げ、ゆるく首を振った。

「なにをなさいます」

「あなたはそうやって知らぬふりをして、私を苦しめたいだけなのでしょぅ？」

首にかかるアスコットタイをしゅるりと引き抜いて、放り出す。

「意地悪で酷い女だ」

「ヴァルフア……」

「無知のフリで私を惑わし、私が慌てふためく様を冷静に観察していたのでしょぅ？」

意地悪なことを言っているのは自分だ。

言葉を操りながら、どんとどんと自分の中で膨れ上がるものに笑みがこぼれる。

「悪い子には、しおきが必要でしょぅ」

シーツの下にはつきりと判る胸の膨らみ。その先端をそつとなぞるようになぞりあげ、きゅつとその形と弾力とを樂しむ為に包み込む。

自分の下で息を飲み込む翡翠のいとおしい娘を前に 敗北の狼煙をあげよう。

「おはようございませす」

「……」

カーテンが引かれる音で目を覚まし、ヴァルフアムは上半身を起こして前髪をかきあげた。

部屋には一人きり。いや、クレオールがいるが自分の隣に愛しい義母はいない。

「ふ……ふふ、ふふふふふ」

夢才チ！

夢っ！？

……許さんっ。

無意味な怒りに奇妙な含み笑いをする主の前に、クレオールは無表情で持ち込んだ湯桶に水差しの水を足し、温度の調整をしながら不気味な主の様子にそっと吐息を落とした。

なんだか判らないが、とりあえず気持ちが悪い。

夢才チ！！

石をなげてはいけませんよーっ。

共にいて（陽だまり・イラスト）

「おかえりなさいませ」

庭先で犬と戯れている子供のような貴女を抱き上げて腕の中に閉じ込めることはこんなにも容易いことなのに。

「今日は何をされていたのですか？」

陽だまりの中が誰より似合うあなた。

「昼にセラフィレス兄さまとリールが来てくださいましたの」

あたたかで柔らかくで清らかで何よりも愛しいあなた

「とても楽しかったですわ」

暗闇に閉じ込めて私の名だけを呼んで欲しい。

「あなたの義息はのけものですか？」

唇に触れて、あなたの血脈のありかをさぐり。

「のけものだなんて」

甘い責め苦の下で、吐息のうちに身を震わせて。

「ヴァルフアム様ときたら本当に時々幼い子供のようですね」

呆れる程の贅沢は夢想到に留めて、どろりとたゆたう闇を深い場所に沈めて。

> i15498 — 1370 <

唯一願うはあなたに共に居て欲しい

【陽だまりのキミ】ファティナとヴァルフアムのイラストを頂きました。

描いて下さいましたのは、なんと「シャドウ・ガール」のぷんにや
ご様でいらつしゃいます。

ご自身の執筆もお忙しい中描いていただけただけなのに、わたくしは鼻
血がでそうな程感激致しました。

小話は後付ですので、イラストのイメージと合わないかもしれませ
んが……

純真無垢ほえほえのファティナと、彼女を抱き上げる義息ヴァルフアム。

このイラストを一目見てわたくしが思いましたのは、

「ヴァル！ すかした顔で何を考えてるんだー」でした。

イラストの著作権はぷんにやご様にございますので、転載や無断使
用はご遠慮下さいませ。

そしてぷんにやご様、ヴァルフアムとファティナのイラスト、本当
にありがとうございました。

陽だまり小話集（web拍手）

品の無いくしゃみが出た。

「ぶわくしゅん」……しかも二発。

無言でクレオールがハンカチと、そして胸元のポケットからピルケースを取り出して薬包紙に包まれたクスリを二つ差し出した。

「風邪は困ります。ファティナ様には近づかないで下さい」

「……わー、クレオールさんて優しいですね」

ファティナ様にだけ。

思わず棒読みになったメアリだったが、それでもありがたくクスリは受け取っておいた。

「優しくして欲しいんですか？」

不意に、クレオールが身を低くしてメアリの耳元に囁いた。

あまりのことに硬直し、かあっと体温が上がったメアリだったが、しかしクレオールはすぐに身を引き離し、

「最近ドレスがきつそうですが、サイズ直しをしてさしあげましょうか？」

それは優しさじゃない！

赤面してしまった自分が憎いメアリだった。

「やあ、甥っ子！」

やけに陽気な男とであった場合、無言で通り過ぎるのが一番好ましい。だがしかし、相手はがしりとヴァルフラムの肩口を掴んだ。

「なんだなんだ、つれないじゃないかー」

「生憎と私は暇人に付き合っている暇は無い」

「そうかー、じゃあ仕方ない。ファティのとこいって可愛い義息の
ないことないこと吹き込んで来よーっと」

「つつ、おまえはっ」

「え、やだ？ しょうがないなー。じゃあ、有ること無いことにし
ておいてあげる。ぼくって優しいよねっ」

最近二人は仲良しです。

一方的に。

「ヴァルファム様の大切な方を傷つけてはいけませんっ」

怖さを必死に押さえ込んで義息の将来の嫁（には絶対にならな
い）を守るうとした奥様は素晴らしい。がんばりました。偉いです。
いくらでも褒めて差し上げたい。

けれどメアリは勿論内心で突っ込みを忘れていなかった。

「ヴァルファム様の大切な方、それはあなたです……」

ですので本当におとなしくして下さい。もし自分を庇ってファ
ティナに何かあれば、自分があの陰険馬鹿息子に八つ裂きされたり
へタをすると屋敷から追い出されますから……

「よくやりました」

クレオールが慇懃な調子で言う言葉に、メアリは一瞬判らなかつ

た。

それからじんわりと言葉が浸透し、ファティナを守ったことについて褒められたのだと理解し、思わず嬉しさがこみ上げてきた。

クレオールが人を褒めることが無い訳ではない。彼は執事という立場で階下を網羅していて、人の仕事をきちんと褒めることも知っている。だが、家庭教師である自分が褒められることは滅多に無い。

「まあ、当然ですが」

浮上した途端に落とされました。

そうですね！ 当然ですね！ ええそうですねよっ。

最近ガラまで悪くなってきたメアリだった。

いふくたたとえばこんな物語（陽だまり）

十八という年齢で受爵されたものは騎士　一代限りの爵位は子に受け継がれるものではない。だがそれは、一つの戒めのように、一つの区切りのように胸に深く突き刺さり沈んだ。

「次は結婚市場だな」

ニヤリと口の端に笑みを浮かべる友人に冷たい一瞥をくれて、まだ馴染みの無い爵位の印である徽章に軽く触れて緩く首を振った。

「必要がない」

「独身主義って訳にもいかないだろ」

「相手はもう、決めてある」

「はあ……また来たんですか」

アパートの管理人であるセレ未亡人が来客を告げに来たことに、メアリは嘆息した。

以前は住み込みで家庭教師をしていたのだが、今は街の中流層の区画にある女性専用のアパートに暮らしている。

このアパートはある慰謝料として某侯爵家に用意された正真正銘メアリ自身の邸宅だ。

元々は集合住宅ではなかったが、無駄な部屋数と当然管理し続ける為には現金収入も必要ということで、女性専用のアパートとして改良し、今では大事な収入源となっているのだった。

一階をオープンフロアにしてある為、一階だけは男性が入れるようになっていて。だがしかし、そういったルールを無視する少年はセレ未亡人が待つようにと指示していたのも無視した様子で、メアリの私室の扉に腕を掛けた。

「メアリ」

「エイリク様、頼みますから下でお待ち下さいませ。ここは男性禁止区画です」

「婚約者の元に行くのに何の遠慮が必要だ」

冷たく言い切られ、メアリは暗澹たる吐息を落とした。

「そのことは幾度も話し合ったではありませんか。そもそも、私とエイリク様の年齢差ときたら十一ですよ。いったい私を幾つだと」
「二十九だ」

遠慮のえの字もなく言い切られた。

勿論その通りなのだが、女性に向かって年齢を突きつけるのはどうだろう。メアリは口元を引きつらせ、無理矢理上階にあがってきてしまった相手におろおろとしているせし未亡人に微笑みかけ「ここはもういいですから」と引き上げさせた。

家主である自分がルールを破っているように見えるが、破っているのは無遠慮なこの子供だ。

メアリはとげとげしい口調で「出入り口に立たれると邪魔です。ここまで来て水をぶちかける気はありませんから、どうぞお入りになつたら？」とソファを示した。

「言っておきますけれど、あんまり不躰なまねばかりなさるようでしたら、ファティナ様に告げ口しますからね」

釘を差すようにきつく言えば、途端にエイリクは顔を顰めた。

「義母さまに言うのは卑怯だ」

そんな表情をされると昔と変わらぬ少年の様相を見せてくれる。

何より、この少年ときたら相変わらずファティナ様が大好きだ。それがまた実に微笑ましい。

しかし、あの頃とは確実に違うことがある。

「本当にご兄弟でそっくりですこと」

メアリが呆れた口調で言えば、エイリクは眉をびくりと反応させ、

冷たく彼女を睨んだ。

「兄さまとぼくは違う」

そう、妄信的に兄を慕っていた少年は、今や兄と冷たく舌戦を繰り返されるまでに成長していた。それがよいことなのか悪いことなのか、メアリにも判りかねるが。

「それで、本日はいったいどういったご用件ですか。礼服など召されて」

メアリはお茶の準備の為に席を立ち、反対にエイリクに座るようにと示そうとしたが、エイリクはつかつかと長靴の音をさせて近づく、メアリとは一歩離れた場で立ち止まった。

「陛下より騎士の爵位を受爵した」

「ああ、それでその立派な身なりですね。おめでとうございます」

メアリは瞳を細め、自らの体勢を整えると恭しく一礼し、心からの贅辞を口にした。

小生意気だった少年が、今は正装に身を固めて立っているのだから時の流れとは恐ろしいものだ。

肩に房飾り、腕には徽章。

このように言えば失礼だが、馬子にも衣装　いや、元々彼は侯爵家の次男だ。正装すればその姿は実に惚れ惚れと世の女性を虜にするだろう。

社交界に出るようになれば注目を集めずにはいられないだろう。そう思えば、ほんの少し寂しい気がするが、それはきっと姉のような気持ちだろう。メアリは彼の成長をずっと見てきたのだから。

「メアリ、この日に決めていたんだ」

「何をでしょうか？」

まるで弟が立派になった様子を眺めるようにしていたメアリは微笑んだ。

「あなたを抱く」

冷水を浴びせるかの如くあまりにも率直すぎる台詞に、メアリは思考を飛ばしかけ、ただ幾度も瞳を瞬かせて面前の少年を見た。

そう、少年だ。

なんとこの悪い冗談だろうか。

「あの、エイリク様？」

「エイリクでいい。ぼくはあなたの夫になるのだから」

「意思の疎通をご存知でいらっしやいます？ 私にはそんなつもりは……」

「貴女がぼくに結婚を持ちかけたんだ」

びしりと突きつけられた言葉に、メアリはとりあえずというように相手がこれ以上近づかないようにと自分の前に手を突きつけた。

「幾度もいいましたけれど、アレは 冗談です」

その昔、彼の家人によつて怪我を負ってしまったメアリが、償いをしたいという十一歳の少年に「将来自分が独り身だったらも嫁にして下さい」と確かに言った。言ったが、それはあくまでも冗談だ。それ以上のものではなかった。

だというのに、この少年ときたらそんな冗談を未だに本気にしているのか。

「悪いが冗談じゃない」

エイリクは冷たく言いながら、首にふんわりと巻かれているクラヴァットを片手で引き抜き、しゅるりと絹の音をさせた。

どきりとメアリは心臓が音をさせるのを感じる。

「責任とか義務とかで結婚なんてするものではありませんでしょう

「責任とか義務のつもりは無い。あれ以来ぼくはずっと貴女を見てきた」

「エイリク様、冷静に」

「ぼくは冷静だ」

そういいながら、上着のボタンを一つ一つはずしていく。その姿がやけに色っぽく見えて、メアリは思わず視線をそらした。

「あなたに時折り男の影があった時、どれだけぼくが苦しんだとおもう」

「男って……そんなものは」

「当然だ。いちいち排除したからな」

ばさりと言い切るその言葉に呆気に取られた。

「排除……」

「あの兄と血は確かにつながっているらしい」

そう鼻を鳴らす相手を咄嗟に見返すと、エイリクは上着をばさりと椅子へと放り投げた。

「メアリ、愛している。結婚しよう」

手首を強く捕まれ、ささやかれる言葉にふっと 以前、この少年とそっくりな男にされた求婚がぶわりと自分の中によみがえった。

それは求婚とは名ばかりのもので、愛情など微塵もない惨めなもの。

メアリはぐっと腹部に鉛球がねじこまれたような気持ちになりながら、真摯な眼差しで自分を見下ろしている少年を見上げた ああ、いつの間にこの少年は身長が伸びたのだろう。出会った当初は見下ろしていたのは自分だったというのに。

「……愛して」

る？

そんなのは嘘だ。

その言葉を続けようとしたのに、ふわりとメアリの唇がエイリクの薄い唇に触れられた。軽く、ただなぞるような口付け。

そのままそつと顔をあげて、瞳を真摯に合わせ、エイリクは囁いた。

「十八になるまではと我慢したんだ。貴女を　愛している。それを証明する為にできることなどないけれど、ぼくの持つ全てを貴女に差し出し、貴女が望むならこの心臓すら取り出そう」

掴まれた手首をぐいと引かれ、メアリの手の平がエイリクの胸に触れた。

高い体温と、早鐘を打つ心音。

冷静だと言いつつ相手の心音は、冷静さなど微塵も感じさせない鼓動を打つ。

よくよく見れば確かに緊迫した空気をはらんでいたエイリクだったが、やがてふつと微笑を湛え「特別に、義母さまを義母さまと呼べるように頼んであげるよ」茶目つ気たつぷりの台詞を口にした。

途端、メアリは思わず笑い出してしまった。

「ファティナ様をお義母さまと呼ぶのは　楽しそうですね」

「きつと楽しい。義兄さまは相当怒るだろう。ぼくが義母さまと呼ぶことすら怒るから」

「私はきつと年若い貴方をたぶらかした悪い女だと言われるわ」

「貴女は十一のぼくを確かにたぶらかしたんだ。ぼくの手を無遠慮に掴んで。でも、その後は、貴女をたぶらかす為にぼくが努力したことはちゃんと判っているだろう？」

女史とは言わない。メアリでいいな。

今は無理だが、いつか貴女に男爵位を取り戻させる。

あれらをたぶらかすというのかどうも疑問だが。
メアリは肩に入っていた力を抜いた。

もう仕方ない、だって……こんな求婚を断れる女などいないだろう。

難点があるとすれば、あの馬鹿男とこの少年の容姿ときたら実によく似ていて けれど、けれど。

メアリは優しい眼差しを向けてくる相手に応えた。

「喜んで、お受けいたします」

今もファティナと共にいる暗褐色の髪の方がちらりとよぎったが、それは淡い想いと共に溶けて消えうせた。

エイリクの吐息交じりの口付けが、全てを押し流す。

自分の中に甘酸っぱいような優しい気持ち満ちた途端、ふいにエイリクは身を一旦沈めてぐいっとメア리를横抱きに抱き上げた。

「え、ええっ？」

すたすたとそのまま隣室になっている寢所に行こうとする相手に慌てるメアリだったが、エイリクは口の端に笑みを浮かべて肩をすくめた。

「ぼくは求婚しにきたのではなくて、抱きに來たんだと言っただけ」

その顔が勝ち誇っているように見えて、メアリは恥ずかしさにエイリクの首に手を回して相手の丹精な横顔を見ながら、弱々しく抵抗の言葉を口にしながら、年若き求婚者はそれを微笑で封じた。

人生相談

「まずはじめに言いたい」

キラシユエータは口元を引きつらせ、冷たい瞳で面前のマイクを睨みつけた。

「どうして私が他人の人生相談など聞かなければいけない！」

「まあま、殿下。色々と考察した結果、まともな人が居なかったんです」

どろどろつと馬でも抑えるように彼の副官であるティナンは苦笑した。

「なんでしたらぼくがしてもいいんですが」

「……おまえは駄目だろ。人間的に欠陥がある」

びしりと付きつけられたティナンは壁になついた。

「人生相談を受けるならそれなりに人間として厚みがあるほうがいいのではないか？」

まだぶつぶつと言うキラシユエータ。

彼は若干往生際が悪い。

「じゃ、ぼくが！」

はいつと元気よく手をあげた明るい髪のルディエラを、キラシユエータは冷たい一瞥で押さえ込んだ。

「黙れにんじん。おまえは人間としての厚みも胸の厚みも無い」

「何わけの判らないこと言ってますかっ！」

「じゃ、じゃあ私が致しましょうか？」

おそろおそろ手をあげたのは、ナシユリー・ヘイワーズ中尉だった。

咄嗟にキラシユエータは「いや、胸の厚みがあればいいという話で

「はい、いや、すまない。忘れてくれ」出てしまった失言に詫びを入れ、溜息をついた。

「なんでしたらうちの長男を呼んで参りましょうか？」

「ティナンがふと思ひ立ち言えば、ルディエラも嬉しそうに瞳をきらきらと輝かせる。」

「クイン兄さまなら適任！」

「呼ぶな！ 私はあいつが苦手なんだ。表面上にこやかに対応するくせに、絶対にあいつは私を敬っていない！ 内心で激しくこき下ろしているに違いないんだ」

何か激しいトラウマでもありそうです。

「いい。判った。私が聞く」

「とういうことで、キリシュエータ殿下の人生相談のコーナーです」「ティナン、私が人生につまづいているような説明はいらぬ。おまえ達は出て行け」

しつとその場の人間を追い出し、もう幾度目かの深い溜息を吐き出してキリシュエータはばしりと机を叩いた。

「相談者、前へ」

まるで謁見のように横柄さだった。

退場！

「……それで私ですか」

某侯爵嫡男の子爵家に仕える執事、クレオールは慇懃に呟き、指定された席についた。

「クレオなら立派にお仕事をこなせますわよ」

「ありがとうございます。奥様」

「だってクレオは優しくして何でも知っていて素敵ですもの」

心からの称賛の言葉にクレオールの目元が和む。

それを冷たい目で見つめながら、彼の主であるところのヴァルファムは冷ややかな調子で言った。

「私が引き受けてもいいのですがね」

「あら、ヴァルフアム様は駄目ですわ」

あっさりと彼の義母、ファティナは言った。

「だってヴァルフアム様は他人の悩みを聞きながら怒りそうなのですもの」

ぐうの音も出ない事実だった。

「……義母うえには何か悩みがあたりですか？」

「私の悩みは。義息がおこりんぼうで時々ちょっと困ります。ほんのちよつとのお散歩も駄目なんて酷いと思いませんか？ まるでわたくしがちいさな子供みたいに。それに最近ちよつと義息がナマイキです！ もう少しお義母さんを敬ったほうがいいとおもいますわっ」

ラスト辺りにあまりにも熱が入ってしまったファティナに、ヴァルフアムは口の端に笑みを浮かべて腕を組んだ。

「第一に、私を怒らせているのは義母うえの阿呆な行動や発言です。私に問題はありません。あなたを散歩に出すなどとてもないですね。どこの道端で野垂れるか判ったものではない。私がナマイキ？ そんなことはありませんよ。私は十分に義母うえを敬っている」

きつぱりと言い切るが、腕を組んで威圧的に義母を見下ろすその姿をみれば明らかに敬っているというのは嘘くさい。

クレオールは額にそつと手を当てたい気持ちになりながら、

「人生相談に行つてきますので、お二人は仲良くしてして下さい」
思わずそう口にしていたが、現在下らない舌戦を繰り広げている二人が聞いてくれていたかはどうも不明だった。

「どうぞ」

クレオールは穏やかな調子で来客を迎え入れた。

「はじめまして」

通された男は、クレオールと同年代かそれ以上に見えたが、実際は年下だったりするロイズ・ロツク。

警備隊の隊服に、腰には拳銃を吊り下げた相手は、親しげにクレオールに手を差し出したが、クレオールはそれを受けはせずただ席を示した。

「それで、どのような相談ですか？」

「いや、初対面の貴方に言うようなことでもないんですが」

「じゃあお帰り下さい。」

内心で思ったところでそれを口にしたりはしない。クレオールの外面はいつも、いつでも爽やかです！

「うちの猫が……」

「猫が？」

「時々喋るんじゃないかとか……実は中身が魔女じゃないかとか、いや判つてるんですよ。ただの希望とか妄想だつていうのは。判つてるんだが」

クレオールはしばらくじっとロイズ・ロツクが一人でわたわたとしているのを見ていたが、やがて胸のポケットからピルケースを取り出し、中身を幾つか取り出してにっこりと相手の手に落とし込んだ。

「過労にはお気をつけ下さい」

「いや、あの……」

「では次の人！」

「うわっ」

クレオールは突然自分の面前に現れた真っ白い猫に声をあげ、ついでその猫が女性の姿に変化したことに胸元に手を当てて動揺を鎮めた。

「その猫耳は……オプションですか？」

「悪かったわね！ 気を抜くと出っ放しなのよっ。あたしだって好きで猫耳つけてるわけじゃないのよっ」

ばさりと自らの髪を後ろに跳ね上げ、魔女ブランマージユは足を組んで空中に座るようにして浮いた。

「あたしはブランマージユ、悪い魔女よ」

「悪い魔女？ 何か人を呪い殺したり毒薬を作ったりするんですか？」

素で問い返したクレオールだが、相手は機嫌を損ねたのか顔をしかめた。

「なんで呪い殺したりすんのよ？ 魔女は非力な人間を守るのよ？ 毒薬？ そんなもの作って何か楽しいの？」

「じゃあ何してるんですか？」

問いかけようかと思っただが、懸命なるクレオールは止めておいた。

「で、あなたはどうしてここに？」

穏やかに問いかけると、途端に猫耳が伏せた。

「あたしの中に猫がいるのよ」

「……いや、中といわず外にも出ていらっしやるようですが」

「うるさい！ この猫耳と尻尾のことはもうほっときなさいよっ」
がうつと噛み付き、けれどすぐにブランマージュは肩を落とした。

「とにかく。あたしの中に猫がいるの。それで分離しなくちゃいけない訳なんだけど！ やりかたが難しいのよっ」

失敗したら色々危なそうだし。

と切々と語られたところで、執事であるクレオールといえど、魔法の生態などわからない。

「魔法の研究者とかに助力を仰いでみては？」

「それ、もうとつくにした」

「役に立ちませんでしたか？」

「現在進行形で研究対象になってるけど……最近怖いのは、体内で猫の体を再構築して体外に取り出す方法とやらを考え付いたみたいなんだけど、うっかりしていると実践しようとするのよ」

あの野郎っ。と拳を握り締めるブランマージュに、クレオールは「何か問題ですか？」と問いかけた。

「問題は大有りよっ！ ようはあたしが妊娠出産してみればいいっていつのよっ。

信じられる？ 魔法なのよ、あたし？ しかも、妊娠出産って、一人でできるもんじゃないでしょっ」

「はあ……」

「あのぼけなすの子供なんて生みたいものかあっ！ 悪魔類鬼畜目なのよっ。てか、あのボケは猫の子でいいのか自分の子がっ」

なんだかやたらややこしい話になり、意味がつかめず困惑したク

レオールの前で部屋の扉が無遠慮に開き、黒髪の青年が顔を出した。
「ブラン、こんなところで油を売るな。研究時間が減る」

「今日は休みって言ったでしょーがっ」
言いながら、突然魔女は白い猫へと変化した。

途端に青年の黒灰の瞳が陰り、口元に皮肉な笑みを刻みつける。

「そうやっていつまでも猫の姿で逃げていられると思う程愚かではあるまいに」

「さすがに猫は襲えないもんねー」

「人を変態扱いするな」

猫をつまみあげてさっさと退場する相手を見送り、クレオールは無意識に自分のポケットを撫でた。

なんだろう、煙草吸いたい……

「あの、いいですか？」

そと【人生相談】の扉をたたいた少女の姿に、クレオールは表情を改めた。

どうでもいいです。

と内心では思っているが、とりあえず仕事であれば完璧にこなす自信はある。金銭の発生する仕事とは思えないが、少なくとも最後には彼の女主の労いの一つの言葉くらいは受け取ることができるだろう。

クレオール、時々ちょっと安い男。

「どござ」

「はじめまして、リドリー・ナフサートと言います」

ペこりと頭をさげた相手は十代の後半辺りと思われる「そのへんにいそうな庶民」的な雰囲気をかもしまくった少女だ。

リドリーは示された椅子に座り、どう口を開こうかと思案している様子がほのほのしい。クレオールは先ほどまでの疲れを飛ばし、「何か相談ごとがありますか？」

と、やんわりと促した。

「相談というか あの……」

リドリーは視線をさまよわせ、けれど意を決するようにやっと口を開いた。

「好きな人が、いるんです」

思わずクレオール自身照れてしまいそうになった。

リドリーは膝の上においた手をもそもそと組み合わせたりつまんだりしながら「好きな人がいるんですけど」と続ける。

なんか可愛い　クレオールが笑いたいような気持ちに浸っていると、彼女は言った。

「変態なんです」

「……」

「相手の変態なんです。で、相談というのはですね。明らかに頭のおかしい変態を好きというのはあたしも変態なんじゃないかという大きな問題に直面してしまったのです！」

あたしは変態でしょうか？

と、半泣きの顔で訴えられてしまったクレオールは鎮痛な気持ちになり、一瞬言葉を詰まらせた。

「変態というのにも種類があると思いますし……もしかしたら、貴

女が思う程相手の方は変態ではないかもしれませんが、思い込みじゃないですか？」

それを言うならクレオールのもう一人の主、ヴァルフラムも変態と言えなくも無い。

だが、ヴァルフラムを好きだから自分も変態という方程式は成り立ちそうには無い。

思いのままに告げれば、けれどリドリー・ナフサートは少しばかり納得仕切れない様子で眉根を潜めた。

「そうでしょうか？」

「そうですよ」

「……変態じゃないのかな？」

「そうですよ。きつとあなたの強い思い込みです」

リドリーは益々眉を潜めてぶつぶつと口の中で繰り返したが、やがて息をついて「そうかもしれないね」と無理やり納得した様子で立ち上がり、ぺこりと頭をさげた。

「ありがとうございます」

「いえ。その相手の方どうぞお幸せに」

クレオールが見送ると、リドリーは更に眉間に皺を寄せまくっていたが、そのまま退出した。

がながんつと扉がたたかれ、入室を促すとひよこりと顔を出したのは黒髪の少女だった。

耳の左右で三つ編みを編み、それをぐるりと後ろに引っ張って結わえてある。

灰黒の透明感のある瞳は光の角度で透明な青灰にも見える。

恐ろしく綺麗になりそうな少女だが、生憎とまだ十二・三という年

齡だろう。未だ幼さばかりが目立つ。

「ちょっと聞いてくれる？」

と、少女は言いながら断りもえずにさっさと席についた。

「あたしはファウリー・メイ 未来の大召喚魔導師よ」

魔女だとか魔導師だとか……クレオールはそつと吐息を落としたものの、相手に先を促した。

「何か相談が？」

「相談がなければこんな場所にはいないわよ」

高飛車な物言いにクレオールはびきりと眉間に一瞬皺を刻み込んだ。

小生意気な子供は大の苦手だ。

やはり子供は素直で愛らしいのが一番。
彼の女主のように。

世界は女主を中心に巡っているクレオールは一生独身だろう、おそらく。

「隣のレイシエンをぎゃふんといわせたいんだけど、いかんせん十歳も年齢が違うものだからなかなかうまくいかないの。何かいい方法はない？」

しかし相手が真剣な様子で可愛いことをいうものだから、クレオールは苦笑を浮かべた。

「そういうことは建設的ではありませんよ。もっと人生を楽しまなければ」

「あたしだってね、いつまでもレイシエンにかかずらってなんかいられないのよ。なんととってもあたしは未来の大召喚魔導師なんだから。でもレイシエンってばあたしが嫌がってるのに何にでも首を

突っ込むんだもん。ここは一つぎやふんって言わせてもうあたしのことに口出ししないようにさせたいの！」

ぐぐつと拳を握り締めるその様子は　微笑ましいといえなくも無い。

「少し距離をとってみては？」

「できればそうしてるわよ！　レイシエンは隣に住んでるし、レイシエンの職場は学園の隣だし、毎日毎日あたしの髪を結い上げるし。口やかましいし、すぐばばにチクるし」

口にすればするほど憎しみがつのるのか、ぐぐつとファウリーはその拳をふるふると震わせ、声を高くした。

「あたしは忙しいの。召喚士としての勉強だつてあるし……それにふつとファウリーは声を潜めた。

「……人を探しているの」「人？」

落とされた声音の響きに、クレオールが問いかけるとファウリーは戸惑うようにその瞳を揺らした。

「あたしと同じ、黒髪に黒い瞳の人。一度だけ会ったの。あたしの国にはこういった色彩が無いから、できればもう一度……会いたい」

切なそうな言い方に、クレオールはファウリーの瞳に合わせるように身を沈めた。

「願って叶えられないことなどありませんよ。貴女はまだお若い。何事もゆっくりとでいいのです。でも、他人に向けるマイナスの感情はあなたにとって良いものではありません。どうぞ、ぎやふんとさせるなどといわずに健やかに日々をお過ごしなさい。他人を妬んだり、嫌ったりなどという心にまみれて日々を無駄に過ごすなんてもったいのないことです」

穏やかに諭す言葉に、ファウリーはその透明な眼差しでじつとクレ

オールを見つめ、やがて溜息を吐き出した。

「大人つてすぐにそういうキレイゴトを言うのよね」

「」

子供なんて嫌いだ。

クレオールは思わず胸元でぐっと拳を握り締め、引きつった微笑を浮かべながら自らの女主を思い浮かべて自身の平穩を求めた。

「すみません、よろしいでしょうか？」

控えめなノックと共に入室したのは、色素の薄い青銀かと思わせる金髪の持ち主。長い髪の一筋を後ろに結わえた騎士姿の青年は、物事も柔らかに一礼した。

騎士団所属のどこかの誰かとは違う穏やかな空気の持ち主は、クレオールに一つうなずきかけるようにして名乗った。

「ティナンと申します。王宮騎士、第三騎士団所属の現在は騎士団長として第三王子殿下キリシユエータ様の副官として勤めております」

国が違うと物腰も違う。

クレオールは内心でヴァルフアムに爪の垢を煎じて飲ませてしまいたい気持ちになった。後で実際に爪の垢をいただき、こっそりヴァルフアムの茶に入れてしまおうか。

時々普通にこんなことも考えているクレオールだった。

「それで、どのようなご相談でしょうか」

気をよくしたクレオールがやんわりとうながすと相手は躊躇する

ように一旦開きかけた口を閉ざし、唇を湿らせる。
その様子に、クレオールは安心させるように言葉を重ねた。

「ご安心下さい。受けた相談をよそにもらすなことはありませんか
ら」

守秘義務とかではなくて、まったく興味ありませんから。

「そうですか」

ティナンは小さく確認するように言葉にし、こくりと喉を上下させて視線をあげた。

「イモウトが可愛すぎるんです」

うちは奥様が可愛いですよ。

最近ちょっと大人びてしまって実に寂しい限りです。

「もお本当に可愛くて。お兄ちゃんは毎日心配なんです。世の中には悪い男が山といるというのに、あの子ときたら男ばかりのところ
で生活しているんです。もしあの子に何かあったらと思うとお兄ち
ゃんは気が気じゃありません」

「ああ、兄妹愛はとても素晴らしいですね」

「そうなんです。これは兄妹愛なんです。純粹な　だというのに、
殿下ときたらぼくの思いを邪推するんです。まったく、ご自身の心
が汚れているからといってぼくの心まで汚れているように言うのは
間違いです。そう思いませんか？」

「そうですね」

というか、その殿下とやらはこの男性の主ではあるまいか。
自分の主を悪く言うのは良くない。

普段からヴァルフラムに対しては心の中で色々と思っ
てはいたりするが、クレオールは外見上、表面上いつでも完璧な執事です。

「そう、そうですね？　ぼくはいつだって純粹にルディエラのことを思っているのです。誰かに虐められてやいないか、誰かに泣かされてやいないかと」

実際問題毎日虐めているのも、泣かせているのもティナンであるが、クレオールは勿論そんなことは感知していません。

「ぼくはですね。他に誰かにあの子が虐められたり泣かされたりなんて我慢できないんです」

力説するティナンに、なんだかちよつぴり疲れを覚えるクレオール。

「でもあの子もお年頃です。そのうちに恋人ができたなんてお兄ちゃんに紹介しようとするかもしれないじゃないですか」

「ああ、そういうこともあるかもしれませんがね」

「でも、それを想像するとぼくはとても辛いんです。だって恋人って、キ……キスとか、してしまう訳でしょう？」

何故その年齢でキスで照れるのか。

言葉をどもらせた拳句に頬を染めるのはやめて頂きたい。

「キスなんてっ、そんな破廉恥なことは兄として許せない訳ですよ！」

「まあ、それは確かに兄として許せないこともあるかもしれませんがね」

「そうなんです。ぼくは兄としてそこは許してはいけないと思う訳です」

なんて面倒くさい兄。

ちよつとクレオールが呆れていると、ティナンはまるで賛同者を得たとばかりに力強くうなずいた。

「可愛いルディの唇をどっかの馬の骨に奪われるくらいであれば、

兄としてぼくが奪ってしまったほうがルディだって安心だと思うんです」

「その兄としての使い方は間違ってます」

というか、認識とかもう諸々全てにおいて駄目だ。

とりあえず「守秘義務」云々よりこれはどこかに通報したほうが良いだろうか。クレオールはにこやかにさくつとそんなことを考えてみた。

爪の垢を煎じて飲ませる？

さらに夕チが悪くなるので却下。

「ああ、今の方で最後ですね」

予定されていた相手が全て終わったことにやれやれと呟いたクレオールだが、実質人生相談として何も解決していないことは気付いていた。

どうでもいい

という理念で彼は他人の行動など気にしない。

片付けをしておまおうと思ったクレオールの面前に、一人の青年が立っていた。

阿呆な魔術師のような格好で。

「……」

思わず言葉を失うクレオールに、相手は頭に乗せてあるトップハットをひょいっとつまみあげて礼をした。

「こんにちは」

「……こんにちは。えっと、あなたは？」

「さつきリトル・リイ、リドリー・ナフサートが来てたでしょ？」

どんな相談だったか教えてくれる？ ぼくのこと言っていた？ ぼくが好きすぎて困ってなかった？ ぼくのことならぼくに相談してくれればいいのにな？」

ではコレが彼女曰くの変態か？

クレオールは眉間にちよつとばかり皺が寄るのを感じた。
変態というか、変人？

「ついでにぼくの相談も聞く？」

あのね、ぼくってばリトル・リイの為なら三日三晩励める自信があったんだけど、一晩で三日続けてすると実際は結構体力的に色々大変だということに気付いたんだよ！ ちよつとインターバルが欲しいし、三日続けてってちよつときつい。ぼくも年かな？ それにね、自分で仕方なくすますのと愛するハニーをせつせと抱きながらするのは色々違う訳でしょ？

一回づつちゃあんとリトル・リイだって気持ちよくなって欲しいし。やっぱり鳴かせたいっていうかさ、わかるかなー」

くだらだらと相談なのかよく判らない戯言を実に楽しそうに吐き出し続ける男の前に、クレオールは内心で呻いた。

「今まで気付かなかったけど、一つ一つの反応が凄く胸にクルよね。必死に我慢しているのに喉の奥からそれでも漏れちゃう声とか、眉間に寄せた皺とか！ あ、次は目隠しとかどうかない。ぼくの友人が目隠しされると不安と期待で凄い感覚がイイって言うんだけど、お兄さんはどう思う？」

変態というのは思い込み。

思い、込み……？

クレオールは瞳を伏せてとりあえずこの仕事は自分には向かないことを悟った。

少し前に不安そうにしていた少女を思い出し、ちらりと彼女に「すみません」という気持ちを一瞬だけ思い描いてみたものの、今はただ

自分の女主人とまったりとお茶がしたい、自分の為に。

にーちゃんと嫁（王道）

一見して外国人だと判る容姿をしていた。

外交の父親についてやってきたというナーナ・トーラという変わった名前の娘は、小麦色の健康的な肌にくっきりと大きな瞳。長い睫毛をして国の習慣だというベールを頭からかぶっていた。

一目ぼれなどというものがあれば、きっとその時の現象がそうなのだろう。

クインザムは異国のその娘の姿に息を飲み込み、軽く瞳を見開いた。

しゃらんと揺れる幾つもの飾りのついたベールは、まるで猫に鈴のように彼女の場所を示す。

それは一種の枷なのだ、確かクインザムは何かの書物で読んだことがある。

女は金銭でやり取りされる商品でしかないのだと。

だからその身はじゃらじゃらとした飾りで飾られ、音をさせることによって逃げることを難しくさせるのだ。

簡単な挨拶もたどたどしい娘、ナーナは控えめに存在し、そしてその父親は俗物だった。

「伯爵、異国の娘は珍しいですか？」

クインザムは微笑んだ。

「異国の娘が珍しいのではありませんよ。私の妹に似ているだけです」

港に行けばナーナのような娘は珍しくない。

先に言ったように、彼女の国の女は商品でしかなく、奴隷制度が無

いとされるこの国にも奴隷まがいに買い取られる娘が多く居る。
当然、あまり褒められたことではないが。

「妹さんに？ 伯爵の妹さんであればさぞお美しいでしょうに」
見え透いた世辞だ。

クインザムは微笑を湛えて「生憎と私とはまったく似ておりません」
と相手が戸惑うような言葉を返す。

じつと見つめていると、男は居心地が悪そうにごほんつと咳をし
た。

「うちの末の娘が気に入ったのであれば、どうです？ 金二袋程度
で構いませんか？ いや、よければ伯爵の持つ一番小さな所領を譲
ってくださいばいい」

勿論それは決して安い値段ではない。

こそりと潜められた言葉に、クインザムは唇の端を持ち上げた。

「彼女と少し話しがしたいな」

その言葉に気をよくしたように、父親はこくこくと大きくうなずい
た。

それに合わせてクインザムは軽く手を払うと、近くに行く給仕を招
き二・三耳打ちして、まるで置物のように作り物めいた笑みを浮か
べているナーナに手を差し出した。

「こちらへ」

クインザムの言葉を理解していないらしい娘は、困ったように父
親へと視線を向ける。

父親はにこやかに母国の言葉で話しかけ、そしてナーナは目に見え
て強張り、戸惑いを見せたが父親の叱責にクインザムの手を取った。

習慣の違いがその手にもみられ、その手には手袋ははめられずに直
接染料のようなもので綺麗な模様が記されていた。

クインザムは彼女を庭へと連れ出した。

おそらく、その間にあの男の処理は済む　人間の売買は公に禁じ
られた大罪だ。何より、他国の所領を望むなどあつてはならぬ。

クインザムがナーナを連れ出し、広く作られた庭園の松明近くへ
といざなう頃あいには、ホールのほうではあわたましい足音が聞こえ
ていたが、クインザムは無視した。

不安そうに見上げてくる大きな瞳は、漆黒のようにも濃緑にも見
える。不安そうな小さな唇は、異国の言葉をつむいだ。

『あの、私は……イヤです』

きちんと気に入られるように振舞うんだ。

先ほど父親から叱責を受けていた娘は、ぎゅっと手を握り哀願す
るようにクインザムをみあげ首を僅かに振った。

『私は……』

自分が父親に売られようとしていたことは理解しているのだ。そ
して、男が自分に何をさせようとしているのかを考え、恐怖に身を
震わせている。

クインザムは外交の一つとして当然異国の言葉も学んでいたが、
彼女はクインザムの言葉を理解してはいない。

『あいつ』

「国に帰ったところで、ろくなことにはならないだろう」
クインザムはあえてその言葉を口にしたりしなかった。
ナーナがびくりと身をすくめ、言葉がわからないと訴える。

「うちにおいで」

『何を、言っているの?』

「可愛い異国の小鳥。私の屋敷で囀るといい」

優しく微笑みかけ、けれど相手の訴えは完全に無視してクインザムはもう一度、その左手を差し出した。

『どこに行くの?』

「君の新しい家に」

『ねえっ、何を言っているのか判らないっ』

「私は判っているから」

『ねえ、ねえっ、あなたが私を買ったというの? あたしをっ、あ

……アイジンに、するのっ?』

強く突っぱねて逃れようとする娘に、クインザムはクっと喉を鳴らして笑った。

「クインザムだ」

とんとんっと自分を示して言う。

「ク・イ・ン・ザ・ム」

ゆっくりと区切って告げ、今度はナーナの手を軽くつつくようにして「ナーナ」と言う。

すると彼女は少しほっとした様子で『あなた、クインザム?』と問いかける。

その言葉にクインザムはうなずいて見せた。

『でも! 私、イヤですからっ』

「さあ帰ろうか」

『ちよっ、ねえっ、どこに行くのっ』

クインザムはナーナの手を取り、嬉しそうに自宅に帰還した

クイン兄ちゃんは愛妻家です……

にーちゃんと嫁2

『どこどこ？ 私帰りますっ』

ナーナは突然連れてこられた屋敷に戸惑っていた。

父親は顔を出さないということは、自分は売られてしまったに違いない。長女でもないナーナの扱いなどそんなものだと理解してはいたが、だからといって言葉も判らない異国の人間のアイジンになど突然なりたくなかった。

たとえ相手が綺麗な男でも。

『ひどいわっ』

悲観して言う言葉に、クインザムは家人にナーナの部屋を用意するようにと告げて、上着を脱ぐと置かれている書棚から一冊の辞書を引き出した。

『ねえ、私をどうする気？』

ぱらぱらと辞書をめくりながら、クインザムは微笑を浮かべ、

「さて、どうしよう」

『女をお金でやりとりするなんて最低なことだと思わないの？』

「金銭授受は無かったよ。安心するといい。君は売り買いされてない」

『なに、何を言ってるの？』

「さて、何かいい単語は……ああ、あった」

クインザムは指先で辞書の文字を追い、ある単語でとめると、ちよいちよいつと指先でナーナを招いた。

ナーナが眉を潜めてその手元を覗き込む。

『自由』

ナーナはその単語をぎこちなく拾い上げ、不信な様子でそっとク

インザムの顔を見た。

『自由、私 自由』

「そつだ」

『……つまり、じゃあつ、あなたが買い取ってあたしを自由にしたの？ あたしを自由にしようつて魂胆ねっ』

「いや、なんか微妙に違うんだが、いや、ちがく無いような……」

ナーナはふと思立ち、クインザムの手にある辞書を奪い、同じようにばらばらとめくってみた。

言葉を通じないというのはもう本当に厄介だ。

そして何より、ナーナの国では識字率も低い。

自国の言葉だろうと、単語一つ抜き出すのはたいへんな作業だ。

かるうじて判る単語から『イヤ』を抜き出すと、ずいっとクインザムに示して見せた。

トントントと示す。

クインザムはその単語をじっと見つめ、ついでナーナの顔を見た。

トントントともう一度文字を示す。

「愛してる」

「アイ、シテ、ル？」

異国の言葉は言いづらい。

うんうんとうなずき、ナーナはぱたりと辞書を閉ざした。

「クイン、アイ、シテ、ル！」

よし、はっきり言ってやったわ！

『判った？』

誇らしげに言うと、クインは「うっ」と小さく呻いて横を向き、小刻みに肩を震わせたかと思うとがばりとナーナの両肩を引っつかみ、するりとそのベールを落とす。

「ああ、もう、なんていうか可愛い」

そのまま首筋に顔をうずめてくる男にわたわたと慌てながら逃れようとしたが、クインザムは一向に気にするそぶりを見せずにナーナの腰を引き寄せた。

『な、何するのっ』

「何しようかな」

『私の国では、男に肌を見せたら駄目なのよっ』

「うちの国でもだいたいそんな感じだよ」

『結婚できなくなるっ』

「私の妻になればいい」

『アイジンはイヤっ』

さすがに愛人では無いと言ってあげようかと思ったものだが、勘違いさせておくのも面白い。

クインザムは一旦突き進む手を止めたがすぐに再開した。

異国の衣装は一枚布を巻きつける形で、それをとくのはもどかしい。

差し込んだ手が地肌に到達すると、しっとりとしたその肌触りと共にナーナが涙声でやめて欲しいと訴えてくる。

「ナーナ、欲しいと言って」

『なに？ 何なのっ？』

「欲しい」

「……ホシ、イ？」

大きな瞳に涙粒を浮かべてたどたどしく呟かれた言葉に、クイン

ザムは笑みを浮かべた。

「欲しい？」

「ホシイ」

ナーナは自分の上にのしかかる男が繰り返す言葉を『止めて欲しい？』という確認なのだと思えた。

暴れる娘の前に、さすがに理解を示してくれたのだろうと。だから相手の言葉を、嬉しそうに繰り返して見せた。

「クイン、欲しい、アイ、シテル」

クインザム、ヤメテ、イヤ！

「ナーナ、クイン、アイ、シ、テル」
必死に訴えるナーナに、ルディエラは、

「まあ、判ったつてば。ナーナは本当にクイン好きだよね」と、あてられたようにはたはたと指先で顔をあおいだ。

『人の体を好き勝手するあんな人嫌いなのっ』

一生懸命訴えています、なかなか理解は得られません。

魔女猫

*嘘ではないけど本気にしちゃいけない。

【魔女と白い猫】あらすじ&人物紹介。

魔導師と魔女の下らない喧嘩のあげく、あやうく全殺しになりかけた魔女は魂と体とを引き離して自らを治癒しようとしたのだが、気づけば自分は子猫の中。そして体はいつたどこに？ そんな猫になってしまった魔女が警備隊長に飼われてしまったり、魔女に虐められたり天敵をからかったりしてちよっとは心を成長させていくのかもしれないドタバタコメディ。

ブランマーヂュ

本編の主人公にして思い込みの激しさと性格の悪さで世の中を渡る小娘。猫になってしまい苦手だった警備隊長に飼われ、まさに猫可愛がりされるハメに。

猫になったと思えば猫耳猫尻尾のお子様姿にされ、魔女に下僕のようにこきつかわれ、あげく自分を半殺しにした魔導師とペアにされてしまう。

人生踏んだり蹴ったり。いつか嫁にいきたいと思っているのだが、気づけば自分の周りには猫フェチや幼女趣味、DMなどの変態しかないことに気づく。変態を自ら作っていると思われるのだが、どうやら当人は気づいていない。

自称17歳 17までに脱処女。だったのだが、生憎とそのよくなことにならなかった為にとりあえずそういうコトがない限り自

分は17だと言い張っている。口が悪く他人を虐めるのが好きだが、最近ではキレがない。まわりの変態とかに圧倒されている様子。

ロイズ・ロツク

この人をエイルさんより先に書くことで、書き手の命まで危ういのではないかという危惧がなされる。けれどとりあえずこの人が先。本編登場はこの人が先ですよ！

町の警備隊第二隊の隊長。ブランには目つきの悪い熊扱いされている。排水溝にはまった馬鹿な猫を飼うことにしたが、それが実はブランマージユであることには未だに気づいていない。猫の目がブランの目に似ていることから「ブランマージユ」という名前を付けてしまう。毎日猫と一緒に風呂に入り、毎日一緒に寝台で眠る。ブラン曰く猫フェチだが、おそらく他の人間から見ても極度の猫フェチ。猫のブランと魔女のブランを重ねてみていて、猫ブランのしぐさに七転八倒する日々。わりと早い段階でブランが好きであることに気づき、精一杯護ろうと動く。

別称 不憫王。

ロイズが好きです という奇特な方も最近は多くいるのだが、その愛はどうやら奇妙な特色があり「不憫でない彼は彼じゃない」「ロイズは不憫でいるからこそ」とまで言われる。いろいろな人生はつらいことが多いようだ。

エイル・ベイザツハ

悪魔類鬼畜目エイル属

人間だが、どうやらその性質は悪魔に

近いと思われる。少なくともブランはそう思っている。ブランマー
ジユを半殺しにし、今は大魔女に命じられてブランマージユの人生
に多大に関与している。魔女猫においてエロ担当筆頭と思われる。

ブランマージユを便利アイテムとして所有したいと思っていたの
だが、その感情は今では別方向にいつてしまったようで、ブランマ
ージユを舐めたりかじったりやりたい放題している。どうやら手早
くさっさと押し倒してしまいたいようだが、ブランマージユの体が
本体でないことを熟知しているので、とりあえず紛い物を抱くなど
矜持が許さずに日々苦悩している。心がせつまい。変態幼女趣味だ
と思われているが、その実態はただの陰険根暗であって変態でも幼
女趣味でもない……はずである。

シユオン

ブランマージユの使い魔。正体は蝙蝠。現在の外見はエイル・ベ
イザツハと酷似している。エイルへの嫌がらせの為に姿を変えられ
てしまった可哀想な蝙蝠だが、主への愛は激しい。何をされても許
せる。使い魔として使役されているが、その実能力値は低い。得意
なのは家事全般。趣味はブランマージユの観察。とくに好きなのは
寝ているブランを眺めるのは至福。時々ブランの寝台に入り込んで
一緒に寝ている。ブランマージユの入ったあとのお風呂で入浴とか、
ブランマージユの下着を洗うのも大好き……実はやってることは駄
目駄目だが、それでも魔女猫の癒し系。

レイリツシユ

大魔女。ブランマージユの師匠の更に師匠。その年齢は不詳。漆黒
のストレートの髪に魔女の三角帽をかぶる美貌の魔女。王宮に仕え

ている　魔女を愛し、魔女の為に人間との間のクツション材として生きている。キス魔。三体の使い魔を従える最強の魔女。
現在「実験」と「遊戯」に興じているらしい。

エリイファイア

ブランマージユの師匠。その外見はロツテンマイヤー。手には乗馬用の鞭。目元には薄い眼鏡が標準装備。レイリツシュという駄目師匠を見て育った為にやたらと堅実なおばさんになりはててしまった。使い魔はオウムと他に一体。現在は自分の家とブランマージユの家との往復で暮らしている。すでにブランマージユの家を浸食したと噂あり。

おっかない。

イーシャス

白髪のやたら背の高い青年姿を持つレイリツシュの使い魔。ブランマージユには「馬面」といわれている。傲岸不遜、偉そう。その正体は処女大好きな一角獣。エロ担当その三。
強大な魔力を持っているが、実は戦闘には向かない。荒事よりも閨事のほう得意らしい。
そのへんでごろりと横になっていることが多い。

アンニーナ

エロ担当その二。男好きの美女　赤い髪が嫌いで現在は黒紫に染め上げている。巻き毛。六男四女の長女……ええ、大家族のねえ

ちゃんです。基本的にはエロエロに浸って生きているが、実は義理人情にあつい。自分の懐にあるものに対して手を振り払うことができないう人よし。魔法の妹であるブランマーヂュの人生を狂わせたエイルを憎んだ時期もあったが、今はエイルの落ちつぷりをせせら笑って見学中。使い魔はいがいに平凡顔の女タイプ。正体は鷹。エロエロだが、馬面の相手はしたくないらしい。

ファルカス

アンニーナの弟。通称カス。ブランマーヂュを使い魔と思い込みついで姉からの適当情報に従ってブランマーヂュの腹に剣を叩き込んだ。その後エイル・ベイザツハに半殺しの刑を幾度か施行され、現在はエイル・ベイザツハの下僕と成り果てている。ついでにロイズ・ロツクからまわし蹴りも食らってる。魔法猫で一番痛い思いをしているのだが、その影は薄い。

クエイド

ロイズ・ロツクの部下。程よくさぼり程よく生きるをモットーに呑気にすごしている。最近ロイズの好きな相手が誰だか判ってしまった様子でからかって遊ぶようになってしまった。魔法猫で一番まっとうな人かもしれない。ただし、まっとうではあるがまじめではない。

ギヤンツ・テイラー

Mです。異常。ではなく、以上……

おそらく、ブランマージュさえいなければ、素晴らしい人。ブランマージュに蹴られて何故か天国をみてしまったらしく、いらいブランマージュに虐めて欲しくてしかたなくなってしまうた。だが、その様子があまりにも気持ち悪いのでブランマージュに嫌われている。病気にさえならなければおそらくブランマージュの婿第一候補。現在エリイフィアに取り入って婿入りしようと画策しているとかい
ないとか。

基本的には【魔女猫番外地】にのみ生息。

お家人

エイル・ベイザツハの家の使用人。名前はまだ無い。セバスチャンとかではないので注意。長くエイルに仕えているが、気苦労が多い。ブランマージュのおやつを運んだりしているが、幾度かエイルが小娘様を襲っているのではないかというシーンに出くわしたり出くわさなかったりで最近寿命が縮んでいる気がしてしょうがない。

エリサ

ロイズ・ロックの家の使用人。

朗らかで働き者。猫をかわいがっているが、時折うつかりミスをしたりもする。最近の最大のミスは、クエイドに飼い猫の名前をばらしたことだろう。

おおまかにはこの程度しか人物がないことに気づく。

誰か足りないだろうか……お家人もエリサもきちんとして書いてあるの

で大丈夫。あ、ロイズもいるよね。って、ここでロイズが忘れられるってまずないだろうにっ。

あ、ティラハールがいない……

ティラハール

謎の使い魔。その正体は未だ判らず。レイリツシュに喉を潰され、喋れるのだがだみ声。意思を伝える時はもっぱら接触によって伝える。言葉を操ると他人の神経をスタスタにする怪電波を垂れ流す。

ファルカスが食べれなかったことを残念に思い、きかいがあれば食べたいと思っている。

……実はロイズになっっている。

以上、取りこぼしは無いハズ。

なんと最近不憫王のほうが高いのではありませんかという事実あり。といったところで、これはロイズ好きさんのほうがその不憫さに声をあげやすいのかもしれない……

魔法使い。

*本編未読の方はスルー推奨、そして本編読んだ人もある意味地雷。嘘では無いけど本気にしてもいけない、

【あたしの魔法使い。】あらすじ&人物紹介。

家出娘リドリーは婚約者との結婚式三日前に全てを捨ててランナウエイ。

新しい町で新しい自分のスタートを切った筈だったのに、そこは新しいどころか古い自分を知っているけったいで変態な魔術師もどきの巣があった。

女郎蜘蛛よりもタチの悪い魔術師につきまわとれてしまったリドリー、彼女の昨日はおるか明日はどっちだ。

リドリー・ナフサート

生まれた瞬間におそらく不幸の星に好かれた。子供の頃は物静かで控えめだったが、過去を捨てた彼女は乱暴者になりはてている。ほんのささやかな幸せを求めているのだが、生来の不幸のお星様がなかなか開放してくれる様子が無い。

本編の主人公。

魔術師。

他にもけつたいな名称は一杯あれど、何故か本名だけは出てこない。人生的にはすでに楽隠居に入っている。一般的には良い人と思われているが、ことリドリーには天敵としかいいようがない。口を開けば下ネタを繰り広げ、リドリーのスキについては抱きつき匂いをかぎ舐めるといふ暴挙にでる。

三日三晩励める自信もあるらしい。その根拠はどこからくるのか不明。

アマリージェ・スオン

初恋は魔術師だった。おそらく彼女の躰はここにある。兄が穏やかなために多少強気のお嬢様になった。リドリーを悪女だと思っていたが、今は考えを改めてリドリーのよき友人としての立場を貫いている。

が、どうも性格の根底はあまりよろしくない。他人の不幸をちよつと控えめに笑っている様子が随所に見られる。

リドリーのことまったりと観察しているのかもしれない。

アジス

若干十一歳の男前。頑固で口が悪いが一本気。思い込んだらめるタイプなので宗教とかにかぶれ易い。家出の拳句に祖母の家についている。作者には常々「へんな名前でごめんね」と思われている。「アルジェスが本名ってコトにしてやろうか？」と裏設定で練られている。「アルジェスなんて名前恥ずかしくていえねえ！」っ

てコトでどうだ？

マーヴェル

リドリーの元婚約者。いや、もしかしたら婚約破棄しているわけではないので今も婚約者かもしれないんだぜセニョール。だがそんなことを魔術師に言ったらかるーくどこか僻地に飛ばされるおそれがあったりする。現在もリドリーを探しているが、リドリーの妹とやっちまった為に読者にもものすごく嫌われている。

ティナ

リドリーの妹。病弱だったが今は完治。だがまたしても寝台の住人と化しているという噂あり。彼女もある意味不幸を背負っているが、マーヴェル同様読者には激しく嫌われている。自己中。

エルディバルト

28歳。以前に婚約者に婚約を破棄されている。だがその理由は「すがって引き止めて欲しかった」というのは宮廷の娘達には有名。実はエルディバルトは女性関係の浮名がすごい。そのかわり素人娘には手を出しません。そういうところは狡猾な策士かもしれないが、現在の婚約者にハメられて捕まっている。魔術師が大好きすぎて、夜伽を命じられたら素直に脱げると思われる。そういうところが魔

術師に煙たがられているのかもしれない。

ルティア

エルディバルトの婚約者。エルディバルトの上に乗っかり、あげくその様子を養父に見せるといふ計略によりエルディバルトをしつかりとモノにしたほえほえ娘。本能のままに生きているため、その実中身は真っ黒です。

エルディバルトさえいれば幸せ。ある意味魔術師と一緒の性格。

マイラ

アジスの祖母にしてリドリーの働くパン屋のご主人。優しくて善人。人々に好かれるよいおばちゃん。だが彼女が時折作る新作パンは人々を絶望に陥れることもできる最終兵器になることもしばしば。魔術師を悶絶させ、アマリージェを死にいざなおうとした経歴がある。

これでだいたい全部かな、と思いついてアマリージェの兄にして領主様が不在であることに気づく。

まあ、彼はその程度の男です。

なんといつても、上記の説明分は何の資料もなく書き上げられましたが、兄上の名前はぱつと出てこない……ああ、ジェルドだった。よかった、本編読み返さなくてもできてきた。

まあ、その程度のキャラクターです。

陽だまり

*嘘ではないけど信じてもらえない、

【陽だまりのキミ】あらすじ&人物設定

二十一の時にヴァルフアムが引き合わされたのは、なんと自分よりも八つも年下の義母。この小娘様を父親におしつけられた息子の涙なくしては語れない切ない育児日記。なぜ二十歳を過ぎて自分の父親の嫁を育てなければいけないのか。いいや育てる必要は無い、無視を決め込もうとした義息だったが、相手は無視できない程に厄介な小娘だった。義息と義母のハートフル・コメディ。

ヴァルフアム

陰険、陰湿、粘着質、嘔吐き。あまたの悪評を持つ本編の主人公。誰が何といっても主人公。性格は悪い。侯爵家の跡取り息子。ついでに説教魔、二時間だつてノンストップで説教ができる。本気になった彼は一晩中説教を繰り返したこともある。キング・オブ・おこりんぼう。当初こそ義理の母となった小娘様を無視しまくっていたものだが、そのうちに妙な方向に彼女へと愛着を持つ。その感情は日に日におかしな方向に転じている。義母を騙くらかして抱きしめたりキスしたりとやりたい放題である。

超絶心が狭い。

ファティナ

13歳で嫁いできた義母。それまでほぼ家庭で放置されていた為、基本的にうすらぼんやりしている。騙されやすい。時々屋敷を抜け出すなど行動的な場面もあるが、たいていの悪事はヴァルフアムに発見され、説教されまくっている。神様の前で愛を誓った旦那様が大好きだが、旦那様と一緒に暮らせないことで時折り落ち込む。ついで子供が欲しいという定期的な病があり、これもヴァルフアムの怒りがかつている。家族という言葉に弱く、ヴァルフアムを義息として大事に思っている。ポケ担当。
翡翠の瞳に蜂蜜色の猫っ毛を持つ。

クレオール

執事。屋敷の全てを取り仕切っている。たいていの場合静かに控えて物事を見守っている。ファティナを護る会会員一号。ファティナの良き理解者。ファティナが一人で泣いているとたいてい慰め役をやっている。最近彼の日記がweb拍手上で暴露され、実は腹が黒いのではないかという疑いを持たれている。いいじゃないか、愚痴くらいこぼしても。と、本人が思っているかどうかは不明。実はおまえはヴァルフアムが嫌いなのか？と問いかけたが、その実ヴァルフアムを嫌っている訳ではないらしい。ただちょっと呆れているだけだ。

エイリク

ヴァルフアムの腹違いの弟。ファティナ16の時点で実は11歳。ヴァルフアムにもくっそ年齢を把握されていない。ヴァルフアムがエイリクの年齢を思うシーンは幾度もあるのだが、実はきちんと合っているものは皆無。兄を尊敬しまくっている。義母のことは嫌っている。色素の薄い金髪に碧玉の瞳。外見はヴァルフアムを小さくした感じ。兄には子犬のように尾を振るタイプ。

カディル・ソルド

自称・ファティナの家庭教師。ファティナの夫であるヴァルツの部下。ファティナを姫と呼び、どうやら「ファティナの為に生きている」らしいのだが、ヴァルツには「二枚舌」とか「狐」とか思われている。ファティナの婚姻のオりの立会いを勤めている。ヴァルフアムのいうことは利かない。

ディーン・ゼルト

ヴァルフアムの直属の上司。騎士団所属の執務担当官。という名前のぐーたら。その仕事の大部分をヴァルフアムに押し付け、自分分はたいてい「なーなーっ」とヴァルフアムに愚痴をこぼす日々を送っている。今のところあまり出番は無い。だが【陽だまりのキミ】が終了した後、続編を書く気持ちで湧けば彼には一応出番がある。今現在はただの女好きの遊び人。

リルティア

ファティナの友人。奔放な少女。ファティナが領地にいた頃からの友人。もともとは体が弱く、療養の目的でファティナのいた地に時折訪れていた。ファティナとは仲良しだが、ヴァルフアムには嫌われている。

セラフィレス

リルティアの兄。陽気な性格でヴァルフアムを「面白い遊びあいで」として認定中。ファティナの兄を自称し、あげくヴァルフアムを甥っ子呼ばわりしてかかっている。年齢的にはヴァルフアムよりは年下。ファティナのことを気安く「ファティ」と呼んだことにより、ヴァルフアムに「敵」認定をされている。

メアリ

ファティナの事実上の家庭教師。住み込みで雇われている。ファティナを護る会会員二号。心優しい主の為に色々と努力しているが、あまり報われていない。ヴァルフアムのこととは苦手としている。

ヴァルツ

ヴァルフアムとエイリクの父親にして、ファティナの夫。

危険遺伝子の持ち主。女好きでファティナを含めて四人の女性と結

婚した経緯がある。だがさすがに13才の小娘は守備範囲ではなかつたようで、その世話を息子に押し付けた。そのおかげで彼の息子が苦悩の日々を送っているのだが、そんなことはどうでもいい仕事人間。現在は領地にある屋敷で仕事に明け暮れている。ヴァルフラムに幾度も呪われ、最近ではすっかり「死んでしまえ」とまで思われている。

ハートフル・コメディ……

のわりに人物紹介がなんだか殺伐とした感じのものもあつたかもしれません。主人公がすでに駄目駄目ちゃん。

たまさ。の書く物語としては珍しく男主人公。

性格の悪い主人公ですが、なにやら最近では「不憫」とか言われている。こんなに悪なのに、「不憫」と言ってもらえるなんて、なんて美味しいヤツめ。

この物語はもともと、たまさ。の書いた一本の話の視点をヴァルフラムに強く固定して書きなおされている。最近ファティナ視点でも書かれているが、基本的にはヴァルフラムが主役。ベースは書きあがっている為、終わらないなどというじたいには陥らないもよう。

連載三本のうち一番人気が無いのが悩み（笑）

ウイル・ヒギンズの観察記録

七月二日、火曜日

そう書き出し、ナシユリー・ヘイワーズは肺を一杯に膨らませ、ついで一息に押し出した。

日記というかこれはある一人の男の観察記録に他ならない。

相手の名はウイル・ヒギンズ　そのへんによくありそうな名前の現状二十六歳の青年将校だ。階級で言えば少佐、そしてナシユはそのヒギンズの補佐官という立場だった。

さて、問題はウイル・ヒギンズのことだ。

ウイル・ヒギンズは黒髪に湖畔の色の瞳を持っている。あまり見ない組み合わせだ。特徴的といってもいい。そして、彼の特徴の一つに、物忘れがある。この男は昨日起こったことも忘れる　かと思えば、一年前のことを突然的確に指摘したりするのだ。

「年寄りというものは近くのものは見えなくとも、遠くのものが見えたりするものだ」

などと言葉にした拳句、口の端に笑みを浮かべてみせる。

普段はまったく不機嫌が服を着て歩いているような男だというのに、時々そんな冗談まがいのことを口にするものだから、どうにもそのひととなりがかめない。

はじめて補佐官という職種についたおり、ナシユも相手のことを細部まで知り尽くし、その動き一つで相手の全てを理解できる有能な補佐官になろうと誓った。

その観察記録もすでに半年以上続いている。その文面を読み返せば、ウイル・ヒギンズという男が真面目な男であり、また上層部に覚えもめでたいということもよく判る。

ただし、半年以上彼の下で働いていてもはつきりとその生態が理解できない。生真面目な顔をしていたかと思えば、その表情のままおかしいことを言う。自らの副官を笑わせようと思ったのかもしれないが、もしかしたらただの独り言かもしれない。

さて、昨日のウィル・ヒギンズは黙々と仕事をこなす勤勉さを見せた。新しく西側に作られる皆の警護系統を構築する為に、他皆の現状報告書に目を通し幾つかの要点を纏め上げて他皆への訪問日時を決めていく。

ナシユは補佐官として資料を集める為に奔走し、紅茶を入れ、意見を求められれば口を開いた。

「一度北東砦に向かかねばならない」

「日程を組むのでしたら、今週末が良いと思います。再来週に入れば合同訓練の準備が入りますから」

言わずとも良いことだが、一応そのようにナシユが告げたのだが、ウィルは机の上に両肘をつけて指を組み、中指と人差し指をわずかに動かしながら眉間に皺を刻みこんだ。

「日が悪い」

この上官は女のように占いででもするのだろうか。

新聞のコラムにでも「今週末は旅行は厳禁。駄目、駄目、だーめ」とか？

生憎とナシユは占いなど見ないようにしている。信じていないからではなく、そんなもので容易く自らの心が浮き立つことがイヤなのだ。もし「今日は最高。この日に告白すればどんな異性もあなたにメーロメロ」などと書かれていたら、一日阿呆な考えに囚われてしまいかもしれない。

ただし、生憎と恋煩う相手は今のところいない。いないので「損した」と思っただけで沈むことだろう。

なんの根拠もない「損」の為に。

さて、ウィル・ヒギンズは鎮痛な様子でカレンダーを見ていた。まるで睨みつけていれば日が良くなるとでもいうかのようだ。その根暗とも言うべき性格に合わず明るい湖畔の色合いの瞳はたっぷり二分ほどはその数字を睨みつけ、ついで観念したように、「中尉」

と、ナシユを呼んだ。

「君は、どうするつもりだ」

その問いかけの意味がつかめなかった。

何故ならナシユはこの男の補佐官なのだ。どうするも何もない。

ウィル・ヒギンズの日が悪かるうが何だろうが関係がない。

「当然お供させて頂きますが」

「判った。努力しよう」

どんな努力が必要であるのかナシユは突っ込みたい心境だったが、その時にできる筈がない。

だからこそ、この記録でナシユは刺々しく言葉を連ねた。

努力って何？

努力すれば日が良くなるのか？　どんなだよ。

とりあえず文字の中とは言え、さすがにナシユは士官学校で覚えた低俗なスラングは入れずにおいた。この記録はそいつだったことを記録するものではない。まったく理解できない上官を理解しようという純粋な職業的観察だ。

ナシユは翌日、ウィル・ヒギンズの記録を書き込む為にノートを開き、昨日より深い溜息を吐き出した。

今日のウィル・ヒギンズは不機嫌だった。

半眼に伏せた瞳で、仕事をこなしながら時々「死ね」「くたばれ」「ふざけるな」とぼそりと言うのだ。

基本的にウィル・ヒギンズという男は寡黙で実直。生真面目な男だ。

ナシユはそんな相手の補佐官に任命された時は喜びと共に「うわ、なんか面倒くさい」と正直思った。私生活に関わるような付き合いをしなければならぬ上官も面倒臭いが、四角四面に仕事に向かう人間も付き合っていくうえで気苦労があるものだ。勿論、やたら女性部下をからかうような上官などもつてのほかだが。

「少佐？」

おそらく言葉を落としていることに気付いていないのではないかとナシユはおそろおそろ声を掛けた。すると、ウィル・ヒギンズは手をとめ、一旦息を吸い込むと普段の彼に戻った様子で顔をあげ、しばらくナシユをひたりと見つめてゆっくりと息をついた。

「何だ、中尉」

「いえ　珈琲をお入れしましょうか？」

「そうしてくれ」

即答で言いながら、ふっとウィル・ヒギンズは眉間に皺を刻みつけた。しばらくの間そうしていたかと思えば、考えをはじくように軽く首をふる。

いったい何が気に触ったのか判らなかつたが、何よりも相手の気持ち理解しがたいのだからすでにナシユは色々諦めていた。

相手と自分の間には性別の違いしかないような気がするが、相手はおそらく妖精の取替え子であろう。意思の疎通を図るのも困難なのだから、諦めはむしろ必定だ。

「中尉」

「なんででしょう」

ウィル・ヒギンズは珈琲の香りを楽しんだのち、角砂糖を四つど

ばどばと落とし込んで銀色のティ・スプーンでかき回した。

「明後日、私に言って欲しい言葉があるんだが」

「明後日、ですか？」

「私は知っての通り、物忘れが激しい。明日ならともかく明後日には忘れてしまいそうだ」

そう口にするウィル・ヒギンズはどこか冷やややかで自嘲的だった。確かに、自らの欠点を口にするのはとても矜持が許せないことだろう。そう思い、ナシユは神妙な表情を作り、決して相手の心を傷つけたりしないように柔らかさを重視して微笑んだ。

「判りました。明後日の朝で宜しいですね」

「ああ。ありがたい」

そう口にしたウィル・ヒギンズは口の端に笑みを浮かべて力強くうなずいた。

ナシユはその時のことを思い出しながら、日記にもきちんと相手の言葉を書き記した。

翌日のウィル・ヒギンズは機嫌が良かった。

いつもと変わらず仕事に励み、そつなく一日を過ごす。そして帰宅する時に上着に手をかけ、ふいにその眼差しをナシユへと向けた。

「中尉」

「はい、なんででしょうか」

「明日から出張になる。迷惑もかけるだろうが、よろしく頼むよ。先に謝っておく」

口の端に笑みを浮かべ、ヒギンズは軍帽に軽く触れて角度を直した。

その眼差しが、どこか面白がるような色を見せた気がしたがナシユはいつも通りにさらりと流した。

さて、翌日 数日分の下着と替えの軍装を鞆に詰めてウイル・ヒギンズの執務室へと赴けば、すでにウイル・ヒギンズは必要な書類を点検している段階であった。

上官より遅れたことを恥じたナシユは、顔をしかめてしまわないように気をつけながら敬礼し、自らの遅れを詫びた。

「いや、君に落ち度は無い。そんなことを気に掛けるな」

言いながら書類に視線を落としている相手に、ナシユはほっとしながら思い出した。

数日前に頼まれていた伝言だ。

「少佐」

「なんだ」

「三番目の引き出しの封書をお忘れになりませんように」

その言葉に、言われたウイル・ヒギンズは怪訝そうに眉を潜めた。

忘れてるよ、本当に。

半ば呆れながら、だがナシユは勿論そんなことをおくびにも出さなかった。

ウイル・ヒギンズは「わかった」と小さく答えると、書類をばさりと机におき、引き出しの三つ目に入れられている封書を引き出し、ついで中身を確認するようにするりと取り出した。

ざっと視線が紙面を走る。

その次の瞬間、ウイル・ヒギンズは一瞬硬直し息を止め、ついでぐしゃりとその紙を丸めた。

「少佐」

持つて行く書類ではないのかと慌てたナシユが声を荒げると、ウイル・ヒギンズは誰かを絞め殺しそうな表情で「くたばれっ」という意味合いの酷いスラングを吐き捨てた。それはよく酔っ払った海

軍の人間が陸軍の人間をのしる時に使われるような到底文字にするのはばかられるような単語だ。

そしてその次の瞬間には、ひどく真面目な様子で頭を下げたのだ。

「すまない」

「あ、いや……え？」

確かにあまりにも程度の低い言葉を耳にすることとなったが、だからといって上官に真摯に謝意を向けられる程のことでもない。

「君には本当にすまないことをした。謝ってすむことではないが、だが」

「あの、少佐？」

「ああ、本当にどうすれば……そうだ。それがいい。結婚してくれ」

何ですか、とつぜん。

あんたとうとう頭煮えたか？

ぎょっとしたナシユはあまりのことにぎつと身を引いた。

程度の低い単語を聞かせた程度で結婚を申し込まないといけない事態に陥るとはどういうことだろうか。

それとも真面目すぎる男というのは、思考が斜めどころかアクロバティックに動くのか。

どちらにしろ、ナシユは上官にするのもイマイチな男を夫にするつもりなどあるわけがない。

「この程度のことでは結婚など考えられません。辞退致します」

「君にとってはどうということはないことだということか」

「当たり前です」

吐き捨てるように言えば、目を見張りウィル・ヒギンズは奥歯をかみ締めた。まるでナシユが平手打ちでもしたかのようだ。

しばらく首でも絞めそうな視線を向けられたナシユは慄いて一歩引き下がり、ウィル・ヒギンズは無理やり体を引き剥がすように向

きを変えた。

「荷物の準備を」

「はいっ」

やっと結婚云々などという戯言を忘れてくれたかと安堵し、ナシユは敬礼したがウイル・ヒギンズの瞳はどこか暗いものだった。

その日のウイル・ヒギンズは最悪だった。

昼近くまで馬を進め、中継地点で馬を交換し、更に先に進む。ナシユのことを気遣うそぶりを見せるのだが、それを自ら振り払うように更に馬の速度をあげようとする。補佐官という立場であるナシユは唯々諾々と相手の行動に従うが、さすがに夕刻間近にぶちりと切れた。

「馬を潰すおつもりですか」

本来であれば目的の場所までは馬を幾度も交換し、三日掛かる。それを二日で行く勢いだ。

すでに本来であれば今夜の寝床として予定していた中継地点を越えている。

どこで泊まるつもりだ。

朝まで馬を走らせるつもりか、この男は。

「すまない」

言われた意味が理解できたのか、ばつの悪い顔をする。

下弦の細い月があがるなか、舗装らしき舗装もされていない道を行くのは困難だ。

ナシユは胡散臭いものを見る視線で上官を見ると、首を振って馬の首を叩いた。

「川が近い筈です。今日はそこで野宿としましょう」

「それは駄目だ」

「これ以上移動したところで馬も人間も疲労するだけです。ご理解

下さるかと思いますが」

刺々しさを含めて言えば、ウィル・ヒギンズは忌々しそうに顔をしかめたがうなずいた。

ナシユはウィル・ヒギンズについてある疑惑を持っている。

それはつまり 多重人格と呼ばれるものではないのだろうか、というものだ。あからさまに違う気はしないのだが、ウィル・ヒギンズはわずかながら嗜好の違いをみせることがある。珈琲と紅茶、食堂で出される食事にしても、よくよく観察すればグリーンピースを残す時と残さないことがある。口の端に笑みを浮かべる時と、ただ黙々と仕事を続けるとき。

その二面性を突き止めようと記録をつけはじめたのだが、半年たった今も謎は謎のままだった。

森の入り口に手早く火をたき、持っていた携帯食料で味気の無い食事を済ませる。水で腹を下さぬようと持参した紅茶を飲んで一心地をつけ、馬の背に乗せていた薄い毛布を体に巻くようにして火から遠くない場で就寝の準備を進める。

ウィル・ヒギンズは不機嫌そうにむっとり押し黙っていたが、手渡された砂糖なしの紅茶を無言で飲み干した。

「まずは私が起きています」

夜盗や獣が出ないとは言えず、ナシユは提案したがウィル・ヒギンズはかぶりを振った。

「いいから君は寝なさい」

「いいえ。私の方が先に」

ナシユは譲ろうとしなかった。相手のほうがやけに気を張っていて疲れているのは目に見えていたが、しかしウィル・ヒギンズは厳しい眼差しでそれを押さえ込んだ。

仕方なく、ナシユは足を抱くようにして座ったまま額を膝に押し当てた。

ぱちぱちと乾いた薪がはぜる音と、火の温かさが適度に疲れた体を

包み込んで眠りの淵へと落としていく。記憶の片隅に以前行われた野外訓練のことがよみがえった。下士官であった頃は野外訓練のほうが多かったくらいで、野宿は当然。そしてまた見張りで起きているのも当然だった。

ウィル・ヒギンズの観察記録2

そしてこれは、呪いだろうか。

ナシユは気付けば温かく大きな手が自分の頭を撫でている現状で目を覚ます羽目に陥った。

生来の冷静さを総動員し、叫ぶことも体を跳ね上げることもしなくてすんだことはまさに僥倖。だが、ぶつぶつと落とされる言葉は激しく恐ろしい呪いの呪文だった。

「すまない、すまなかった。私が悪い　もっと気をかけてやれば、いいや、きちんとこんなことは断れば良かった」

……ぼそぼそと落とされる音は、恐怖いがいのなにものでもない。きちんと覚醒していることを示すべきか。いいや、起きていると知ればもっと恐ろしいことになるやもしれぬ。

ナシユは自らの気配を気取られぬように膝頭に額を押し付けていたらだらと流れる汗と、口の中に無意味に溜まる唾液をどう処理すべきかと苦悩した。

「それとも　君にとって私はどうでもいい男なのか」

え、なにこれ怖い。

貞操の危機とかいうのか、もしかして。

まで、ちよつとまで。何がどうしてそうなる？　ナシユは昼間の突発的な求婚を思い出し、まさかあれは本気だったのかと腹部が冷える思いがした。

「もっと早い段階で突っぱねていれば、君が傷つくこともなかったろうに」

いやいやいや、今、今ならまだ間に合います。

傷ついてないです。あんなスラングどうってことは無い。ケXから

X突っ込んで、内臓XXXXP　とか、そんな品性下劣な暴言ならこの耳はたこ踊りができそうなくらい聞いてます。鼻先で笑いながら下品な応酬してあげればよかったですか？　頼みますからおかしな責任とか感じしないで下さい。

なんならもつと下らない酒場歌をハイ・ソプラノでご披露してもいい。酔っ払った兵士達が品性下劣に披露する歌の一つや二つ、歌って進ぜましようとも。

ナシユは卒倒寸前に陥った。

「責任はとろう」

どんな責任だ、このドアホウ。

さすがに耐え切れなくなったナシユはばしりと相手の手を払い落とし、引きつった表情をがばりと向けて、もつれる舌で声を張り上げた。

「こ、交代の時間ですか！」

「　中尉、いや……ナシユリー、ナシユ。我々はきちんと話し合ったほうがいいと思う」

何故突然名前で呼ぶ。

全身に広がる鳥肌に、ナシユは近くにある自らの細剣をがしりとつかみ、ぐっと立ち上がった。

「少し見回って参ります」

「ナシユ、私の誠意が足りないことは理解している。だが、だからといって逃げていては何も解決はしない」

「私と貴方の間で解決すべき問題など何一つありません」

今日もここにこ明朝会計！

「君が私に対して憤りを覚えることはもつともだ。だが、私はこういう問題を無視してはいけないと思う」

「あんなことでいちいち責任を感じていたら、軍人などやっていられませんか！ 私の職場は男ばかりが多い軍隊なのですよ」

「どれだけ下らぬ言葉をこの耳にいれて生きてきたと思う。」

おそらく、上級士官であるウィル・ヒギンズよりもずっと数多くの猥談を耳に入れてきたし、下らぬ喧嘩で吐き出されるスラングをにやにやしながら聞いてきたのだ。

「いちいち結婚などと言っていたら、今頃私は二十人以上の男と結婚する羽目になる」

だから気にしてくれるなと思いを込めて怒鳴り、怒鳴ったことに對して冷静さを取り戻した。

上官相手だと思いだし、決まり悪く咳払いをし、

「いいですか？」

「」

理解してくれましたね？

そう確認するように声を潜めたが、面前の上官は蒼白になっていた。

「なんとということだ」

……信じがたいと首を振り、

「軍務は君には向かない。もう止めるんだ」

ナシユは気を失いそうになった。

どう考えても、この上官と自分を比べてどちらが軍隊向きかと問われれば自分のほうが軍務には向いている。人間関係しかり、根回ししかり。こんな場所は真面目ばかりで生きていく場ではない。

「いや、だが……おかしい。君はし」

ふつとウィル・ヒギンズは言葉を濁し視線を伏せた。

「処女だったではないか」

……セクハラで訴えるぞ、この糞馬鹿野郎。

しかも何故過去形。

「ふざけるのもたいがいにして下さいよ！ 私は正真正銘現在進行形で処女ですよっ」

「いや、話が見えない」

ウィル・ヒギンズは呆然と呟き、ナシユは指を突きつけた。

「私の処女性が問題でしょうか！」

張り倒していいですか。

ナシユは震える声で問いかけた。

「問題だ。つまり、私は いや、私と思い込み、君はワイトに手

……」

苦痛に呻くように、ウィル・ヒギンズは言った。

「手籠めにされたのだろうか？」

テゴメ……手捏ねハンバーグは美味しいですよね。私も大好きです。粗挽き肉にたっぷり胡椒を利かせて

「てごめ……」

いや、ハンバーグじゃないだろう。

「君にとっては寝耳に水だろう。こんなことを言えば頭がおかしいといわれるかもしれない。責任逃れの嘘と思えるかもしれない。だが、君に無体を働いたのは私ではない。私の双子の兄のワイトだ。恥ずかしい話だが、本来であればあれが一人で領地の管理をしなければいけないのだというのに、あれには苦手分野があり時折り入れ替わって私が処理をしていたんだ。上官は知っているが、君にもきちんと言っておくべきだった。まさかあれが君に無体なまねをするとは思っていなかった」

「……」

「確かにワイトは突然週末の約束の日付をずらされて不機嫌だった。

だが、だからといって君に手を出すなんて。くそつ。帰ったらやつをぼこぼこにすると約束しよう」

ナシユは体中の力がへたりと抜けるのを感じた。

あっさりと告げられた言葉の軽さ　いや、重いのだが、そのあっけなさになきそうになったのだ。

この半年の間、この上官は病なのかと思っていたが、フタを開いてみれば　双子。別人であればそれは確かに嗜好も違かるう。

というかなんたる適当な。それでいいのか、軍務。

「本来であればワイトが責任をとるべきだろう。だが　ナシユ。

君は私だと思つて抱かれたはずだ。事實はどうあれ、君にとって処女を捧げた男は私だ。ワイトとのことは全て忘れさせると約束しよう。酷い悪夢など忘れて私に身をゆだねて欲しい」

口の端に笑みを浮かべていた男が面前の男でないということを鈍い思考回路で整理していたナシユは、舌がしびれるような気持ちでゆっくりと問いかけた。

「封書の中身は何と」

「……君にとつて気分の良い文言ではない」

「言つて下さい。一言一句違えずに」

短時間でざつと目を通していたことを考えれば、長い文面では無かった筈だ。

真実いいにくそうに、ウィル・ヒギンズは視線を伏せてゆっくりと口を開いた。

「ナシユちゃんの処女はいただいた。むっちりおっぱいご馳走様」

力いっぱい面前の男の頬を張り飛ばし、ナシユは引きつった笑いを浮かべた。

「遊ばれてるだけですよ、馬鹿ですかっ」

「女性との関係を遊びだなどと、そんなことは許されない。ナシユ」

「違う！ あんたが遊ばれてるんだっ」

このボケナス。

話が通じないっ。

誰が誰に処女を捧げたって？

もう上官もへつたくれもなく、ナシユは奥歯をぎしりときしませて怒りの眼差しを突きつけた。

「その手紙が嘘なんです。私は誰ともそんな関係になったことは無い。判りましたか！」

「……そうなのか？」

「そうですっ」

ぜーぜーっと肩を上下させて言うと、やっと自分の気持ちも多少は静まった。

ナシユは乱れた前髪をかきあげ、ぶるりと首を振った。

面前の上官はナシユの頭からゆっくりと視線を下げ、足元までを確認し、またゆっくりと視線をあげて胸元で視線を留めると小さく息をついた。

「良かった いや、すまない。おかしな話をしてしまった」

「もついいです」

「そうか。君は処女なんだな。良かった」

安堵しているのかどうか知らないが、何故胸元を見ながら無表情で言うのか。

そんなところに顔はない。

しかも処女処女うるさい。悪かったな。

「そうか、良かった」

ナシユは引きつりつつ、自然と一歩下がった。

「見張りを交代します。どうぞお休み下さい」

「すまない。頼もう。今日は何故か疲れた気がする」

ナシユは口元が無駄に引きつるのを感じながら、こっちの台詞だ馬鹿と脳内で幾度も書き上げた。

ウィル・ヒギンズは先ほどのナシユと同じように焚き火の近くで片膝をたてるようにしてすわり、毛布を肩に掛けて寝入ろうと動き、ふと思い出すように視線をあげた。

「ナ 中尉」

「なんですか」

「……今回の件は忘れてくれるだろうか」

「明け方までには」

「それと、兄のことも」

「他言はしません」

半年悩んだ自分が可哀想だ。なんと下らない結末か。

「すまない。これからも時折り入れ替わるだろうが その時は君には言うようにする。君には迷惑を掛ける」

掛けた、ではなく掛けるときた。

ナシユは深く嘆息し、軽く手を払った。

「結構です。言われずともおそらく見分けがつきますから」

ウィル・ヒギンズは目を見張ったがやがてゆっくりと規則正しい寝息をたてはじめた。

「おはよう、中尉」

ナシユはその日の日記の書き出しに、WBと記載することを心に留めた。つまりそれはワイト・ヒギンズのことを示す。好みの飲み

物は珈琲、角砂糖は四つ。

正体の知られたワイト・ヒギンズは弟の仮面を半分だけ引っ掛けた状態で、肩をすくめた。

「君だけだよ、私達が見分けられるのは」

「言われたから判るだけです」

「いいや、君はわかっていた。私の時には的確に珈琲と砂糖を四つ用意していた。ウィルは甘いものは苦手だからね。砂糖四つなんて睨まれる。だから、少し遊んでみたんだ」

死ねばんくら。

ナシユは自分の仕事をこなしながら、本日の記録の内容を脳内でこねくりまわした。

弟に頼らずばならない脳タリンのワイトは今日も子供も逃げ出す極甘珈琲を口の端だけを笑みの形にして飲んでいる。

没落しろ、ヒギンズ家。

ウイル・ヒギンズの観察記録2（後書き）

双子の入れ替わりに苦悩する補佐官、というシユチュが浮かんだ為の突発短編です。

本来はもうちよっと色っぽい感じに仕上げたのですが……ねえ？

ウイル・ヒギンズの観察記録3

8月

残念なことに気付いてしまった。

ナシユは毎日つけているウイル・ヒギンズ及びその双子の片割れであるワイト・ヒギンズの観察記録をつけながらつきつきと痛む額を押さえた。

脳タリンはワイトではなく、ウイルかもしれない。

今までちらとも気付かなかったくらい、ワイト・ヒギンズはほぼ完璧にウイル・ヒギンズになりすましていた。話によると、子供の頃から入れ替わったりして遊んでいたということで、自信もあるのだという。下らぬ自信だ。

ワイトがウイルと入れ替わるのは、ワイトには不向きな仕事をウイルが補う為だと言っていたのだが、ワイトが脳タリンというのはおそらく違う。ワイトは手元にある資料とウイルの進言に基づきその日の仕事を真面目にこなしていくし、必要があれば全て記録をとってウイルに残すというそつのない様子を見せる。ではいったいウイルは何をしているのだろうか。

ナシユは好奇心に負け、珈琲を用意しながら尋ねてみた。

「少佐」
便宜上ワイトを相手にしている時もナシユは階級で呼ぶようになっている。

「少佐、今日はどういう仕事でこちらにいらしているのです？」
何から逃げ出した？

声を潜めてナシユが尋ねると、ほぼ無表情で黙々と仕事をしているワイトは面白そうに視線をあげ、口の端に笑みを浮かべてナシユ

の手から珈琲を受け取った。

「私は対人関係が苦手だね」

「対人関係？」

「ああ。ご婦人とか、年頃の娘を持っている男とかね　まったく懲りることもなく娘を連れて訪れるものもいる」

「……」

「そんな時はアレは便利だ。鉄壁の守りという訳だな」

じつと珈琲の香りを吸い込み、ソーサーの横に置かれている砂糖を一つ一つ珈琲の中に落とし込んでいく。

昆虫並みの甘党ワイトは、きつちり四つの角砂糖を落とし、どろりとした砂糖をティースプーンをつかんでかき混ぜた。

「……つまり、見合いがイヤで弟に押し付けている訳ですか」

「アレは見合いなどと思ってやいないよ。仕事だと思ってやっている」

ひどい。

ナシユは内心で引きつり、ついではばかりに思っていたことを口にした。

「弟を騙している訳ですね」

「そんなことはしない。苦手分野を補うのは昔からの私達の決め事だ」

「決め事？」

甘い珈琲をゆっくりと飲み、ワイトは一旦伏せた臉をゆっくりと押し上げた。

「私はね、子供の頃から賢い弟に比べて　と大人に言われてきた訳だ」

同じ顔なものだから、その比較は普通のそれよりしやすく、そしてきついものだった。とほんの少し落ちたトーンは物悲しさを滲ませるようだった。

ナシユはその言葉を静かに耳にいった。

ナシユにも姉という存在がいる。彼女がいるからこそ軍属の道を進

めたのだが、もとをただせば彼女と同じ道をすすみたくないというひねくれた思いもある。ナシユ自身、姉とは比べられて育ったのだ。小さな痛みのようなものが、胸に突き刺さり面前の男の悲哀が

「だからアレには常々言い聞かせたものだ」

ふっと、ワイトは口の端に笑みを浮かべた。

「私が母の腹に落としてきた『賢さ』をおまえは拾い上げて産まれたのだから、おまえの『賢さ』は私の為に使われるべきだと」

自信たっぷりに言われた言葉をこねくりまわす間もなく、ナシユはおそろおそろ問いかけた。

「少佐は　ウイル様は……」

「人間というものは長く言われ続けると、どんな事柄も納得するものだよ、中尉」

馬鹿だ。

ウイル・ヒギンズの愚か者。

ナシユは自分の上官のよく言えば素直な、悪く言えば単純な性格に涙がこぼれそうになった。

その日の記録の最後、ナシユは溜息をつきつきペンを走らせた。

馬鹿ばっか。

ああ、今日はWA　ウイル・ヒギンズだ。

ナシユはウイルをA、ワイトをBと表記するようになった。そして

最近気付いたことは、Bのほうが人間味があり、会話はしやすい。何より、Bのほうが人間として好ましい。

少なくとも、Bは人と話をする時に視線を合わせて会話をする。

「昨日はすまなかった」

無表情のウィル・ヒギンズは半眼を伏せて言葉にした。

「あの人は君に迷惑を掛けなかっただろうか」

あの人が迷惑を掛けているのは誰でないあんにだけだ。

ナシユは穏やかな微笑を湛えて「問題はありません」と応えた。

応えつつも激しく気になって仕方ないのだが、何故ウィル・ヒギンズは心持ち視線を下げて会話をするのだろうかということだ。そこはどう考えても胸ではなかるうか。女性の胸を凝視しながら言葉を発するのは激しくぶしつけではあるまいか。それとも、おまえには何も見えていないのか。

いや、見えていないのではなく何も考えていないのか。

「ワイトさんは」

何か話題を探そうと思わずそう口にしたのだが、ウィル・ヒギンズは息を詰めた。眼光が鋭くなった感じもする。

それに気付いたナシユは何か地雷を踏んだかと慌てた。ここで彼の兄の話題は厳禁であったか。

「兄が何かしたのか？」

「いえ あの方はいつも通り仕事を処理しておいででした」

問題はまったくないと報告したつもりだが、しかしウィル・ヒギンズはその後普段にもまして不機嫌そうに黙々と寡黙に仕事をすめた。

それに合わせてナシユも仕事を処理していったのだが、どう考えても本日のウィル・ヒギンズの機嫌は最悪だ。何より雄弁に語るのが四六時中はりついている眉間の皺だった。

あんなに眉間に力を込めていて頭が痛くならないのだろうか。ナシユがあきれ果てていると、普段はあまり無駄口を叩かない上官はふいに口を開いた。

「中尉」

「はい、何か」

喉でも渴きましたか？

必要書類にサインをしていたナシユは視線をあげて背筋を伸ばした。

「君は兄を名で呼ぶのか」

そこかよ。

ナシユは激しく脱力した。ナシユも軍属という身で長く生きている。十二歳の頃に士官学校に入隊し、女性隊士よりも断然多い男達の中で生きていたのだ。男が自分に向ける視線の意味に気付けない程馬鹿でいられる訳がない。そんなことに無頓着でいれば、今頃もつと出世している。悪い意味で。

だからこそ、最近この上官がもしかして自分に好意を抱いているのではないかと危惧しているのだが……いや、ただの無礼者か。

「ワイトさんは軍人ではありませんので、階級で呼ぶことはできません」

「そうだな」

「勿論、仕事であれば少佐と呼ばせていただいています」

今は面前に少佐もいますし、この場合「ワイトさん」と呼ぶことは不自然なことではないはずだ。

丁寧に説明すれば、ウィル・ヒギンズは押し黙った。

「では、私がない時に君は私のことをどう呼ぶのだ」

まだ続けるのかこの不毛な会話。

うんざりとしながらナシユは眉を潜めて自分がワイトにウィルのことをどう呼んだかと思いついた。

ワイトはウィルのことをアレと言う。では自分はそういつた会話

の中でこの面前の上官のことをどう現したかといえは

「ウィル様、と申し上げましたが問題でしたでしょうか」

記憶を手繰り寄せて言えば、無表情の上官はやっぱり無表情でナシユの胸元を見つめてしばらく無言だったが、やがてゆっくりとした口調で「問題はない」と告げた。

その後やたらと機嫌が良かった気がするが　ウィル・ヒギンズは無表情なので気のせいかもしれない。

ウィル・ヒギンズの観察記録4

「やあ、中尉」

道端でばったりと知人に出会った場合 相手も私服、自分も私服であった場合はぺこりと頭を一つ下げて何事もなく通過するのが礼儀だろう。

しかもその相手が見知らぬ女性達といった場合は確実に「触らぬ神に祟りなし」といくべきだ。

ナシユリー・ヘイワーズはその鉄則を理解しているし、ことなかれ主義の平和主義。わざわざ他人の揉め事になど首を突っ込みたくはない。

だからその時も当然のように一礼してそのまま過ぎ去ろうとしたというのに、相手はふいに手を伸ばしてぐいつと引き寄せた。

「彼女達に言ってもらえないだろうか」

「何をでしょう？」

何するんだべらんめえつ。という内心は鉄壁の自尊心が隠してかれる。ナシユは自他ともに認める外面大王だった。いや もしかしたら、自認はしているが他人はそこを理解していないかもしれない。

「私はウィル・ヒギンズであってワイト・ヒギンズではないと。どうも理解してくれなくてね」

淡々と言われる言葉と、そして不快そうに眉を潜めているご婦人方を一瞥してナシユは微笑んだ。

嘘です。この男はワイト・ヒギンズで正解です。

と言っではいけない理由は思い当たらなかった。

そもそもナシユとしては相手に対して貸しはあれども借りは無い。

正解者に拍手！ と手を打ち鳴らして称賛してやってもいい程だろ

う。

「いやですね、ワイトさん。そうやって何でもかんでも少佐に押し付けて生きるのは好ましくありませんよ」

当然の如くナシユは極上の微笑みを浮かべ、ついでその場にいるご婦人方に人当たりの良い微笑を向けた。

「ワイトさんは時々ふざげるだけですからお気になさらず。では、私は失礼」

「ナシユ。なんて君は意地悪なんだ」

ワイトはぎゅっとナシユの二の腕を掴むと、彼女の体を囲い込むように引き寄せ自らの前に引き出すと耳の後ろを唇で軽く吸い上げた。

「私が他の女性といることに妬いているんだね。私が愛しているのは君だけだよ、可愛いナシユリー」

その後ナシユは笑顔を張り付かせたまま左手肘を後ろにくぐと埋め込み、相手の腹を一撃した後浮いた腕を強く引いて背後から捻り上げ、ついでに足を払おうかと思っただが、さすがに過剰防衛かもしれないとそこは許した。以前投げ上げた拳句に腹部に爪先をめぐり込ませた相手がいたが、あれは酔っ払いの上、ナシユの胸を無遠慮に驚ぶかみにした為に遠慮も憐憫も一切かけなかった。今回はさすがにそこまでしたら非道が過ぎよう。

「忙しくしておりますので失礼致します」

ナシユは笑顔のままその場にいた女性 完全に言葉を失って卒倒しそうになっていた女性達に一礼し、呻いている上官の兄をその場に放置して足音も高く退散した。どうやらワイト・ヒギンズは弟と違い鍛えられていないらしい。

ウイル・ヒギンズであればあの程度で怯むことはないだろう。少なくとも自らの上官として応戦できるだけの基礎は備えていて欲しいものだ。

ナシユはすたすたと歩きながら持っていた荷物を抱えなおした。この時は自らがしたことが面倒を引き起こすなど少しも考えてなどいなかったのだ。

「中尉」

人事部から戻ったウィル・ヒギンズが静かにナシユへと視線を向け、視線がかち合うとすすすつとその視線を心持ち下げた。

「人事移動届けが出ているというが」

ナシユは普段と変わらぬ笑みを浮かべていたが、危うく舌打ちしてしまいそうになった。

顔見知りの人事部長を内心でののしりつつ「自分の可能性を試してみたいと思ひまして。不都合がありましたでしょうか」とあたりさわりのない模範解答を口にした。

決して、面倒くさい上官はイヤだなどと言っではいけない。

「……兄が迷惑を掛けているのではないだろうか」

「ええまったく」

その通り。

だが当然そんなことを口にするナシユではないのだった。

「勿論、君がどの部署を望むかは自由だ。私かとやかくいふべき事柄でないことは承知している」

ではとやかく言つな。

「君は優秀な補佐官だ。できればこのまま私付きのままでいて欲しい。それとも、私に何か落ち度があるだろうか　いや、厄介であることは承知しているが」

淡々と言われる言葉に、ナシユはだんだん自分が何か悪いことをしているような罪悪感に囚われ始めた。

面前にいるのは体躯のいいオッサンだというのに、何故そんなにも見事に捨てられた子犬臭を撒き散らすことができるのか。

しかも、人の胸を見つめながら。

ナシユは一旦天井を仰ぎ見て「できれば視線を合わせていただけるとよいのですが」と嘆息交じりに口にした。いい加減そこに顔は無いと怒鳴りちらしてしまいたいが、面前のウィル・ヒギンズはぴくんと反応し、ついでおそろおそろというように視線を上げた。

視線がかちんと重なり合うと、よしよしという満足感がたちのぼりナシユはにっこりと微笑んで「では」と話の続きをしようとしたのだが、次の瞬間に言葉は凍りついた。

ウィル・ヒギンズは基本的に無表情な生き物で、隊内でもその生真面目さゆえに誰もが彼を前に口を噤む。

現在のウィル・ヒギンズは確かに無表情だった。

ただし、顔が赤い。

赤らんだ顔を必死にどうにかしようとしているのかその手は無意味に緩く握ったり解いたりを繰り返している。

視線を逸らしたい様子だが、先ほどナシユが言ってしまった言葉を必死に実践する為にウィル・ヒギンズは息をつめて食い入るようにナシユを見ているのだ。

「……」

ナシユは思わず犬に命じるように「休め」と言ってしまいたくな

った。

だがしかし現状は何故か上官と視線を合わせたまま、まるきりハブとマングース 蛇に睨まれた蛙状態。

食うか食われるかの凶悪な緊張で、視線をはずせば殺されると本気で恐ろしいものが腹部に蓄積されていく。

「ナシユ」

どれほどそうしていたものか、相手からやっとなすり出された言葉に、ほんの少しの緊張が解けて背筋に汗が伝い落ちた。

「君には私専任でいて欲しい」

おそらく、この時に何を頼まれたところでナシユは「はい」と応えていただろう。謎の恐慌状態を脱することができるのであれば、はいつくばってその靴先に口付けをしるという屈辱にも耐えた。

ナシユは上官の言葉にぶんぶん顔と顔を上下に振って「了承いたしました」と口にし、軍属らしく長靴の踵を打ち鳴らしてぶるんと身を反転させた。

「ナシユっ」

やっと後ろを向けたと思ったら、今度は乱暴に二の腕を掴まれてしまった。

完全に混乱していたナシユは、泣きそうな自分を叱責しながら「なにか？」とたたたらをふんで足を止めた。

捕まれているなければ無様にもすっころんでいたかもしれない。

「……昨日の休暇は楽しめただろうか」

「昨日」

子供のように相手の言葉を反芻し、ナシユは途端にワイト・ヒギンズのことを思い出した。

腹立たしさと共に本来の自分を取り戻す。

「言っておきますが、ワイトさんが怪我をしたのは自業自得だと思

いますので私が苦情を受けるのは間違っていると思います」
弟に頼りきって生きているあの男のことだ、まさか「おまえの部下に酷い目にあった」と苦情を向けたのではあるまいか。そう思えば更に腹立たしさも増してくる。

ワイト・ヒギンズ。今度ばったりあったらもつと虐める。ネチネチと。

ナシユの言葉に顔色を取り戻したウィル・ヒギンズはすつとナシユの首筋を一度なぞり、しばらく無言でナシユの腕を引き寄せた。
「兄は気に入ったものに時折意地の悪いことをする。君に悪さをしないといいが」

唇が首筋を吸いあげ、その意味するところに気付いたナシユは啞然とした。

そこに、跡があつたのだ。鬱血した跡が。

キスマークをつけて歩いていた！

そのばかばかしさに血の気が引いたナシユは、同じことをした上官に対してワイトと同じように攻撃を仕掛けることもできない程動揺し、あわてて身を引き離れた。

「失礼致しましたっ」

くそおつ、指摘するならどうしてもつと穏便な方法を使わない！

ナシユは大慌てで医務室に駆け込み、わざわざ湿布薬を塗布して包帯で巻き、拳匂いつもは結び上げている髪を解いて軍帽をのせた。
「あー肩こりかあ。巨乳はつらいなー」

「生憎と付き合いが長い為、肩がこるかどうかという意味さえ判り

ませんよ」

ニヤニヤ笑う軍医を睨みつけ、ナシユはこの日の日記に　死ね、
ワイト！　と幾度も書き連ねることを誓った。

いいや、それを指摘する為だけに同じ場所に触れるウィル・ヒギ
ンズも大概だ！

しっかり記録していつかセクハラで訴えてやる。

ウイル・ヒギンズの観察記録5（前書き）

でも今日は別の人。

ウィル・ヒギンズの観察記録5

ナシユリー・ヘイワーズが軍属という道を選んだのは、姉であるシエリー・ヘイワーズの影響が多にある。

「まあっ、お口がお上手ですこと」

豊かな淡い金髪に灰青の瞳。薄桃色のふわふわとした羽毛飾りをつけた扇で口元を覆い、ころころと愛らしく微笑むシエリーは誰もが認める美貌の持ち主だが、それと比べられ続けたナシユリーは自然と自分は決してああはなれまいと自分の将来を学問に定めたのだ。

美人は近くにおいておいてはいけません。

だが、学問を究めて研究機関である『賢者の塔』という別称のある場に入ることは適わなかった。そして唯一残されたのが軍属という道だったのだ。

幸い、外勤に女性職務は無かったが、事務官であれば募集があった。試験までの一月鬼のように勉強にはげんでやっと軍属となり、こつこつと昇進試験に対してやっと手にいれたのが、

ウィル・ヒギンズの補佐官という職だった。

自分が求めたものと何かが違うのではないかと、ナシユは最近では思っている。

「ナシユ？ その手のものは嫌いじゃなかった？」

朝の時間、予定はあれども未だ時間が早い為に時間つぶしで官舎の1階フロアで雑誌を眺めていると、友人のダーシーがからかうように言う。

「最近は何を通すようにしてるの？」

「今日の運勢はどう？ いいことありそう？」

「……新しい出会いがあるかも！ 心臓がドキドキバクバクしちゃうかも要注意っ」

「まあ、素敵ね」

楽しそうに言うダーシーだったが、新しい出会いはあるだろうと判る。何故なら、もう少ししたら馬を走らせて出かけるのだ。そしてそこにいる人間はほぼ知らぬ人間だ。

「……本当に素敵な出会いならいいけどね」

新しい出会いなんて、道を歩いていたらってあるんだよ。

「……」

面前に立つ『賢者の塔』は資料室に無い資料すらも提供してくれるありがたい場ではあるが、それはすなわち自分が目指して挫折した場でもあるのだ。

「提出書類の記載をお願いします」

一階の受付で事務処理を淡々とすませていたが、ナシユは少しだけほろ苦いような気持ちを味わった。本来であれば自分はこのでんびりと好き勝手に学問や本に触れて生きていた筈だったというのに、結局は道は違ってしまっていた。

新しい出会いとやらはいったいどこに落ちているのか。面前の受付係をじっくりと見てみたが、生憎と心臓がドキドキしたりはしない。

「必要な資料は ああ、これは三階ですね」

受付係は淡々と言い、ふと視線をあげて声の調子をかえた。

「ルーク、ハイワーズ中尉を三階の東資料館に。古地図と水脈図を

幾つか探すのを手伝って差し上げて下さい」

「
」
その名前にギクリとナシユは身を強張らせ、おそろおそろ振り返ってしまった。

賢者の塔の住人らしく軍装のナシユとは違いいかにもゆったりとしたローブのような衣装を身に纏った癖毛の青年は、手にしていた荷物をカウンターに預け、静かに顎先でついてくるようにと示した。

ナシユはおそろおそろその後をついて行きながら、相手は自分を覚えていないのだろうとホッと息をついた。

確か自分よりも四つ程年下のこの青年は、飛び級で学舎で学び歴代三位の若さで『賢者の塔』に入ることが許された秀才だ。

つまり、ナシユが学んでいる間も彼は時には下級生として、同級生として、そして上級生としていたのだ。年下だというのに。

数歩先に行くルークは階段をゆっくりと歩き、右回廊を進み、階段をのぼり、左回廊を歩き、階段をおりて、渡り廊下を歩き

「どこに行くんだったかな……」

迷子かよっ！

いつたり来たり、何故か階段を上ったり下がったりするのでおかしいと思っていた矢先、ぼそりと相手の口から落ちた言葉にナシユは殺意を覚えた。

基礎体力はあるつもりだが、すでに息が上がってしまっている。階段のぼりおりなどの上下動は思いのほか体力を削る。

「ナシユリー・ヘイワーズ、どこに行くのだったかな」

かつりと足を止めて振り返られ、ナシユはぐっと喉の奥で言葉を詰まらせた。

「……覚えてたんですか」

「いや？ 今、見たことがあるとを考えをめぐらせていたら、自分が何をしていたのか忘れてただけだよ」

……

「だから覚えていたというのは正しくないよ。正しくは思い出したのであって、それについてもつい今しがた……」

延々と訳のわからないことを言い始めた相手をさえぎった。

「判りました。とりあえず三階の水脈図と古地図のある資料室に案内して下さい。他のことは一切考えずに」

「判ったよ」

ナシユの言葉に短く返答すると、ルークはまたしても階段をのぼったり下がったりしながらナシユをつれまわし、だが結果としてはきちんと資料室への案内を果たしてはくれた。

半刻あまりもの間うろつろとさせられた気持ちになり、ナシユは礼を口にしつつも「やけにぐるぐるとさせられたような気持ちなのですが」ととげとげしく言葉にすると、相手は眇めたような視線をひたりと向けてくる。

「大事な資料が多いからね。ここは迷路のような作りをしているんだよ」

そうか。それもそうかもしれない。

と、ナシユが納得しかけたところで、ルークはくるりと身を翻して「きつと」と言葉を付け加えた。

「……方向音痴なんじゃないですか？」

「右手を壁につけて歩けばやがて出口にたどり着くよ」

「」

「というのは冗談だけだね。ここは本当に人を惑わす迷路のような

作りをしているんだ。一般の人間は確実に半日は迷わされるよ。ついて来て」

まだ子供のような口調で吐き出される言葉に、からかわれているのか本気なのか思案しつつ、ナシユは大人しくその後が続いた。

「資料は？」

「各砦の古地図と水脈源の地図を。軍にもあるのですが、どうも足りない」

「なんだ。君は軍属になったのかい？」

「……軍服ですからね」

今まで気付かなかったのか？

脱力しつつ応えると、ルークはしばらく無言で資料の棚を指先でなぞりながら「ぼくの妹は、軍属ではないけれど軍服を着ているよ」とぼそりといった。

「はい？」

「騎士になりたいと昔から言う子で、父が彼女の為に軍服を作る仕立て屋に頼んで彼女用に似たデザインで違う色彩の軍服を作り続けた。今は十五だが……普段からそれを着ている」

騎士。

ナシユはそれは考えたことが無い。軍属ということ基礎体力はつけられたが、あくまでもナシユは内勤だ。

体術はそこそこ自身があるが、剣などは体裁の為だけに持っているだけといってもいい。

「騎士は……女性には無理な夢ですね」

この国には女性騎士は存在しない。軍属で女性を認めているのはあくまでも警備隊の内勤だけなのだから。だからそもそもナシユはそんな夢を抱いたこともないのだ。

「うん。でも一生懸命にがんばってるよ」

何を考えているのかいまいち判らない青年だが、ふつと口元を緩めて微笑むから、ナシユはなんとなく好ましい温かな気持ちになった。

新しい出会いではないが、もしかしてこれはいわゆる 良い相手なのかもしれない。

年下だが、そんなに……

「ぼくが議員になればすぐにでも女騎士を承認したいところだけれど、生憎とまだ年齢的に達していないのが残念だよ。それに、この案件が通ったとしても、その時妹の年齢は適していないだろう。何故父はぼくとあの子の年齢を近くしてしまったのか、はなはだ納得がいかない。ぼくがあの子にしてやれることは、時々勉強をみてることくらいだけれど、生憎とあの子は勉強はあまり好きじゃない。幾度も窓から逃げられてしまってそのつどとても悲しい思いをさせられたよ。一番年齢が近いのだから最も一緒にいられるように思うのだけれど、長男がすぐにあの子を抱っこしてもっていったまうし、三男は馬鹿みたいに甘やかすし」

まさかそれから延々妹の話がずらずらと続き、挙句の果てに「ルーク、その話はいつたいてどこに落ち着くのでしょうか」と嫌味っぽく口にする、ルークはやつと気付いた様子で口を閉ざし、ついで眉間に皺を刻みこんだ。

「ところで何を探せばよかったかな？」

「……」

新しい出会いがあるかも！ 要注意。

いや、そもそも新しい出会いではない。やはり占いなどちつとも当てにならない。これは違う。まったく違う。

滅びろ、妹フェチ。シスコンめ。

激しい脱力感を抱きつつ資料を探し出し、またしてもぐるぐると塔内を歩かされた挙句に官舎にたどり着いたナシユは、ウィル・ヒギンズが静かな威圧的な空気の中で黙々と仕事をこなしているのを見て、なんだか少しほっとした。

ルーク……あれは絶対に軍属にはなれないし、また上官などにも向かない。

それに比べればウィル・ヒギンズは真面目に仕事をこなしているし優秀だ。よし、まだいい。まだマシだ。

ささやかなよいこと探しをしなければ人生に挫折してしまいそうなナシユだった。

「確か君は資料を探しに出ているのではないだろうか？ もう時刻に近い時刻だということは理解しているか」

戻ったナシユに冷淡な言葉が飛ぶ。

ナシユは持ってきた資料を机の上に一旦おき、上官の前で帰還の口上をつらつらと並べ、最後に言葉を付け足した。

「時間が掛かりましたことはお詫び申し上げますが、私が居ない間に何か不都合がありましたでしょうか？」

必要なものは全てそろえてから出かけた筈だ。何か足りませんか？ とナシユが言葉を続けると、ウィル・ヒギンズはふつと瞳を眇めてどこか遠くを見るような眼差しでしばらく無言でいたが、

「君が足りなかった」

とぼそりと口にした。

その意味をじっくり考えたくない気持ちになり、ナシユはいつもと同じように微笑一つで無視することにした。

触らぬ神にたたりナシ。

「紅茶、お入れしますね」
「そうしてくれ」

その日の記録を締めようとして、ふと 本日の占いの内容を
思い出した。

新しい出会いがあるかも！

心臓がドキドキバクバクしちゃうかもっ。

……心臓は確かにドキドキばくばくしたかもしれない。

ただし、激しい上下動で。

眉間にできてしまった皺をなんとも揉み解しつつ、明日はもっと当
たりそうな恋愛占いを見るかとペンをペン立てに放り込んだ。

男性にちやほやされ、それを楽しむ姉のシエリーをどこか馬鹿にするように眺めていたナシユだったが、最近の夢は円満寿退社になりつつある。

ウイル・ヒギンズの観察記録6

ほんの意趣返し

ナシユリー・ヘイワーズは上官であるウイル・ヒギンズに扮したワイト・ヒギンズの前ににつこりと微笑んで紅茶のカップを置いた。勿論、ウイル・ヒギンズはミルクも砂糖も使わないのだから、ソーサーの上には味気ないという理由だけでティ・スプーンのみ。なんととってもウイル・ヒギンズはどっかの誰かのように甘党ではないのだから砂糖など必要はない。

「どうぞ」

「」

さあ飲みやがれ。

ぴくりと眉毛の辺りを一旦痙攣させ、けれどワイト・ヒギンズは慇懃な調子で「ありがとう」と返事をするとソーサーごとカップを引き取り、その香りを楽しむように胸元に運んだ。

ナシユは内心でこれが逆ならば面白いのにと多少残念であった。紅茶はそのまま飲もうと思えば飲めるだろう。だが珈琲であれば違う。もしワイトが紅茶に角砂糖四ついれて飲む人間であれば、珈琲を砂糖、ミルクなしで飲むことはさぞ困難なことだっただろうに。

だが知るものか。

ワイト・ヒギンズ？ そんなヤツは知らん。

「中尉」

一礼してそのまま自分の席に戻ろうとしたところでワイトがゆっ

くりと声をかけた。

「なんでしようか」

「……いや、いいんだ。すまない」

砂糖が欲しいですか？

せめてあまつたるくしたいですか？

むずむずと問いかけたいと口元が歪んだが、ナシユは平然と相手を見つめ返した。

相手はしばらくじつとナシユを眺めていたが、やがていつもの

ウィル・ヒギンズのように平坦な表情で紅茶を口元に運び、そしてもくもくと合同演習の為の資料に視線を戻してしまった。

ほんの意地悪のつもりだったが存外楽しいものではなかった。

だが、その後二日の間ナシユは同じことを繰り返し替えた。すなわち、ワイトだと気付いていないフリを遣り通した訳だが、相手はそれを純粹に信じた訳では無かったようだ。

「中尉」

かたりと紅茶のカップをワイト・ヒギンズの前に置くとワイトはじつとその紅茶のカップを見つめ、やがてゆっくりとした口調でナシユを呼んだ。

「なんでしよう」

「内密の話がある」

ちよいちよいつと指先で招かれ、ナシユは眉を潜めたものの大仰なテーブルをまわり、ワイトの横に立つと相手の囁きを拾う為に身を屈めて指示を待った。

「何か？」

「そんなに私に構って欲しいとは、気付かなくてすまなかった」
言葉にした途端、ワイトはぐつとナシユの襟首を掴んでその耳たぶに歯をたてた。

「つつ」

小さな痛みに怯んだところで慌てて身を起こし、「ワイトさんつ」と怒鳴りあげてナシユは自分の失態に気付いて呻いたが、あとのまつり。

ワイトは一瞬つめたい眼差しでナシユを睨み上げ、ふっと口元に笑みをはいた。

「意地悪だな、ナシユ。私だと判っていてせっせと嫌がらせかい？」
「……」

「そんなところも可愛いね」

ぶわつと鳥肌が全身を駆け巡り、ナシユは勢いをつけて飛び退ったが相手はどこ吹く風の様相で足を組みなおして命じた。

「珈琲」

ゾーキン絞るぞこの野郎っ。

わなわなと小刻みに震えてぐるりと身を翻したナシユの背に、ワイト・ヒギンズは軽やかな口調で言葉を続けた。

「悪いがこれからは君が運んできたもの全て毒見はしてもらつつもりだ　おかしな小細工はしないように」

角砂糖二つ先に入れてやる！

甘さの前に敗北しろ。

結論だけ言えば、ワイト・ヒギンズの舌は馬鹿に違いない。

角砂糖6つも溶けた　　というか底のほうなどどろりと微妙に溶け残っている　　珈琲をまったく気にせず飲んでいた。

あの男の血はきつと砂糖成分でできている。

蟻にたかられてしまうがいい。

「どうかしたかね、中尉」

しばらくぶりでウィル・ヒギンズを目にしたナシユは自分の目頭が熱くなる程嬉しかった。

朝、ウィル・ヒギンズの執務室で一礼し、上着を受け取りながら大きく安堵の息をつく。その吐息が気に掛かった様子で、ウィル・ヒギンズは眉間に皺を刻みこんだ。

「いいえ。このところお忙しそうでしたが、お元気そうでした。良かったです」

詳しく尋ねてはいないが、今回数日にもわたって入れ替わっていたのは軍内部の内部調査の為だとワイト・ヒギンズが口を滑らせていた。そんな極秘裏の仕事をこなしているからこそ、この双子が入れ替わっていることを上層部は黙認しているのだ。

ウィル・ヒギンズはじつとナシユの胸元を見つめているが、そんなこともまったく気にならない。この数日のワイトとの微妙な空気を思えば何のそのだ。

ワイトはまるで擬態したイキモノのようだ。

静かにもくもくとウィル・ヒギンズを完璧にこなしているというのに、時折思い出すように自分はワイト・ヒギンズだという存在を知らしめる。

うつかり気を抜いてウィル・ヒギンズに対するようにすれば、途端に足元をすくおうと動くのだ。

何がしたいのか判らない

どんな時も気が抜けないというのが数日続けば、この慇懃な上官が戻ってくれた事実は実にありがたい。

ナシユは満面の笑みを浮かべて、

「紅茶をいれましょうか」

と、上着をハンガーに掛けてくるりと振り返ると、思いのほか近い

場所に未だウイル・ヒギンズが立っていてナシユは思わず「うつ」と呻きそうになってしまった。

ウイル・ヒギンズの手がするりと腰に回り引き寄せる。

とんとんと肩甲骨の辺りを軽くたたき、ウイル・ヒギンズは低く耳元で囁いた。

「君には本当に苦勞をかける。すまない」

礼を言うのはいい。

その気持ちを表すのは結構なことだ。

だがそこまで大げさにする必要は絶対に無い。

自分とウイル・ヒギンズは上官と部下に過ぎない。そうだ、そうだろう。それ以外の何ものでもない。

硬直するナシユを手放し、ウイル・ヒギンズはさっさと自分の席に戻っていった。

まるで何事も無かったかのように。

いや……そうだ。何事も無かったに違いない。

今のは上官が下士官を労う極一般的な抱擁　ハグだ。ウイル・ヒギンズとハグ！　なんとも滑稽な気がするが、これは一般的なことだ。

ただの労い。^{uruk}それ以上でも以下でもない。

「中尉？　どうかしたかね」

「……いえ。いいえ、何もございません」

そう、何も無い。

ナシユはいつも通りの微笑を浮かべ、一礼してその場を離れた。

まったく問題ナシ。

そう、まったく問題はない。

ウイル・ヒギンズが観察中

ウイル・ヒギンズがナシュリー・ハイワーズという存在をはじめその視界にいれたのは、彼女が軍務試験にパスして三ヶ月の研修期間に入った頃のことだろう。

女性登用は少なく目立つ、それに何より彼女は男達の間である種の話題をさらっていた。

でかい胸が。

ウイル・ヒギンズは別段性的嗜好は一般の部類だと思っている。胸がでかろうが尻がでかろうが、何がどうというものではない。それに女性という生き物に対してはあまり良い印象はもっていない。それは彼の兄が女性に関係するトラブルを力いっぱい弟であるウイルに丸投げした結果、知らぬ間に汚名を流布されているだけだったが、日々の積み重ねにより彼は「女性とは近づきたくないものである」と自らの中に沈殿していく思いを放置した。

その近づきたくない存在である女性が自らの補佐官として任官したのは、まさに晴天の霹靂というものだった。

かなり「うらやましい」とやつかまれたものだ。

むしろ変わっていただいていいのだが、人事部の知人は「ああいうのは台風の目になっても困る。女癖の悪い男に預ける訳にもいかないのだから、おまえが一番無難だろう」と苦笑していた。

工作上といったところで女性との付き合いなど不安と不満しかなかった。

といったところで何がどう変わるものでもなかったが。

ナシュリーとは仕事上でしか接点もなく、ウイルは会話を楽しむ

性質ではないしナシユリーもぺらぺらと喋る人間ではない。

一月も共に過ごせば、まるで空気のようになシユリーという存在がそこにあるのは当然のようになった。

彼女は黙々と仕事をこなしていくウイル同様、仕事はただ淡々と処理していく傾向があり、女性という細やかさなのかウイルが次に何をしようとしているのかを察知して先手を打って必要なものを用意してくれる。

便利なアイテムのように普通にそれを受け入れられるようになるのに、さほど時間を必要とはしなかった。

ナシユリーと仕事を共にすれば、自らの仕事も以前よりスムーズに進むことに慣れてくる。その余裕から、ふっとウイルはナシユリーを改めて見る時間ができた。

身長は一般的な女性にしては高いほうだろう。だが、身長百八十のウイルとはそれでも相手の旋毛を見つけられるくらいの身長差がある。

体にぴったりとした軍服は胸元がやけに目立つ。

そのことにはじめて思い当たり、そういえばそんな噂があったと思ひ出す。そう、その程度だった。

直接じろじろと見るのではなく、半眼を伏せて観察しているとナシユリーが微笑むのがわかった。

「新しい資料が必要でしょうか」

ナシユリーはそつのない女性だった。

どんな時も丁寧に接し、微笑み、動く。道端で卑猥な言葉を向けられた時に遭遇したことがあるが、ナシユリーはそれをやんわりとかわしていた。

相手の男に対して不快な思いを抱いたが、受けるでなく悲しむでなくさらりとそつなくかわすのを見て安堵するような気と共に、その笑顔を惜しんで欲しいという奇妙な気持ちは抱いた。

ナシユリーの微笑みは媚へつらうものではなく、あくまでもふわりとさりりとしたもので人の心を穏やかにしてくれる。だからこそ、世の男共は気安く彼女に声をかけるのだ。だがそれは良くない。相手の男が勘違いしてしまえばそれは彼女の害にしかならないだろう。上官としてそれは許容できることではない。

一度彼女にはもう少し自衛について話しあうのが良いように思うが、仕事の話しかしたことがない自分達だからどう話をふって良いものか。

それにもう一つ、気にかかるのは上官から命じられた特別任務のおりに入れ替わった兄のこと。

ウィルとワイトは双子であるという特性を生かし、時折上官に別任務を任せられることがある。それを逆手にとり、ワイトは上官にねじこんでウィルと入れ替わり自分の仕事をウィルに任せることもある。

つまり、彼等は時折自分達の場所を入れ替わることがあるのだ。今まで細心の注意をもって幾度か行われていたそれが災いすることはないだろうと思っていたが、にわかには不安を覚えるようになった。

「ナシユはかわいいなあ」とクツと喉の奥でワイトが笑った為だ。

ナシユが誰を示すことだか判らなかつた。

何故なら、ナシユリー・ハイワーズはウィルにとって「中尉」であるのだから。今まで名前をはっきりと認識することもなかつた。

「なんだい、おまえはナシユの名前も判らないのかい？」

ワイトは呆れた様子で肩をすくめてゆっくりといいなおした「中尉だよ。ナシユリーというんだ。親しい友人はナシユ、もしくはナ

ツシユと呼んでいる。ああ、勿論私はそんな風には呼んでいないよ？ 私は上官、ウィル・ヒギンズだからね」思い出し笑いをする兄は緩く腕を組んで壁に背をあずけ、首をかしげた。

「あの子ときたらとびつきり性格が悪いに違いないよ」

その意見はまったく意味不明だった。

何故なら、ナシュリーはいつだって柔らかく穏やかな笑みを浮かべている。命じれば何でも端的に返事を返し、きびきびと良く動く。

そのナシュリーの性格が悪い？

ワイトは時折とても不可解だ。

しかし、ワイトは人の本質を見極めるのが得意だ。

その為に一本の針が刺さるようにその言葉はウィルの胸に残った。

その後も幾度かワイトと入れ替わりを試みたが、そのつどワイトは機嫌が悪くなった。

一度などはまさか自分と入れ替わることでおかしな真似をしているのではなからうかと危ぶみ、こっそりと仕事上の彼等を覗きにいったこともある。

だが、その風景はいつもの自分とナシュリーのそれと変わらなかった。ただ黙々と書類を処理し、そして部下に指示を与える自分に扮したワイトと、その補佐をするナシュリー。

だがわずかに浮かんだ苛立ち。

ナシュリーがやんわりと微笑みを向けているのはウィル・ヒギンズに対してのものだ。

何故か胸のうちでそんなことを呟いた気がする。

あそこに座っているのはウィル・ヒギンズ。いつもと変わらない自分。

ワイトは以前と同じように完璧にウィル・ヒギンズを演じている。

何の問題はなかった。

「うちに連れてきなよ」

あまつたるい珈琲の入ったカップを手に、ワイトは悪戯をたくらむ顔で言った。

「何の話だ」

「中尉だよ。ワイト・ヒギンズに紹介してくれよ」
馬鹿げた話だ。

自分達が双子だと知られるのはどう考えても良くない。これからの仕事に支障がでるだろう。秘密裏に命じられている内部調査などもあるのだ。ナシュリーにはれるようなことなどできよう筈がない。ワイトだとして理解しているだろうに。

眇めた視線で無視をした。

ワイトが時折りふざけることは理解している。なんといっても母親の腹の中からの付き合いだ。きつと自分達を見極めることのできないナシュリーを前に新しい遊びでも思いついたのだろう。

そんな兄をウィル・ヒギンズは無視することにした。

そんな折りに数日の間二人で行かねばならぬ出張話が浮上した。

別段それは構わない　問題は、その日はワイトに以前から入れ替わろうといわれていた日だということだ。

ワイトは確実にナシュリーで遊ぼうと思っっている。それはひしひしと感じているのだから、そんなワイトと女性副官を二人で出張などさせて良いものか　無理だ。それでなくとも元々のワイトといえば女性に対して無礼な振る舞いをするところがあるのだから。

「この週末は入れ替わる約束だったろうに」

突然予定をかえられたことにワイトは憤りを見せたが、なんとか説き伏せた。

翌日から入れ替わり、ワイトの仕事をこなし　そして出張の当日、朝っぱらからウィル・ヒギンズが知らされた「事実」はウィルの脳裏を真っ白に塗り替えるものだった。

ナシユちゃんの処女はいただいた。むっちりおっぱいご馳走様。

咄嗟に信じられないような悪態が口をついた。到底女性の前で吐き出していいような言葉ではないが、そんなこと頓着されるものではない。

ぶわりと血が逆流するような気持ちと共に、その時にやっと……そうやっと。

ナシユリー・ハイワーズは自分にとって不可欠な存在だ。

そのことに気付いた。

それまで意識していなかったのではなく、意識しないように勤めていただけだ。

部下なのだから。自らが庇護するべき相手であるのだから。極力見ないように勤めていただけに過ぎない。

正面からはじめて見た途端、血が一点に集中してしまった。

意識した途端、もう視線を合わせることにすら脅威となった。

ワイトがその場にいれば絞め殺してやっтарろう。

だから咄嗟に言ったのだ。

「結婚しよう」と。

だが彼女はそれを受け入れはしなかった。「そんなことは何でもないことだ」と。

憤りと吐き気が自分の体内を巡り、その日一日最悪な気分ですらにも処理できず、相手にも優しい気持ちを抱くことはできなくな

っていた。

無理に馬を飛ばし、温和なナシュリーに諫められるまで彼女の身を気遣う気持ちさえどこか遠くに飛ばしていた。

いいや違う。彼女を抱いたのはワイトではなく、ウィル・ヒギンズだ。

そう結論づければ自分の内部が少しだけ落ち着いた。彼女が抱かれたのはワイトではなく、ウィルであった筈だ。ならば自らが責任という名のもとに彼女を引き受けるのは当然だろう。

だが、結局それはただのワイトの悪戯であることが知れた。はじめてナシュリーに怒られたが、それはそれで可愛かった。

意識してしまうと困ったもので、それまで胸に興味がなかったというのにワイトのおかげであの胸が気になって仕方なくなってしまう。

視線を合わせることも出来ず、視線は下がってしまう。下がってしまうとあの胸があるのだ。気にするなというのも無理がある。

これはつまりワイトが悪い。そう、ワイトが悪いのだ。

ワイトのおかげで自分の中にわかに信じがたい程の独占欲が芽生えてしまった。

相変わらずナシュリーはウィルの言葉に微笑みをくれる。

思い切つて伝えた「わたしたちのあなたでいて専任でいて欲しい」という言葉は激しく勇気が必要とするものであったが、彼女は微笑んで受け入れてくれた。

「さみしかった君が足りない」と伝えた時も宥めるようににっこりと微笑んでお茶をいれてくれた。

さすがに職場で押し倒す訳にはいかないが、そろそろ二人の関係を
進展させる頃合だろう。

わて、ぶじじやん。

ウィル・ヒギンズの観察記録7

後悔、とは読んで字のごとく事柄が終わったあとで悔いることだ。そう、つまり ナシュリー・ヘイワーズは後悔していた。

生真面目な上官に対して、ほんの少しばかりの同情心が芽生えたのかも知れない。あほんだらな兄に虐げられて育っていたのだ。多少性格がアレなのは仕方ない。

しかし、なんととっても未だ二十代なのだからもう少し人生というものを楽しめばいいと思い、連れ出したのが間違いのもとだった。

「ナシユウウ」

居酒屋【アルビオンの絶叫】は今日も兵士や騎士でもりあがっていた。騎士達は貸し切りにしてしまうことが多いが、今日はそういうこともなく色々な隊がまぎれている。

ナシユは馴染みの顔を見つけて上官を紹介し、こういった場では階級はあまり気にしてはいけませんと口をすっぱくして説明した。きつとウィル・ヒギンズの耳にはたこが二匹ぶら下がっているに違いない。

士官学校からの友人であるレニイ・インはすでに適当に酒が入っていたが、さすがにウィル・ヒギンズの姿に一瞬萎縮した。一瞬だけだ。だが、ここが酒場だということを思い出したレニイは堅物のウィル・ヒギンズに気安く挨拶し、酒を酌み交わした。

そうこうするうちに周りにいた兵士達数名でわきあいあいと飲んでいたので、やはりウィル・ヒギンズはなかなか場に馴染めないようだ。

たかが一日で何かかわるわけではないだろう。ナシユは上官のフォローをしながらそれでも自分も楽しむ為に酒を飲んでいった。

そして、それは一刻近くもその場の人間に酒が浸透した頃合。こん

な場だから猥談も出るし、品の無い単語も吐き出される。そういつた雰囲気もウィル・ヒギンズにとって悪いものではないだろうと思っていたが、突然レニイが動いたのだ。

「ナシユウウ」

その両手を突然卑猥にわきわきと動かし、むにりとナシユの胸を下から持ち上げるようにして、揉んだ。

「うぎゃ」

「あああ、この重み。この柔らかさがもおサイコーっ」

「おおおっ、糞っ、女同士は羨ましいぜっ」

げらげらと笑いが沸き起こる中、ナシユは脱力してレニイの頬を引っ張った。

「いやらしい手つきで触らないように」

「いやらしい手つきで触らないと意味がない！ ふふふふ。よいではないかよいではないかっ」

なんだそれは。

「少佐、少佐だってこの凶悪な武器はちゃんと点検したいですよ
え」

酔っ払いレニイは突然酒をちびちびと飲んでいたウィルへと流し目を送り、ナシユは卒倒しそうになった。

よくよく見ればウィルの半眼は伏せられ、なんだかよく判らないオーラが漏れている。

ひくりとナシユが引きつると、ウィル・ヒギンズは真顔で言った。

「人の胸をもむな」

……

「もおっ、少佐はお堅いんだからあ」

「いやいや、俺も固いぞ。ナシユリーの柔らかな胸で癒してほ……」
品の無い下ネタで盛り上がっているところ悪いですが、今、人の胸という単語が明らかに 人の胸わたしと聞こえたのですが。

気のせいですか？ 気のせいですよ。

ナシユは引きつりつつ、気付いた。

この上官、すでに酒の量が許容量を越えているのではないのか？

そのなんだか据わったような瞳とか、いつもよりだらだらと不機嫌そうに垂れ流している何かとか。

ナシユはがばりと立ち上がり、皮の財布から二人分の酒代をがしりと取り出してテーブルに叩きつけ、ウィルの腕をぐいつと引いた。

「帰りますよ！」

酒の量くらいきちんと把握して飲んでくれ。

おまえはいつたい幾つの子供だ！

ナシユは内心で上官をぼろくそに怒鳴っていたが、当然表面上はそんなことを臆面も出さなかった。

「中尉、酒代は」

「私が誘ったのですから、私がお持ちます。少佐はお気になさらず」「そういつ訳にはいかない」

腕を掴んだままぼそぼそと言う上官を引つ張る。しかし、相手はムツとしたかのように足に力を込めて立ち止まり、ナシユが押しても引いても動かなくなってしまった。

「少佐っ、ちよっ、動いてください」

「君におごってもらう訳にはいかない」

「判りました。判りましたから、とりあえず今は」

店を出るぞ、このほけ上官。

ナシユは相変わらぬ無表情で酔っ払っていると思わしき上官を引き立てるようにして無理やり店を出た。

早く帰るぞ酔っ払い！

宿舎へと向かう一本道を示すナシユに、ウィル・ヒギンズははじめのうちこそ引かれるように付いてきたものだが、そのうちにぱったりと足を止め、無表情のままを見下ろした。

「とりあえず今は」

足を動かさせ、このでかぶつ！

ぐいぐいと引つ張ってやろうと振り返れば、酒臭い息が頬を掠める。左手が腰をさらい、右手がわき腹を抑える。

わき腹に添えられた手がシャツの上をなぞり、胸の脇をかすめた途端、びくりと身をすくませたナシユの耳元で、ウィル・ヒギンズはかすれたような声で囁いた。

「他人にあんな風に触れさせてはいけない」

「いや、あの……あんなの、女同士めづしどうしのじゃれあいじゃ」

いや、そうじゃないだろう。

自分の胸をどうしようかとあなたには関係が無い。ナシユは狼狽し、どう告げればいいのか逡巡してしまった。

一旦体を引き離れたウィル・ヒギンズの湖畔の瞳がじつとナシユの瞳を見つめる。

「じゃれあい？」

「そー……です」

低く唸るような言葉と、無表情が怖い。

何よりこんな場面を誰かに見られたくないという思いで辺りを見回し、ナシユはほっとした。

中途半端な刻限が幸い、繁華街から外れて宿舎へと戻る細い道には人の気配が無い。そもそもあの店は王宮から近い場であるし、一般客など滅多にないような繁華街の外れだ。そこから宿舎までの一本道など人通りが少なくて当然

ほっと息をついたところで大きな手が下から掬いあげるようにそ

つとナシユの左胸をなぞり上げた。

普段から女友達や、はたまた不埒な男達に幾度も撫でられたり掴まれたりした胸だ。本来であればナシユはそんな時の対処も手馴れたものだというのに、思い切り固まった。

「ではこれもじゃれあいだな」

「ちよっ……少佐っ」

形と柔らかさを確かめるように優しくなぞり、重さを確かめるように持ち上げる。酒の力も手伝ってか、ぞくぞくと背筋を奇妙な漣が這い登り、ナシユは狼狽した。

「酔いすぎです」

「酔ってなどいない」

これだから酔っ払いはっ。

酔っ払いは大抵そう言うんだよ！

「ちよっ、離して下さい」

「何故彼らが良くて私では駄目なんだ」

子供か？

そういう話か？

くそっ、酔っ払いはネジがぶっとんでいるのか？

ナシユは護身術の応用として相手の手首を掴んで身を引く方法を取ろうとしたが、気付くと自分の背中はとんとと壁にぶち当たる。

「もうあんな風に触れさせてはいけない」

さわさわと胸をなぞる感触が甘いうずきにかわりそうな恐怖。叱責するように淡々と言いながら体でナシユの体を押さえ込み、威圧するように上から言葉を落とし込まれる。

きゅっと胸をつかまれ、軍服という厚い地だというのに的確に胸の中心にある部分を中指と人差し指の間で挟みこまれ小さな痛みに声が漏れた。

「ナシユ？ 聞いているね」

な、なにをつ？

相手の力から逃れようと意識が向けられていて言葉など拾い集めている場合ではない。しかし、返答の無いことが相手の不興を買ったのか、ウィル・ヒギンズはナシユの胸を押しつぶすようにつかみ、耳元でもう一度言った。

「返事は？」

「はいっ」

威圧する言葉に慌てて応えれば、ふつとウィル・ヒギンズは吐息を落としてナシユの脛に唇で触れた。

「いい子だ」

酒臭い息が耳元で柔らかかさをもって囁く。

壁に押さえつけられたまま、このままどうなってしまうのかとナシユが焦りをつのらせる頃合に、問題の上官はぎゅっと一層強くナシユを抱きしめた。

ナシユ……

その後、あのでかぶつの無表情淡々口調の上官は、普段は決して吐き出されない、やけに色っぽい艶やかな口調でナシユリーの名を口にし、囁いた。

「気持ち悪い」

思わずペンを持つ手に無駄に力が入り、ナシユは「ふふふふ」と肩を揺らしながら、折れたペンをゴミ入れの中に放り込んだ。

壁に向かってしゃがみ込み、吐くに吐けない馬鹿上官の口に、ナシユは青筋をたてながら指を突っ込んだ。

腹が立っていればどんなことでもできるものだ。なんて自分は男らしい。どうして男に生れ落ちなかったかと悔やみながら、ナシユは新しいペンの先端を火で炙った。

吐いた後の始末もつけてきっちりと上官を官舎に連れ帰り、寮長に引き渡した自分は本当に立派だ。

立派過ぎて涙がでる。

「あああ、放置すればいいじゃないか、馬鹿ナシユリー！」

気づいたところで後の祭り。せめて今はせこせこと日記でつづり鬱憤を晴らすことしかできないナシユリーだった。

そつだ召喚してみよう！

物心ついたときから父親とか母親という人は居なかった。

それでもちつとも寂しいなんて思ったことは無いのは、優しいおじいちゃんがいたし、あまり家には居ないけれど、ぱぱがいたから。

ぱぱは有名な召喚魔導師だった。

召喚っていうのは、魔方陣と宝石や色々なアイテムでもって魔獣や悪魔やらを引き寄せる術のこと。そして魔導師っていうのは、召喚魔術士達を指導することが許されたとっても偉い人だ。偉い人だから、ぱぱはいつだって忙しくしていて、ちつとも家には寄り付かない。

ぱぱはぱぱであってパパじゃない。六歳のファウリーには良く判らないけれど、「血の繋がらない女の子を援助するのはパパだから。ちよつ、父さんもレイシエンも睨まないでよ。よし、じゃあぱぱにしよう！」ぱぱならいいだろう」と言っていたから、あくまでもぱぱはぱぱだ。パパだとおじいちゃんが怒るから、そこは間違えちゃいけない。

ぱぱはよく「面倒くさい人だよね」と人に言われているから、きつと面倒くさい人なんだと思う。

それに、ママが必要な時は、お隣のレイシエンのお母さんがいつだって手をかしてくれたから、ファウリーはちつとも寂しくなんか無かった。

おとなりのレイシエンは十も年の離れたファウリーのお兄ちゃんだ。

でももうお兄ちゃんとは呼ばないとファウリーは決めた。

だって友達のレガッタに酷いことをしたし、カロウのことも虐めた。だからもうレイシエンはお兄ちゃんじゃない。

お兄ちゃんっていうのは、優しい筈なのに、レイシエンはちつと

も優しくない。だからレイシエンはお兄ちゃんは落第だから……フ
アウリーの弟にしてあげよう。

ファウリーはぎゅっと手を握り締めた。

そうしてはじめて気付いた。

「レイシエンが弟なら、ファウリーはおねーちゃんだ！」

なんて素敵。

とつても素敵！

あたしつてば頭いいつ。

ファウリーは有頂天になってばたばたと駆け出し、三階にある自
分の部屋の窓から勢いをつけて飛び出し、屋根の上を歩いてお向か
いに伸ばしてある板の上を歩き、いつだって開いているお隣の家の
窓に入り込んだ。

「おにー……」

つい癖でお兄ちゃんと言ってしまいそうになったファウリーは慌
ててがばりと口をふさいだ。

窓を開いて入り込んだ先は、レイシエンの家の屋根裏部屋に当た
る。

自分の部屋だつてある癖に、レイシエンはここに入り浸つて小難し
い本を読んだり、なんだか判らない数式と戦っているのだ。

その時も屋根裏部屋に置かれている木箱に寄りかかり、レイシエ
ンは本に視線を落としていた。

「ファウリー、きちんと下から来なよ。窓はぼくが通る道なんだか
ら」

「だってズルイ！ おにー……じゃなくて、レイシエンばかり楽
しようなんて許されないんだからっ」

はじめて呼び捨てにされた当人は瞳を瞬き、その短く色素の薄い
青銀に見える髪をかきあげた。

「レイシエン？」

問い返す声は穏やかなものだった。

「そう！ レイシエンは意地悪だからもうおにーちゃんて呼ばないことにしたのっ。今日からはあたしがおねーちゃんて、レイシエンはおとーとね！ だからっ」

とっても素晴らしい筈の提案だったというのに、レイシエンはいかにも「うわー馬鹿がいる」という生ぬるい眼差しで十年下の六つの子供を見下ろし、いつも通りその頭をべしりとはたいた。

「その脳みそ、もう少し皺を増やして出直して」

「くうううっ」

ファウリーはごんつと音をさせた頭を両手で押さえて涙目でレイシエンを睨みつけた。

「お」

「おっ」

「おまえのかーちゃんてべそおっつっつ」

うわーんつと身を翻してファウリーが撤退しようとするれば、その襟首をとっ捕まえてレイシエンは窓ではなくその部屋唯一の扉からひょいっつと廊下へとファウリーを放り出し、階下に向かって声をあげた。

「かーさんっ、ファウリーが母さんのこと出臍だつてさ」

張り上げられた声を最後にぱたりと閉ざされた扉に張り付き、階下からずんずんと足音も高く階上へとあがってくる恐怖の大王に、ファウリーは半泣きで扉をたたいた。

「おにっ、お兄ちゃんっ助けてっ」

召喚魔術達人の為の書。

金色の飾り文字で書かれたが、あついで本の表紙を指先で何度も撫でる。召喚魔導師である。ぱの蔵書から引き出した一冊は、幼い子供の心に激しい好奇心を呼び起こした。その場にはないものを召喚する。

知らないもの、知らない生き物。

本の中には色々な情報がひしめいているが、生憎と難しい文字が多すぎて今年やつと八つになったばかりの子どもには理解できないところもある。

それでも、必死になって解読した文字をつなぎ合わせ、そうして屋根裏に少しばかり不恰好な魔方陣を描いた。

心臓がときどきする。

「えつと……あとは」

必要ものはカエルの干物とトカゲの尻尾。猫のヒゲとジギタリスの葉に、なんだか判らないレッドシエル。レッドというくらいだから赤いものに違いない。ということとトマトを用意した。ついでに猫のヒゲは切ったら可哀想だから、じいちゃんの白髪で代用する。白くてちくちくするからきつと大丈夫。ネコの髭とたいして変わらない。ジギタリスの葉が理解できなくて、「レイ、ジギタリスを頂戴」とお隣のレイシエンにお願いしたら、笑顔で頭を殴られた。

葉というくらいだから葉っぱでいい筈だから、ジギタリスはほうれん草で代用。駄目だったら今度は小松菜とかでやってみよう。

「よし！」

準備はできた。

その全てをすりつぶしてどろっどろにして煮込んだ液体は激しくイヤな色をしているし、においもかんばしくない。けれどもそれに、更に

「イキチ……」

生き血、だ。これってつまり、この自分の腕に流れているどくどくとした血。

顔をしかめながらそれでも勇気をもってナイフを掲げた。ぷるぷると震える手で、そっと、そおっと指先をぷつり。

「いたいっつ」

ぷつんつと切れた指から血が流れ、咄嗟に自分の口でちゅーつと吸いそうになってしまったけれど、違う。駄目、それじゃせつかく切った意味がなくなってしまう。

必死に自分を押さえ込み、ファウリーはぎゅっと唇を噛んだ。

謎のどろどろとした臭い液体にほとりと落とす。

いっぱい入れたほうがいいかもしれないけど、もう駄目。

我慢できなくて慌てて指先は口の中に入れた。なんだか美味しくない血は舌に絡んで顔をしかめた。

とにかく、さあ、召喚の為の準備はできた。

弱冠八つの稀代の魔術師（自称）ファウリー・メイは嬉々として本を片手に呪文を唱え、そして問題の液体を仰々しく魔方陣にぶちまけた。

「さあ、あらわれなさい！ 暗黒の獣。紅ドラゴン！」

そしてあの憎つくき、レイシエンを踏み潰して。もう絶対に許さないんだからっ。

人のことを小馬鹿にして。いつもいつも！

でもそれも今日この時まで。泣いて謝って「ファウリー様、もうぼくは弟でいいです」くらい言えばちょっとは許してやるっ。

紅ドラゴンが踏み潰したらそれどころではないとまでは考えない、浅はかな小娘ファウリーだった。

ぼわんとひろがる煙。ざわざわとざわめくその期待感にファウリーは瞳をきらきらと輝かせて叫んだが、すぐにその異臭を放つ煙にげぼげほとむせかえり、涙交じりに身をよじった。

必死に目じりの涙をこすりながら煙の向こう、そこには大人程の大きさの何かの存在を確認したが、あまりの目の痛みにぎゅっと目を瞑ってしまった。

白い煙が立ち消えて、そしてその場に現れた召喚獣にファウリーの笑顔はゆっくりと凍りついた。

「……あれ？」

びちびちと奇怪な動きの生き物は……手のひらサイズのタツノオトシゴ。

「たっ？」

びちっ。

「……竜^{たっ}？」

やがてぴちりと動かなくなったタツノオトシゴにファウリーは血の気を引かせて青ざめ、慌てて「水っ、水っっっ」とタツノオトシゴをつまみあげて水道水を溜めた桶の中に放り込んだが、海の生き物であるタツノオトシゴは海水ではなく真水に落とし込まれて止めをさされ、残念な結果を迎えることとなった。

「……ごめん、ごめんね、タツ。おまえはきつと生まれ変わったら紅ドラゴンになるよ」

いや、もしかしたら前世が紅ドラゴンだったのかもしれない。そっだ、きつとそうに違いない！

庭先に「紅ドラゴンを前世に持つタツノオトシゴ」は丁寧に埋葬され、墓標としてファウリーの食べたアイスの棒が差された。

「でもタツの死は無駄にはしないわ！ 何より、召喚術は成功よ！」

ファウリーはしっかりと召喚術達人の為の書を握り締め、やがてクツクツクツと喉の奥を鳴らした。

「見てなさいよ、レイシエン！ ぎゃふんといわせてやるんだから」「ぎゃふん」

仁王立ちで不気味な笑い声を上げるファウリーの頭を背後からべしりとたたき、レイシエンは平坦な口調で応えた。

「人の庭に勝手に穴掘るな」

「だってうちの畑はこないだ豆を植えたばかりだもんっ。可愛い紅ドラゴンの転生体であるタツノオトシゴが肥料になるでしょ」

「はあ？ 何言ってるのさ」

「レイシエンは頭悪いからわかんないんですううっ」

「なあにが紅ドラゴンだよ、糞ガキっ！」

庭先でぎゃんぎゃんと騒いでいるファウリーとレイシエンを見下ろし、屋根の上から唾を飛ばしたのは黒髪に黒い瞳を持つ青年だった。

あぐらをかくようにして屋根にすわり、苛々と足を揺り動かす。ぎりぎりと噛み締めた口元からは鋭い犬歯がのぞいた。

甘い、甘い匂いが誘いをかけたのだ。

カラメルのふんだんに使われたプリン。チョコレートを混ぜこんだ生クリーム。こんがりと焼けたシナモンと甘い蜜の香りがたっぷりとした焼きりんご。

空腹だった訳ではない。どちらかといえば腹は満たされていた。だが言うではないか、デザートは別バラ。

甘くてとろけるようなその香りの誘いに意識を集中させ、出所を探って飛び込めば

そこは古臭い屋敷の屋根裏部屋。

そしてちまつこい糞餓鬼が、それこそ乳臭い糞餓鬼が、ありえないような材料を使って召喚なんぞをしかした現場だったという訳だ

このオレ様を！ この偉大なる大悪魔のオレ様を、トマトとほうれん草とジジイの白髪なんぞで！！

ふざけんなっ！ ぜってえ許せねえっ。

オレ様は偉大なる大悪魔だというのに！

生憎とうかつに召喚なんぞされちまったこのオレのこの恨み、絶対晴らさずばいられまい。

なあにが召喚魔術士だ、こまっしやくれた糞餓鬼め。

とことん邪魔してやるから覚悟しやがれ！

「召喚されたショックで、慌てて身代わりとしてタツノオトシゴを残してやったが、この先おまえが何かを召喚しようとした時には愚にも付かぬものを出してやる」
恐怖に慄き涙しろ！

召喚術を行使すると何故か海産物を召喚する台所事情にのみ優しい大召喚魔導師ファウリー・メイの物語、ここに開幕。

しません。

また・召喚してみよう！

一体何がいけなかったのか？

ぐりぐりと薄茶の紙にペンを走らせながらファウリーは唇を尖らせ、うつぶせという格好で後ろ足をぱたと動かした。

アルコールの香りがつんと鼻につくような屋根裏部屋は、四方に置かれた魔法石のランタンが灯りを点し、そのぬくもりさえも伝えてくれている。

ファウリーの周りには幾つもの本が詰まれ、辞書も散乱していた。一見すると勉強熱心と感心されそうなものだが、ファウリーの勤勉さは完全に趣味と報復活動によって支配されているものだった。

「ドラゴンはやっぱりちよっと高度すぎたわ」

ファウリーは独り言を呟きながら新たな魔方陣を紙に書いていく。先日この屋根裏部屋の床に直接書き上げた大きな魔方陣は、三日の間せつせとデッキブラシで磨いて一生懸命証拠隠滅を図ったものの、結局おじいちゃんに発見されてお尻を叩かれるという屈辱を味わった。

しかもレイシエンは壁にもたれて薄ら笑いを浮かべて、

「子供のしたことだし」

と、庇うようなことを言っていたが、おじいちゃんに告げ口したのはレイシエンに違いないとファウリーはにらんでいた。

足腰の弱いおじいちゃんがわざわざ屋根裏部屋まであがってくるなんて早々無いことなのだ。

ひりひりするお尻で更に二日かけて丹念に磨き上げ、最後にはアルコールで消毒まですることとなった記憶は生々しい。

色々レイシエンに嫌がらせをしようと試みたけれど、なんといつても十歳という年齢差はいかんともしがたい。

レイシエンが道端で同級生の女の子達と話しをしている時に、これこそ素晴らしい嫌がらせだろうとばたばたと駆け寄り「おにいちゃん、こんなところで遊んでないでファウリーの勉強みてくれないと駄目っ」と腰に抱きついて言つてやれば、レイシエンは平然とファウリーの頭をなでて「わかったよ」と、そのままにっこりと笑つて「じゃあね」と女の子達に手を振ってくるりと背を向けてしまった。

レイシエン、超スコン説を流布させてやろうという目論見は、その場にいた女の子達の「レイシエンって優しいわね!」という言葉でうやむやになってしまった挙句、実際に勉強をみっちりやらされるという踏んだり蹴つたりの結末だったのだ。

そんなこんなで、ここはやはり召喚術だとファウリーは結論を出した。

またしても禍々しい獣を召喚し、レイシエンへと復讐を考えたのだ。

ということ、今日は魔方陣を紙に書くことにした。

紙なら処分が簡単! 破って丸めてゴミ箱に放り込めばいいのだから、今まで誰も考えなかったとは驚きだ。

ファウリーはやっぱり自分って頭いいなあと悦に入りながら、鼻歌を歌い、それに合わせて足先を振っていた。

「今度はもっと小さくて、でもすんごく威力のありそうなのがいいわっ」

がつつと口をあけると牙がよつきりと生えていて、レイシエンをがぶりと齧ってくれそうな生き物ってないかな。

傍らにある【よいこのまじゅうじてん】をぺらぺらとめくり、丁

度良さそうな魔獣を物色する。大きさは犬程度でいい。顎が強く、カッコイイのがいい。

頭の中であれこれと想像し、あるページでぴたりと手をとめた。猛々しい肉食の獣が前足をたしんつとふんばり、獰猛な口をがばりとあけてそこから発達した犬歯がきらりと覗く魔獣、牙豹のイラストにぶるりと身震いが出た。

「ファウ」

怖い想像に顔をしかめていたところで、かすかな声が窓の外から聞こえ、ファウリーは慌てて持っていたペンを放り出してぱたぱたと屋根裏の出窓からよつきりと顔を出した。

ファウリーの家は三階建てで、更に屋根裏ともなれば随分と高い。玄関の脇で口元に手を当てて「ファウリーっ」と声をあげているのは、友達のカロウだった。

特徴的なくたびれた帽子がひよこひよここと動いているのが判る。突然やってきた遊び仲間に、ファウリーは「屋根裏部屋にあがってきてっ」と声を掛けようとしたが、それより先に隣の家の二階窓からレイシエンが顔を出し、何かをカロウに言いつけ、二・三会話を交わすとカロウは肩を落とすようにして身を翻して駆け出してしまうた。

「ちよっ 何してんの、レイシエンっ」

「何って、ファウリーは勉強の時間だから帰れって言っただけ。宿題してるんだらうね？」

また阿呆な遊びなんかしていたら小学部にして奇跡の落第だ」

「馬鹿にするんじゃないわよ！」

誰が落第などするものかっ。

ぐぐぐつと手を握り締め、ファウリーは忌々しいというように舌を打ち鳴らした。

「あたしはゆるしゅーなのっ」

「この間のテストの結果をぼくが知らないとしても？ 隠す場所変えたほうがいいよ？ もうワンパターン」

「ちよっ、人の部屋荒らさないでよっ」

馬鹿にしきった口調で階下の窓からひらひらと手をふり肩をすくめてみせるレイシエンにカチンときて、ファウリーは出窓から落ちそうな勢いで指を突きつけた。

「見てなさいよ！ あたしは召喚魔術師なんだからっ」

「召喚なんてまだ言ってるの？ そんなことできる訳ないだろうに」

以前召喚したタツノオトシゴはその証拠を突きつける前にお墓を作ってしまった、その眠りを破ってはならないという優しさで掘り起こしてレイシエンに突きつけることもできなかった。

だが、今回は違う。

材料もちゃんともう一度用意したし、魔方陣はちよつと小さくて紙に書いたものだけれどきつと代用が利く。

ファウリーは「絶対にぎゃふんって言わせてやるんだから！」ともう一度いい、またしてもレイシエンに馬鹿にしきった顔で「ぎゃふん」と返された。

「っっっ」

真っ赤になって怒鳴りつけるファウリーは、ふいに冷静さを取り戻してふんつと鼻を鳴らした。

「そんなに言うなら、あがって来なさいよ！

あたしのカレーなる召喚術をその目で見ればいいわっ」

まったく、また馬鹿なことをしました。

ハチドリのような姿に擬態した悪魔は眇めた眼差しでファウリーを見下ろしていた。

一旦召喚されてしまった魔獣と召喚主は仮契約を交わされる。本来であれば 仮契約であるから一回の召喚で役割を与えられ、それさえ済めば自由を得られ、逆召喚によって元の世界へと戻される。

だが、生憎と「悪魔」は逆召喚を受けていない。ファウリーは召喚されたものをタツノオトシゴであると思っっているから、まったく気にしていないのだ。いや、元々逆召喚すら知らないのかもしれない。

おかげで自分の世界に帰れないという有様。

手っ取り早く召喚主であるファウリーが命を落とせば戻れるが、生憎と召喚された者は召喚主を殺すことはできない決まりだ。

ハチドリは光の届かぬ暗闇からじつとファウリーを眺め、ケツと危つく舌打ちしてしまいそうになった。

屋根裏部屋の中では、紙に書かれた召喚魔方陣 其の前で絶対にそれは間違っているだろうという謎の液体の壺を足元に置いたファウリーと、そのファウリーを生あつたかい眼差しで見下ろしているレイシエンがいる。

「やれるものならどうぞ」

という態度を隠そうとしないレイシエンは、腕を組んで左肩を壁に押し当てて立っていた。

「そこでおっくりと見ていけばいいわ」

ふふんつと鼻を鳴らすファウリーは、小さなナイフを取り出し、口の中でもごもごと召喚の為の文言を唱えはじめた。

どうみても、それは子供の児戯でしかない。

壺の中身もでたらめであるし、唱えている言葉も難しい単語は拾

えないのだろう。ところどころが抜け落ちている。
八チドリは不機嫌そうに顔を顰めた。

その様子を見れば見るほど、どうして自分が召喚されてしまったのか理解できない。理解したらしたで自らの自尊心が偉いことになりそうだ。

けれど、ファウリーがそのナイフの切っ先でぷつりと指に切れ目をいれ、ぷくりと赤い血が盛り上がった途端、八チドリは自分の内部がざわりと鳥肌たつようなざわめきを覚えた。

甘い、渴望。

そう、あの時と一緒にだ。

下らぬ技で召喚されたあの時。無視しがたい激しい欲求を覚えて咄嗟に来てしまったあの時と。

つつと血が壺に落ちると、それは今までの異臭ではなく極上の甘味のようにひきつける。

震えが走る程の動揺に驚いていると、壁に身を預けていたレイシエンが余裕のない程顔を顰めてファウリーの手からナイフを引き抜いた。

「こんな危険な遊びは禁止っ」

「遊びじゃないもんっ」

「とにかくくっ、人間の血を使って召喚なんて駄目だ」

怒鳴るレイシエンを無視し、ファウリーはその壺の中身を歪んだ魔方陣の上にぶちまけた。

「我が呼び声に応えて現れよ、牙の王　漆黒の牙豹っ」

ぞわりと一気に走り抜ける緊張と激しい嫌悪感。

八チドリは慌ててその姿を人形へと変化させ、その魔方陣から現れようとする未知の恐怖を力任せにねじ伏せた。

魔力と言う魔力を集中させ、開かれようとする召喚門を押さえ込む。

レイシエンは悪魔に気付くことなく、魔方阵からたちのぼる閃光と煙とに目をやられ、咄嗟にファウリーを庇うようにその腕の中に抱きしめて身を伏せた。

巨大な獣が自らの手の下で自由を求めて暴れるのを全力で阻み、それに重ねて魔方阵の上に自らの魔法をたたきつけ、別のものを無理やり召喚する。

邪魔をつ、邪魔をするなあああ。

獣の咆哮だけがアオオオオオと耳に残り、獣がその門と魔力に押し戻されていくのと同様、悪魔が門を押さえるために反対方向から出現させたものが、びったんばったんと紙の魔方阵の上で暴れた。

びたん。

「……………うわー、すごいやあ」

びびびびびびっっ。

先ほどの騒ぎなど無かったのか如く、床に座り込んでその膝の上にファウリーを抱え込んだレイシエンが起伏の無い声で言った。

「マゲロ……………」

呆然と呟くファウリーに、レイシエンは乾いた笑いを浮かべた。

「ザンネン、ブリだよ　　なんというか、まさかブリを出すとはね

！」

「ブリーイイっ」

レイシエンの膝からはいでた小娘が卒倒するような声をあげているが

それどころじゃねええええ！

それどころじゃねえだろうがっ。

こいつ、この馬鹿娘。今いったい自分が何を召喚しようとしていたのか判っているのか？

しかも、俺がいなければソレは召喚門を通り抜けてこの場で一里四方までも蹂躪していたかもしれないと気付いているのか！
今はネズミの姿に変化した悪魔はぶるぶると身震いし、キィィィと鳴いた。

珍しくげらげらと笑っているレイシエンが床をたたいているが、フアウリーはびちびちと暴れている自分の背にも近いその魚を前に半泣きでレイシエンに指を突きつけた。

「おぼえてなさいよおおっ」

「忘れるなんて無理だつて！ ブリ、めちゃくちゃイキのイイブリ召喚っ」

なにこれ、産地直送？

「レイシエンのばかあぁっ」

だからそれどころじゃねえつつうんだ、この馬鹿二人！

いつたいぜんたい、何故こんなことになるんだ？

なぜあんな出鱈目であんな強大な魔獣をつ。

二本足で立つネズミなど知らぬ気に、ファウリーは「まあ、なんで魚！」と地団駄を踏んでいた。

召喚してません！

窓から堂々とファウリーの私室に入り込んだレイシエンは、出窓からとんと床におりたち、気安い口調で声をあげた。

「ファウリー、明日の」

勉強机に向かっている子供は、べったりと机の天板になっ

た。「……まだ早い時間だっというのに」

ぼやくと、レイシエンはやれやれと肩をすくめてファウリーの両脇に手を添えて抱き上げ、机とは反対側にある寝台の上に横たえた。ベッドメイキングなどという言葉を知らない寝台には毛布が丸まって隅においやられているものだから、それを引っつかんでファウリーの上に掛けてやると、レイシエンは肩をすくめてファウリーの机に戻り、小さな椅子に腰を落としてその机を探り出した。

左側の引き出しの一番奥

二重底になっている板がぱこんと外れた。

手探りで引っ張り出した一冊のノートにはお世辞にも綺麗とは言いがたい文字で「日記」と書かれている。

レイシエンは当然のようにそれを開き、肩肘をついて顎を乗せて無造作に読み始めた。

ファウリーが日記を書き始めたのは小学部に通うようになってからで、レイシエンがその日記の存在に気づいたのはファウリーが九つになった頃のことだ。

ノートはもうすでに三冊になっていて、一冊目は見逃してしまったのが残念でならない。

時折りファウリーの留守に探してはいるのだが、なかなか見つからないのが難点だ。

どうしてレイシエンは意地悪なんだろう。昔はもっと優しくかった気がするのに。

喉の奥がクツと音をさせてしまい、慌てて息を潜めた。

レイシエンの馬鹿！　いつかやつつける。

「相変わらず語彙が少ないな」

笑いたいのには必死に堪えたが、思わず小さな声は漏れてしまっていた。

今日もレイシエンに頭を叩かれた！　人を馬鹿って言うほうが馬鹿って知らないレイシエンが馬鹿だと思う。

「じゃあやつぱりファウリーも馬鹿じゃないか」
ぺらりとページをめくり、この二週間程の日記を楽しく拝読していると、ぴたりとレイシエンの手が止まった。

カロウがもってきてくれた飴すんごく美味しかった。また一緒に遊びにいったらくれるかな。

「餌付けされてるんじゃないよ」

今日はナーイと遊んだ。カウロも遊ぼうって言ったけど、ナーイ達女の子は男の子と遊ぶのは嫌がる。どうしてだろう。乱暴だつて言うけど、カウロもマーカスも優しいのに。カロウはいつもお菓子くれるのに。

「ドニーの名前が無くなったのはいいけど、カロウは少し邪魔だな……ファウリーは食べ物に弱いのはどうにかならぬものかね」

やれやれ。

ぱたりと日記を閉ざし、レイシエンは二段目の引き出しの奥にもう一度日記を収めなおすと、寝台で毛布に抱きつくようにしているファウリーを見た。

つい先日十になったばかりのちびすけ。この辺りでは滅多に見ることもないさらさらとした黒髪と黒灰のような透明な瞳を持っている。

初めてレイシエンがファウリーを見た時、すでにファウリーは四つ程の年齢で、そして隣に暮らすパードルフが困った顔をしてその腕に抱っこして現れたのだ。

「すみません、コールストンさん。お乳つてでます？」

……パードルフはちよつと変わった男だが、どうやら四歳くらいの子供はすでに乳離れをしているということも知らない様子だった。そして十四歳の少年の母親が乳などでないことも。

あげく常識知らずのパードルフはその子供を「ちよつと見といて下さい」と言つてその後半年近くもの間レイシエンの家に預けっぱなしにしたのだ。

ただしパードルフは召喚魔導師という職種の為にか金払いは良く、その時に皮袋一杯の金貨をおいていったものだから、むしろレイシエンの母親などは憤慨した。

「この子は今日からうちの子だよ！」

と、完全にパードルフを無視して言い放ち、レイシエンも数日もすればそのまま受け入れた。

「名前は何？」

問いかけると黒い飴玉のような眼差しをまたたいて、不思議そう

に「ふあう」と言っ。

「ファウ？」

「リー」

続いた言葉に「ファウリー？」と確認すれば、こくりとうなずく。「とー、たまは？ とーさま。かーさま？」

外国の子かと思っただが、言葉はきちんと思じるようどほつとした。不安そうにパードルフを探しているようだったけれど、母は無視して身を屈め「ファウリー、あたしがママだよ。こっちはお兄ちゃんのレイシエン。パパはいつもは遠いところで仕事しているが、丁度今日の夜は戻つて来るよ。お腹はすいたかい？」

母の説明に不安そうに黒い瞳が揺れる。

「にー、ちゃ？」

とにかく、その日からファウリーはレイシエンの家族だった。

艶やかな黒髪の大人しい子供は、はじめのうちこそびくびくとしていたし、何かといえればレイシエンの足にはりついてはにかんでいた。ものめずらしい姿も手伝って、町の人は遠巻きに見ていたけれどそのうちにファウリーの姿は町に馴染んでいった。

時々意地悪な子供がいてファウリーの髪や瞳の色を嘲るけれど、そうするとファウリーは決まってレイシエンに抱きついて「どうしてファウリーはお兄ちゃんと違う色？ お兄ちゃんみたいな綺麗な色なら良かったのにな」と潤んだ瞳でせつせつと語るのだ。

はじめてできた妹は、まるで壊れ物のように可愛くて仕方が無かった。

「いやあっ！ 久しぶりい」

いつものように外で一杯ファウリーを遊ばせて、疲れて眠った彼女を抱っこして自宅に戻ったあの日、満面の笑みで片手をあげて言ったパードルフを殴らなかつたのは今も後悔している。

呆気にとられているレイシエンの腕からファウリーを取り上げ、眠っているファウリーの頬にチュツチュと音をさせて口付けたのだ。ぶちりと血管が切れそうになった。

「寂しかったかい、ファウリー」とパードルフは陽気な口調で言ったが、たたき起こされたファウリーはむにゃむにゃと口を動かし、パードルフを見て「だあれ？」と尋ね返した。

その時ほど胸がすつとしたことは無い。

パードルフは呆然としてファウリーを見つめ、わざとらしくふるふると首を振った。

「ま、まあいい。今日からは一緒に暮らせるからね！ 父さんを説得して連れてきたから、日々の世話はおじいちゃんがしてくれるよ」

「冗談じゃありませんよ！」

母は怒鳴り声をあげ、ファウリーはびくんつと身をすくめた。

「ファウリーはうちの子ですっ」

「そんな訳ないですよ。ファウリーは俺のです　ちょっと預かっていてもらっただけじゃないですか」

不思議そうにパードルフは首をかしげ、ファウリーを抱いたまま歩き始めた。

「ファウリー、帰ったらおじいちゃんに挨拶するんだよ」

「なに？　ねえ、何……？　ママっ、おにーちゃんっ、なんなの？」

泣き声をあげるファウリーに、レイシエンは慌てて手を伸ばした。小さな手がレイシエンの手にふれからみ、必死に救いを求めるといふのに、パードルフはひょいっと容易くよけて肩をすくめた。

「ファウリーはうちの子だっ」

「レイシエン、ファウリーを可愛がってくれたんだね？　ありがとう。でも我儘でおかしなことを言っちゃ駄目だよ」

違う。おかしなことを言っているのはパードルフだ。

突然来て、傍若無人に子供を置いていった拳句に連れ去ろうとしている。

けれど結局、ファウリーは隣の家連れ戻された。

養育権というヤツをパードルフは主張し、預けている間の費用もきちんと自分が出していたことを証明したのだ。

幸いなことにパードルフは引越したりしなかったから、ファウリーは毎日レイシエンの家を訪れたし、それまでと何も変わっていないかのようにも見えた。

でも、そんなのはまやかした。

以前のように一緒に起きたりしない。

共に食事をする回数も激減したし、お風呂にいられてやることもない。なにより、父親が引き取るのは当然のことなのだとなんとか納得させようとしたのに、パードルフはおかしなことを言ったのだ。

「血のつながらない娘を援助するのはパパだからパパって呼んで」

血が繋がっていないのにファウリーの所有権　イヤ、養育権を主張した意味が判らない。パードルフは父親ではないのだ。

レイシエンはパードルフが大嫌いになった。

大嫌いでありながら、他人には「尊敬している」と嘯く。当人には笑みを向ける。そうすることで自分の内にまったく別の感情を育て、隠し通していくのは難しいことだった。

突然ファウリーを連れ去られてはたまらない。

もともとパードルフなど隣の家にも暮らしているのかいないのか判らないような存在なのだ。警戒などされてファウリーを連れて行かれるくらいなら、いくらでも褒め称えてやる。

ファウリーはその記憶の中にレイシエンと暮らしていた半年あまりなどすでに留めてもいないし、パードルフのことを「ぱぱ」と言っていて慕っている。

絶対にファウリーは馬鹿だ。

考えれば考える程腹がたってくる。

レイシエンは机の上の魔導石のランタンを消し、薄暗くなった部屋に浮かぶファウリーの白い寝顔に溜息を吐き出した。

「まったく馬鹿でしょうがない」

ファウリーが馬鹿なのは仕方ない。

帰る家を忘れてしまった愚かなファウリー。

あの時、手を離してしまっただから帰ることができなくなってしまったファウリー。

でも、大丈夫。

「あと五年くらいかな。少し長いけど、五年たてばうちに帰れるよ」だから、大丈夫。

レイシエンは小さく微笑を落とし、眠るファウリーの頭を一度撫でていつものように窓から軽やかに抜け出した。

本棚の上で飛びつさぎの格好でそれを眺めていた悪魔はかしかと耳をかきながら「ぶっ」と鳴いた。

人間つつうのはおかしなイキモノだよな。

起きている時は怒らせてばかりの癖に、寝ている時はまるきり違う行動をとる。

おかしいながらもこの「人間」てやつを眺めて二年。

悪魔はそれでも一つ気付いたことがある。

「ガキの日記見て喜んで人間は人間とてまずくねえ？」

残念なことに、悪魔は悪魔なのでそれ以前の問題でこの青年が色々まずそうなことにはまだ気付いていなかった。

召喚禁止！

「ぱははっ」

泣いて泣いて、泣きはらした翌日。

ファウリーはぼうつとかすむ頭で台所におりて、暖かいミルクとベ
ーコンに目玉焼き、昨夜の残りのとろとろのコーンスープにおじい
ちゃんの焼いてくれるおいしいパンという朝食を平らげた。

その後食器の片付けもそこそこに、おじいちゃんに昨夜訪れていた
ぱは 召喚魔導師のパードルフはどうしたのかと尋ねた。

本来であれば朝一番に叫ぶべきだったが、毎日の習慣で思いつきり
朝食を食べてしまったオコサマファウリーだった。

「ファウリーが寝た後に帰ったよ。ミルクのおかわりはいるかい？」
帰った、というのはおかしな表現だ。

ここはパードルフの家なのだから。
だが、仕事が忙しいパードルフは実際に自宅にいることは滅多に無
い。

昨日だって突然訪れ、そして ファウリーをさんざ叱り付けて、
うなだれているファウリーを宥めながら寝かしつけるまでの数時間
しか在宅しなかった。

ファウリーはパードルフが居ないという言葉に、おじいちゃんの
言葉を無視し、慌てて階段を駆け上がった。

二段飛ばしで足音も荒く駆け上がり、思い切りパードルフの書斎の
ドアノブを引っつかみ キーンという硬質な音と共にその扉か
らバチンと静電気の攻撃に短い悲鳴をあげた。

『あけちゃいやーん。えっちいー』

耳に痛みをもたらす音と、パードルフの声と同時にドアノブの上にくりゅんつと出現したのは、黒い奇妙なぶよんぶよんとした雫のよ
うなモノだった。

「くうっ」

ファウリーはその気持ち悪さに咄嗟にドアノブから手を離れたが、
未練からもう一度勇気を振り絞って手を伸ばした。

『いやあああ、やめてえ。痴漢よおお』

まるで襲われる乙女のようにパードルフの声音でソレが悲鳴をあ
げながら微弱の電流を流しまくる。

そう、不愉快な声をあげているのはその黒いぶによぶによだ。

召喚魔導師パードルフの「封印」の為の召喚獣。

ファウリーはわなわなと身を震わせ、半泣きで叫んだ。

「ばばの馬鹿ああ」

「おはよう、ファウリー」

医療魔法士の資格をとったばかりのレイシエンは、研修士の白衣
姿で嫌味つたらしく笑みを浮かべていた。

レイシエンはファウリーの髪を毎日結び上げるといふ日課を持っ
ている為、今もその手にはブラシを持っていたが、ファウリーは今
日は絶対に髪を結わせてやるつもりなんて無かった。

それどころか、もう絶対にレイシエンとなんか口を利かない。

「昨日、パードルフ先生が来てたんだって？ 言ってくれればいい
のに」

レイシエンの言葉に、ファウリーは泣きはらした目で相手を睨みつ
けた。

「レイシエンでしょう!」

「何が?」

「ばばにあたしが召喚したってチクったの」

口なんか利かないと誓ったが、もうすでにその誓いは破られた。

三歩歩くまでもなく忘れる鶏頭なファウリー、十一歳。

悔しくて悔しくて仕方が無かった。

パードルフは召喚術を禁じた挙句、ファウリーにとっても大事な魔導書の宝庫である書斎を出入りできないように封印してしまったのだ。

「チクったなんて人聞きの悪い。さすが尊敬するパードルフ先生の娘だって褒めただけだよ」

しれっとレイシエンは言うが、パードルフに告げたという事実は言い逃れる気は無いらしい。

ファウリーは小刻みに身を震わせ、ぎゅっと拳を握り込んだ。

レイシエンの告げ口のおかげで昨夜こつてりと絞られたのだ。

「召喚術を行使するには資格が必要で、その資格をもたないものは犯罪者として投獄されてもおかしくない。それがたとえ子供であっても!」

召喚魔導師としてのパードルフはそれを許すことはしなかった。

召喚術の初歩を学園で学ぶことができるのは、中学部に入ってからそれも基礎と召喚術に対する倫理、法律を学ぶだけで実際に召喚をするのは二年目に入ってから。

それも教師が居る場と決められている。

卒業までの間に試験をパスすることができれば、やっと高等部で召喚士としての専門課程を受けることができるのだ。

現在ファウリーは十一　さすがに色々とまずいと思い、パードルフには秘密でこっそりと召喚の術を高めようとしていたのだが、いくらやってもファウリーは魚介類しか召喚できなかった。

それで先日思いあまり、十歳のときにレイシエンに禁じられた自らの血を使つての召喚を試みたのだが運悪くレイシエンにはれたのだ。

「レイシエンの馬鹿っ」

「なんとでも。約束を破つたのはファウリーだろう。ぼくは血を使つのは禁止だと言つておいたのに。それを無視して阿呆な真似をするから悪い」

「つつつ。あんたなんて大っ嫌い」

「もうその台詞飽きた」

ふんつと鼻で笑われ、ファウリーは地団駄をふんでくるりと身を翻した。

「ファウリー？　髪は？」

ふりふりとブラシを振つてみせるレイシエンに背を向けたまま、ファウリーは背負つた鞆のベルトを少しばかりずらしながら「知らないっ」と言葉を吐き捨ててそのまま石畳の坂道を駆け上がった。行った。

腰までの髪が鞆の左右でざんばらで揺れている。

普段であればきっちりと左右の三つ編みに結い上げ、頭をくるりとめぐらせるようにして止めている黒髪。今日はぞんざいに櫛は通した様子だが、好き放題に伸びて鞆の上も跳ねている。

それを瞳を細めて見送り、レイシエンは吐息を落とした。

「また朝から喧嘩？」

窓から顔を出した母親に、自宅の階段に座り込んでいた白衣の息子はブラシを振った。

「喧嘩するほど仲がいいってね？」

「……嫌われてるようにしか見えないけどね」

呆れるように眉を潜められても、レイシエンは肩をすくめた。

「仲良しだよ」

真っ赤な目のファウリーが背負った鞆の皮ベルトを掴むようにして足音も高く歩いていると、突然「きつたなーい！」と嘲る声が響いた。

いつもと同じように今日は蝶の擬態でひらひらとファウリーの頭に張り付いていた悪魔は、その声にすうっとファウリーの頭を離れて近くの家の屋根で座り、ニヤニヤと人型に変化した。

最近のファウリーの天敵、ニナ・ローダというクラスメイトの少女は、それは見事な金髪をばさりと片手でわざとらしく払って見せた。

途端にファウリーの眉が一層潜まる。

ファウリーが通っている小学部へと続く坂道の先、同じ鞆を背負った金髪の少女は意地悪く唇を尖らせていた。

「あんた本当に女の子？ 汚らしい真っ黒い髪。せめて結い上げておかないと見苦しいったらありやしないわね」

結い上げていれば結い上げていたで「黒が際立って汚い」と言う癖に。

ファウリーは涙をぴたりと止めて、ふんつと鼻を鳴らした。

「今日もわざわざご苦労さま」

ニナは最近こうやって道の真ん中でファウリーを待ち伏せしてい

るのだ。決まってこの場所で。

嫌味を幾つか口にする習慣をつけたようで、ファウリーはうんざりとしていた。

ニナは、ほら、レイシエン先生が好きだから。

と、気の毒そうに友人のチエルシーが教えてくれた。

ファウリーからしてみれば「目が悪いの？ それとも趣味が悪いの？」と本気で心配になる事柄だが、さすがに今までそのことを指摘したことはない。

だが、今日のファウリーは違った。

たった今、レイシエンと喧嘩してきたばかりだ。

こうやって訳のわからない嫌がらせを受けることもまたレイシエンのせいだと思つとむかむかむとしてくる。

「どうせ寝坊でもしたんでしょうけど、女捨ててるのってどうなのかしら」

ニナが冷たく言う言葉に、ファウリーは覚めた眼差しで口を開いた。

女捨てているも何も、十一で女を前面にだしてくるほうがファウリーには判らない。男だの女だの面倒くさい。ファウリーに大事なものは、召喚魔術だ。

「女捨てているだのどうでもいいわよ。どいてくんない？」

「あんたって本当に生意気！」

意味が判らない。

「レイシエン先生が優しいからってつけあがってるんでしょー！」

……ファウリーはますます顔をしかめた。

レイシエンは現在学園の隣にある医療療法士の塔で研修生をしていて、小学部の定期健康検査などの手伝いをしたりもするので、生徒

達の間では専ら「先生」といわれている。ファウリーは口が裂けても先生などと言ったことは無い。

そして何より、生憎とレイシエンが優しいなどという事実はまったく全然欠片も無かった。毎日のように喧嘩している訳ではないが、いったいぜんたいレイシエンのどこが優しいというのだろうか。

「……今までずっと黙ってきいてたけど
ファウリーは淡々と言った。

「二ナ、あんたつてすつごく趣味が悪いんじゃない？」

「なっ、何の話しょ？」

「レイシエンのどこがいいの？」

言った途端、二ナは真っ赤になった。

「なっ、何よあんた。何突然言ってるのよっ」

……うわ、気付いてないつもりだったのか？ そんな馬鹿な。

ファウリーはあきれ返り、相手を無視してその横を通り過ぎようとした。しかし、相手は突然の指摘に逆上したのか、いきなりファウリーを突き飛ばした。

坂の上から。

自分より上にいた相手にどんつと突き飛ばされたファウリーは、そのまま真後ろにのけぞった。

慌てて左手で身を庇おうとしながら、自分を突き飛ばした相手を見返す。

それはきつとほんの数秒の出来事だったろうに、ファウリーは相手の顔が怒りから驚きに変わり、口元が歪むのを確認した。

馬鹿じゃない？

驚くならそんなことしなけりゃいいじゃないの。

石畳の上に体が投げ出され、鈍い痛み小さな悲鳴があがる。幸い、背負っている鞆がクッションになり頭を打ち付けるようなことは無かったが、庇った手首がぐきりと痛みを伝え、ファウリーは呻くように顔をしかめた。

顔を顰めながら二ナを見れば、さっきまで真っ赤だった顔が、今は青くなって　そしてぷいっと顔をそらして駆け出してしまった。

「……ひどっ」

ファウリーは小さく呟き、投げ出されたままの格好でなんとか上半身を起こし、ひりひりと痛む尻で石畳に座ったままツッキと痛む手を持ち上げた。

「……」

石畳の上でこすれ、白く後になったところには擦過傷。

ファウリーの顔が引きつったのは、痛みで確認ができないが手首のあたりから手がぷらーんと力なくうなだれている。

そして、手の平には小さな石が幾つもめり込み、ついで血が滴る。確認した途端に激しい痛みが身を襲い、ファウリーは奥歯を噛み締めた。

せめて骨折の有無は確かめようとおそるおそる手を振ろうとした途端、大きな手がぐつとファウリーの痛む手を掴み上げ、そして

血に濡れた手のひらに生暖かな舌が触れた。

「え………?」

しゃがんだままのファウリーの後ろ、その肩を抱くようにしてファウリーの手首を掴み、手の平の汚れなどもせずその傷口

を舐めているのは、黒髪の男だった。

それは抗えない甘美な誘惑だった。

ファウリーの体がどんつと無遠慮に押された時、悪魔はいつものように足を組んで屋根の上でそれを眺めていたが 普段どおり、何があるうとただ傍観しているつもりだった。

ファウリーは悪魔の召喚主だが、悪魔はそれを認めていない。ファウリーへの復讐の為にこうしていつも近くにいるだけだ。

最近ファウリーと口げんかする人間が一人増えた。それに対しても何か思いがある訳ではない。ニヤニヤとファウリーとその子供のやりとりを眺めていたが、その小娘がファウリーを力任せに押した途端、不快な気持ち湧き上がり、ついでファウリーが石畳に音をさせて叩き付けられた瞬間、辺りに甘い香りがほとばしった。

甘い、甘くて抗えない誘惑。

ものを考えるということさせない強い欲求が、悪魔を愚かな行動に走らせた。

とんとと地面におりたち、その甘い魅惑の根源に舌を這わせた。

とろりと赤い液体が舌に触れた途端に、どうしようもない程のざわめきが自分の中に広がっていく。

驚いたように小さくファウリーが声をあげ、慌てて悪魔に捕らえられた手を引き戻そうとする。それが途端に腹立たしく感じた。

強く押さえつけて、もっと もっと欲しい。

欲望のままに求めようとした途端、突然げしりと横合いから蹴りをいれられた。

「どけ、この変質者っ」

力任せに、容赦なく悪魔に蹴りを入れたレイシエンは更にもう一撃、自らの持つていた鞆で悪魔の頭を力任せに殴りつけ、そのまま未だ石畳の上に腰を落としているファウリーの二の腕を掴んで立たせた。

それまで甘美な酔いに身を震わせていた悪魔は、突然の攻撃の意味がまったく理解できずに頭を抱えてうずくまっていたが、何かを考えるより先にもう一撃、レイシエンの蹴りを受け、その場にへたり込みそうになったが、だんだんと腹立たしさが沸き立ち、反撃してやろうと顔をあげたところで、レイシエンの後ろにばたばたとこちらに掛けてくる警備隊の姿を認め、悪魔は面倒くささに舌打ちをしてその場から逃げ出した。

レイシエンは警邏隊に変質者だと告げ、自分もその後を追いかけてよとしたが、ファウリーがよるけて短い悲鳴をあげた為にその足を押しとどめた。

「ファウリー？ 怪我させられたのか？」

「……いや、あの」

「何かされた？」

ファウリーは眉をぐぐつと潜め、てるーんつと力なくうなだれたままの自分の腕をみて、更に眉を潜めた、

「……もしかして、氣遣われたの、かも？」

「何言ってる？」

「あの人に何かされたって訳じゃ……いや、手のひら舐められたけど」

「舐められた？」

低く唸るようなレイシエンの口調に、慌ててファウリーはぶんぶんつと首をふった。

いつもとはまったく違うぴりぴりとしたレイシエンの様子にファウリーは怖さを覚えた。まるで自分が怒られているかのようだ。

なんであたしが悪いかのように怒られてるの？
悪くないよねっ！

「さっき転んで！ 咄嗟に腕をついたらこんな感じになっちゃったの！ それで、あの人が……傷を気遣って？ くれたのかな？」

そう口にはじめてファウリーは気付いた。

「どう見ても変質者だろ」

さっき、自分の手のひらを舐めていた青年が 自分と同じようにこのあたりでは見ることもない黒髪に黒い瞳であったことに。

慌てて駆け出して追いかけてよとしたのを、レイシエンが手首を強く掴んで押さえ込んだ。

「怪我、見せて」

「それどころじゃっ」

「ファウリー！」

きつい眼差しで睨まれ、ファウリーは唇をぎゅっと引き結んだ。

自分が貰われっ子だとは知っている。

パードルフは隠そうとはしないし、隠し様もない。

ファウリーの持つ色彩は今まで誰も持っていなかった。国がまず違うのだ。

「ファウリーはぼくの宝物だよ」とパードルフはさらりと流してしまふ。父のことも母のことも教えてはくれない。せめて、自分と同じ色彩の人にあってみたいと今まで思っていたのに、せっかく出会えたかと思えばコレだ。

ファウリーはレイシエンの手に包まれ、治療呪文で熱をもちはじめた手を見つめた。

生暖かい舌先が汚れた傷跡を清めるように舐めていた感触がよみがえり、気恥ずかしさにぶるりと身が震えた。

「痛い？ 少し時間が必要だよ。今日は学校は休んで治療に時間をとろう　大丈夫。きちんと治せるから」

レイシエンが珍しく優しい口調で労わってくるのが　気持ち悪い。

ファウリーは内心で顔をしかめながら、町の警邏隊が追いかけていた青年を思っていた。

……また、会えるだろうか？

いや、でももしかして本当にただの変質者？

舐められた手を思い、ファウリーは複雑な気持ちになった。

「糞レイシエンぶつつぶす！」

その時、レイシエンとファウリーに変質者認定を受けていた悪魔は、ずきずきと痛む頭を抱え、屋根の上でレイシエンへの報復を誓っていた。

召喚した？

真新しい装丁の本には、召喚魔導基本の書と流れるような飾り文字で書かれていた。

中等部も三年目に入り、やっと自らの希望の通りに必修科目で召喚術科を選んだファウリーだったが、当然、基礎だとか基本なんて阿呆くさいものには興味は無い。

しかし、ファウリーは着実に「召喚免許」を手にいれなければいけないのだから、この道は定められた通りに歩まなければならないのだ。

おじいちゃんは「あの阿呆と同じ道を行くなど止めて欲しいんだがなー」と肩を落としたが、別にぱではあるパードルフが召喚魔導師であるからこの道を望んでいた訳では無い。物心ついた時から、ファウリーは何も無い場所に新たな存在を招く召喚という行為に憧れていたのだ。

何より。

おじいちゃんが言うようなことではなく、ただ単に腹立たしい幼馴染に報復する手段として手っ取り早いのではないかというのがきつかけだ。

目にも鼻にもつくレイシェンに何かやり返してやろうと思った時、パードルフが所蔵している「召喚術の書」が目についただけなのだ。

「基本なんて今更学ばなくてもね」

鼻歌交じりに言いながら、それでもファウリーは自分の部屋の寝台に体を投げ出し、寝そべるようにして真新しい本を開いた。

ぱらりと本をめくれば、そこに書き記されているのは国の法律だった。

召喚は国法召喚第二条によって定められたものだけが使うことを許され、許可なきものは誰であろうと厳罰に処する。

いかめしい文体で書かれたそれに、ファウリーは眉をぎゅっと潜めた。

厳罰についてはパードルフにも聞かされた。

ファウリーは幼い頃に自分勝手に召喚術を行使してしまった。

免許の無いものが召喚術を行使することが罪であるなどその当時は知らなかったのだ。

一度目の召喚で現れたのは、ちっぼけなタツノオトシゴだった。今思い出せば、ちっぼけというにはちよっぴり手の平よりおっきなサイズで違和感を覚えるが。

突然表れたソレに対し、海の生物だということをつっかり失念し、ポンプでくみ上げた生水の中に入れたことによりトドメをさしてしまったことは、幼いファウリーにとって苦い思い出だ。

ついで二度目の召喚はブリだった。

そう、ブリ。

体の側面にそれはそれは綺麗な黄色と青いラインの入ったぴっちぴちの新鮮な魚。

どちらの召喚も魔獣と呼ばれるものを召喚するつもりであったというのに、何故か海産物だった。

いったい何がいけなかったのか……調べようにもその後パードルフによって図書室に鍵と封印を施されてしまった為に謎は謎のままだ。

学園の図書館も、召喚術や魔導書の類は一定の許可を持つものでなければ読むことが許されない。

「でも、それもオシマイ」

中等部の三年になり、召喚術を専攻すれば一応図書館のC区画許可がおりる。

まだまだ初歩の段階の書籍しか読むことは敵わないが、これからは毎日のように図書館に通って召喚術を学ぶことができるのだ。

ファウリーはつまらない法律の書かれたページをさらりと無視し、ぺらりとページをめくった。

喜びを示すかのようにその足が寝台の上で揺れている。

そんなファウリーの様子を、実は戸棚の上から眺めているものがあるのだが、ファウリーは相変わらずソレをはつきりとは認識できていなかった。

幾度か何かがよぎるような気がしているが、虫や小型の生き物のように思われる。大きさは時としてネズミ程。

実害という程の害を覚えてはいない為に放置しているが、実際はソレが四六時中自分に張り付いている悪魔だと知った場合、激しい嫌悪感が膨れ上がったことだろう。

悪魔は現在棚の上をせっせと清掃中。

細かい埃はくしゃみのもとです。

「それに、むかつくけどレイシエンが監督してくれれば召喚術だってやっていいんだし！」

レイシエンは召喚魔術師でも魔導師でもないが、腹立たしいことに教員免許を取得している。

教員免許を所有している人間は監督官をすることができるのだ。レイシエンへの報復活動の手助けをレイシエンにやらせるという、なんとも素晴らしい復讐のシナリオ。

ある意味、か・ん・ペ・き！

ファウリーは鼻歌交じりで本の文字をむさぼった。

「いやあああつ」

金切り声の悲鳴をあげて、ファウリーはがばりと体を起こした。召喚基礎の本の文字を視線が追えば追うほど、胃が引き連れるような思いを味わった。

まずファウリーの喉からうめき声を出させたのは、謎のマスコットキャラ、召喚獣の【しょうちゃん】が博士課程を学ぶ学生が頭に乗せるような帽子をかぶり、偉そうに【はじめての召喚】について語っているところから始まる。

はじめての召喚は、とにかくイキモノ、ナマモノは避けること。【召喚術は相手の意思を無視して自らの元に召喚する強制力の強い魔術だから、決して初期の段階でイキモノを招いたらいけないぞ！技量以上のイキモノを召喚して食べられちゃうことはよくあるんだ】

さらつと怖いことが書かれている。

「食べられちゃうって……」

しょっぱなから紅ドラゴンを召喚しようとした記憶がまざまざとよみがえる。

脳裏に残虐なドラゴンがファウリーをがしりとその鉤爪のついた手でがっしりと掴み上げ、ギョオオオんと炎を撒き散らしている場面を想像し、目元がひくひくと引きつった。

【自分の技量に見合ったものをこつこつと召喚して経験をつんで行くこう！】
まるで小学部のテキストのような文体に苛立ちを覚えながら読み進めていくうちに、召喚術の基本アイテムの欄がカラフルな図解入りで書かれていた。

「なんか、あまりイイ趣味じゃないなー」

思わずぼそりと言ってしまったのは、使われている品物がどれも「エグイ」様相を示しているからだ。

カエルの干物、クロトカゲの尻尾。猫のヒゲふと、猫のヒゲにいやな記憶が呼び起こされる。

「でもおじーちゃんの白髪で代用されるんだから、結構適当よね」
乾いた笑いが漏れたが、そのうちにどんと自分が使った品物と書かれているものの差異に血の気が引いていく。

挙句、マスコットキャラの【しょうちゃん】がやたら生真面目な調子で念を押す。

「アイテムの使用方法、分量はきつちりと調べて決して間違っては駄目なんだ。召喚獣は君のちよっとしたミスを利用して、召喚主を陥れることもある。召喚したらきちんと契約を交わし、名前を与えてちゃんと自分の支配下におかなくちゃ駄目だぞ」

……とりあえずタツノオトシゴはいいとして、ブリは食べてしまいました。

契約は勿論、名前なんて付けてない。

そして、引きつりつつも文章を指先で追いかけるように読んでい

たファウリーだったが、最終的に堪えられずに悲鳴をあげたのだ。

幼い自分のやった愚かな行為が恥ずかしくて。

「うわっ、うわあっ。やだ、ちょっと自分バカすぎ。どうしようっ。
恥ずかしいっ」

突如として胸に飛来する羞恥心。

召喚術にトマトとほうれん草を使ったのはもしかしたら自分だけかもしれない。

ファウリーは近くにあったクッションを振り回して寝台に幾度も当たて、最終的にそれを抱きしめるようにして「ばかー」と自分を罵倒した。

「何がバカなの？」

そしてはたりと気付くと、自分の部屋の出窓を外側から開けてやけに堂々と部屋に入ってくる男が一人。

ファウリーは思い切り相手を睨みつけた。

「レイシエンっ、来るなら下から来なさいよっ」

「こっちのほうが早いからね。それより、なに？ さっきの悲鳴」

レイシエンは勢いをつけて窓から室内に入り込むと、眉を潜めて寝台の上のファウリーを見下ろした。

召喚魔術の本とクッションとを抱えるようにして今は胡坐をかいて座っている十四歳の娘は、不機嫌をあらわすように唇を尖らせた。

「レイシエンには関係ありません」

「もしかしてまたネズミでも出た？」

「ちよっ、どうしてネズミがいるのしってるのっ」

正確に言うのであれば、ネズミのようなモノだ。

時折目の端にちらつと見かけののだが、それを確実に目にしたこと
は無い。なんとなく毛のあるイキモノでは無いかという予想でファ
ウリーはソレをネズミではないかと疑っているのだが、勿論その実
態はファウリーがその昔召喚してしまった悪魔である。

現在は柵の上の埃を綺麗に拭き取り、得意顔で胸を張っていた
のだが、窓からの来客に顔を顰めていた。

「ぼくは千里眼だから」

レイシエンはさっくりと言っているが、彼の愛読書は日記と書か
れているファウリーの勉強机の中に隠されているノートだ。

ファウリーが普段どんな阿呆なことを仕出かし、考えているのか
良く判る素晴らしい書物で、レイシエンは二週間にいっぺんそれを
読むことを楽しみにしている。

あまりに素晴らしすぎて、時に赤いインクで添削してやりたい衝
動にかられてしまうが、とりあえず今はまだやったことはない。

とつても高尚な趣味だとレイシエンは自負しているが、ファウリ
ーにはらすつもりは今のところ無かった。

もしばれた場合、悪魔の存在以上にファウリーに激怒されるのは
目に見えている。もう幾度も突きつけられた「絶交」程度ではすま
ないだろう。

レイシエンはまったく気にしないが。

「ネズミ、もしかしてレイシエンの家からうちに逃げてきたんじや
ないでしょうね？」

唇を尖らせるファウリーに、レイシエンは片眉を跳ね上げた。

「もしかして話を誤魔化そうとしているんじゃないだろうね？ さ
っきの悲鳴は何？ その様子じゃネズミが出たって感じでもなさそ
うだし」

「
」
「ファウリーは呻いて思わず横を向いてしまった。
」
「なんでもない」

ジギタリスなんて毒草だし。
ほうれん草で代用しちゃったわよっ。

過去の失敗の恥ずかしさにのた打ち回り、思わず声をあげてしまっ
たなどと恥の上塗り過ぎて言えない。

自分の無知が恐ろしい。

もうこの記憶は永遠に封印してしまいたいが、こういった羞恥は突
然何の前触れもなく、「いやぁ」と声をあげだくっってしまう黒歴史
となるのだろう。

ファウリーはぶるりと身震いし、自分の頬が赤く染まるのを感じて
思わずむにむにとつまんでしまった。

「ファウリー」

冷やかにファウリーの名をゆっくりと口にするレイシエンを見
上げて、ファウリーは唇を尖らせた。

「な・ん・で・も・ないってば」

「学校で何かあった？」

「ああ、もおうるさいなあ。出てって」

ファウリーは顔を背け、寝台の上に放置されていた「召喚魔導基
本の書」へと手を伸ばそうとしたが、それより先にレイシエンがそ
れを手にしていた。

「専攻、召喚にしたんだ？」

「 そう」

「ファウリーのことだから、ちょっとやってみたいか思ってるだろう?」

ぴくんとファウリーの体が反応する。

それを確かめるように見つめ、レイシエンは淡々と口にした。

「よければ見てあげてもいいけど。ああ、でもファウリーにはパードルフ導師がいらっしやるもんね? ぼくが見てあげるなんておこがましいか」

レイシエンの言葉にファウリーはぐつと拳を握り込んだ。

確かに、ファウリーには保護者のパードルフがいる。宮廷の魔導師に名を連ねている超絶有名人だが、有名人だけに自宅に戻る事など滅多に無い。

年に両手の指だけ顔を合わせれば多い程だ。

そして、パードルフ以外に魔術に通じている知り合いといえればレイシエンしか居ない。

ファウリーが自宅で魔術を練習したいと願うのであれば、それはレイシエンに頼むほか道は無いのだ。

元よりそのつもりだったファウリーだが、まさか相手から言われるとは思っていなかった。

「じゃあ、ぼくは用無しだろうから帰るよ」

あっさりと言い切り、手にしていた「召喚魔導基本の書」をぼんと寝台に放って背を向けようとするレイシエンの腕を、ファウリーは咄嗟に掴んでいた。

「レイっ」

「ん? なに?」

レイシエンは色素の薄い瞳を細めて「なにか？」というようにファウリーを見下ろしてくる。

ファウリーは何故か判らない屈辱のようなものを覚えつつ、悔しさにひきつる口元を動かした。

「見て、くれる？」

「んん？　どうかしたの？」

ももごと動くファウリーの口からこぼれた声が小さいのか、レイシエンは一旦離れかけた足を一步ファウリーの元へと戻し、少しだけ身を屈めて見せる。

レイシエンの腕に自分の手を掛けたまま、ファウリーは苦痛を堪えるように眉を潜めた。

「ねえ、ファウリー？　どうかした？」

勢いをつけて言ってしまったばい。

「召喚の練習がしたいから、時々監督官をして」って、ただそれだけの話なのだ。何より、今レイシエン自身が申し出たのだから、きっとレイシエンだって無下に断つたりしないだろう。

勢いだ。

思い切つて言えば

一旦伏せた瞳をあげ、思いのほか近い場所にレイシエンの眼差しを見つければ、ファウリーは危うく悲鳴をあげてしまいそうになった。

「ぼくにどうして欲しいの？」

「う、あ……えっと」

「どうしたの？」

小さなファウリーの声を聞き入れる為に身を伏せるレイシエンは、まるで内緒話でもするように声を潜め優しく囁いた。

「何か頼みがあるのなら、ちゃんとお願いって言つてごらん」

レイシエンが口元を緩めてその指先で頬に触れようとした途端、どすりという鈍い音と同時、レイシエンは突然「うぐっ」と呻いた。

「なにっ」

がくりと体制を崩したレイシエンの様子に驚いたファウリーは、レイシエンの足元にごとりと音をさせて落ちたモノに大きくその瞳を見開いた。

「亀！　　って、えええ、なに、何で亀？っ」

ひっくりかえった亀は、ファウリーの声など完全無視でじたばたと四肢を動かしていた。

亀の種類などあまり知らぬファウリーだが、とりあえずすっぽんではなさそうだ。平らな腹を見せてなんとか爪先を床に当ててひっくり返ろうとしている亀の姿は、やけに　シユール。

「ファウリー！　　召喚術は勝手にやっちゃ駄目だと言ってるじゃないかっ」

腰に突然亀が激突したレイシエンは憤慨を示したが、召喚術など行使した覚えのないファウリーはレイシエンと亀を交互に見ながら「いや、違うからっ」と慌てて言ってはみたが、レイシエンは信じられなかった　だが、

「もう二度とこんな風に召喚術を行使しないと約束してくれたら、ぼくがきちんと監督してあげるよ」

というレイシエンの言質はとれたので、ファウリーはなんだか納得しきれぬものを残しつつも良しとすることにした。

それに、もしかしてあまりにもあたしが天才過ぎて知らぬ間に召喚してしまっただか！？

あくまでも前向きなファウリーだったが、勿論そんな阿呆なことはない。

「ケケケケケケケ」
ファウリーによって【カメダさん】と名づけられた亀をさつさと元の海へと逆召喚した悪魔は満足気におかしな笑いを漏らした。

そう、亀は立派な海亀だというのに、またしてもファウリーは風呂桶の中に亀を放り込んだ。

さすがにレイシエンが塩を入れていたので、今回命にかかわるような事態にはなっていないが。きつと朝目覚めてカメダさんがいないことにファウリーは落胆するだろう。

しかし、その落胆を思っただ悪魔は笑っているのではない。

「ざまみろレイシエン！」

勿論、海亀を出現させたのは悪魔の仕業だ。

以前レイシエンに変態扱いされた挙句、蹴りをいれられた恨みは忘れてはいない。

ことあるごとに何かしらの報復を考えていたのだが、今回はじめじめと日々考え、ねちねちと練り込んだ完璧な計画ではなかった。

レイシエンの指先がファウリーの頬に触れようとした途端、何だか腹立たしさを覚えて思いきりレイシエンの背中に着地してしまったのだ。

アライグマの姿で。

掃除の為にちよつと小型のアライグマになっていた悪魔だが、ネズミならともかくアライグマがそうそういてはまずいだらうという認識くらいはある。

悪魔は咄嗟にその場に海亀を召喚したのだが、阿呆なファウリーとレイシエンはやっぱり愚かにも騙された。

「ばーかーだーよーなああああ。

ケケケつと笑いつつ、悪魔はちらりと寝台で眠るファウリーを見下ろした。

「レイシエンにいいように扱われてるんじゃないかねえよ、ばーか」

何といっても、ファウリーをいいように扱っていいのは、積年の恨みを持つ自分なのだから。

召喚……？

「相変わらずドブネズミみたいな髪ね。いい染料でも紹介しましよ
うか？」

腕を組むようにしてふんつと鼻を鳴らす二ナには特徴がある。

決して他の人間の前ではそんな台詞を口にしたりしないし、言う時
は決まって 坂道の下。

どうやら一度坂道の上からファウリーを押しして怪我をさせたこと
をそれなりに気にしているらしい。

気にするくらいならもう止めればいいのに

ファウリーは内心で「またか」と呟き、二ナを避けて歩こうとした。

「無視する気？ 生魚のファウリー」

「へんなあだ名つけてるのってまさか二ナじゃないでしょうねっ」
さすがにカチンときてしまった。

ナマザカナって、何だってそんなおかしな名前にするんだ。

「あーら、生魚がお気に召さないのであれば、魚介類のファウリー」
「……」

屈辱。

ファウリーは口元がひきつるのを感じた。

できるならば軽やかに相手を無視して通り過ぎたいのだが、二ナと
きたら行く先を塞いでいるし、言われたくないことをべらべらと喋
り続けている。

「あんたがぎりぎり落第しないのは、食堂のおばちゃんに気に入ら
れてるからって噂は結構信憑性が高いわよね」

違っわよ。

と、実は結構言い切れない為にファウリーはぐつと言葉を詰まらせた。

召喚実習で魚介類を出すファウリーは、課題をこなせないという点で確実に落第候補生だったが、それでも召喚することができるという能力を買われて、ギリギリ落第せずに今年二年への進級を果たしていた。

学園長じきじきに言われてしまったのだ。「本来であれば、課題をこなせていないのだから落第と言われてもおかしくはないのです。けれど、ファウリー・メイ あなたの能力は決して低いものではないという教員達の総意がある。今回は二学年に進級を許します」

ただし。

そう、ただしと学園長は続けた。

「今年度中に海鮮以外の生物を召喚しなさい。そうでなければ、召喚師という道をすっぱりと諦めてもらうことになるでしょう」

白髪のふくよかな女性学園長は結び上げた髪を一度撫でつけ、そつと溜息を落とした。

「あなたの海鮮召喚術は実にすばらしいものです。ただ、本来定められたものではないものを召喚することは大変危険を伴うと判断します。判りますね、ファウリー・メイ」

あたしだって、好き好んで魚介類を召喚している訳じゃないわよ。ちゃんと課題の通りに、小型魔獣のリリックス 手の平サイズのスカンクのような生き物 を召喚しようとした訳だし、その為の薬草も全てきっちりと計って間違わずに用意した。

だというのに、出たのはサンマだった。

サンマ……旬のサンマはとっても美味しいですね。
あたしだって大好きだ。

「今日出た学食のサンマ、あんたが出したってもっばらの噂よ」
二ナが勝ち誇った調子で言うが、それもまた事実なのでファウリ
ーはぐくつと拳を硬くした。

サンマが大量だったわよ！

床の上をぴちぴちと飛び跳ねるサンマの体はたった今海から無理
やり引つ張つて来られたという様子で傷ひとつなく銀色の艶やかさ。
きつと市場に出せばなかなかの高レートでさばけると思われるが、
ファウリーの実習中は食堂の下っ端が何故か待ち構え、嬉々として
その魚を回収していった。籠で二つ分。

毎度毎度、扉のところで大きなケースを抱えてまっているあの
男はいったい何者っ。

嬉しそうにニコニコと「ファウリーさんっ」とかほざいているあの
料理人が憎い。

ファウリーはぎりぎり奥歯をかみ締めた。

「なんとか言いなさいよ、魚屋ファウリー」

「レイシエンに振られたって本当？」

よし。

ファウリーは「覚えてなさいよーっ」と叫んで逃げていく二ナを
冷たく見送り、深く深く、嘆息した。

何故魚介類しか召喚できないのか。

それは心底自分が知りたい謎だ。

先日もばばであるパードルフに泣きついてみたものの、パードルフ

自身が理解できないと苦笑した。

「ファウリーは才能があるよ。それは間違いない。けれど力のコントロールが難しいのかもしれない」

このままでは召喚師としての免状を受けることはできない。

この先もずっと、ずうっと監督官がいる場でしか召喚ができないのだ。

ファウリーは一定の速度で歩いてきた足を速め、逃げ込むように自宅の玄関を入るとそのままの勢いで階段を駆け上り、三階の自分の寝台に飛び込んだ。

悔しくて嗚咽が漏れる。

才能はあるのだと、皆が言う。

才能はある けれどそれだけだ。

能力のコントロールができなければ、召喚師として認めてはもらえない。

認められなければ、召喚術を行使することは許されない。それをすれば 即刻牢獄に入れられてしまうのだ。

「どうしてよおっ」

子供の頃から自分は天才だと信じていた。

いつかそのうちにコントロールが利いて、きちんと召喚を行えると思っていた。

それが いつの間にか十六歳。

ファウリーが声を必死に殺して肩を揺らし、泣く様子を、本棚の上から真っ黒い毛玉が見下ろしていた。

ざ・ま・あ・み・ろ。

ケツと喉の奥を鳴らしながら、それでも悪魔はなんだか居心地の悪い感情に眉を潜めた。

ファウリーが泣いている。

それは自分が望んだ光景だ。

八つのガキの分際で、大悪魔である自分を召喚しくさった糞ガキ。その糞ガキに復讐する為に今までせつせと下らないことに精を出してきたのだ。

どれくらい下らないかといえば、いちいちファウリーが作り上げる召喚門を押さえ込み、出てこようとする魔獣ではなく海産物シリーズをかわりに召喚してやるという親切の押し売りだ。

下らないことは重々承知している。

下らないからこそその復讐なのだから。

そうして、その復讐が実り、ファウリーが泣くのは心の底から歓迎してしかるべきだ。

ファウリーが召喚術を行使するたび、せつせと繰り返した日々はこの涙の為ともいえる。

オレ様すげえい。

「……………」

くふつと喉の奥で嗚咽を繰り返し、枕に顔を押し付けて小刻みに震える十六歳の少女を眺めながら、本日は耳のでかいきつねのような格好に扮して尻尾でもって棚の裏の掃除に励んでいた悪魔は、その大きな耳がだんだんとへたりと沈むのを感じた。

「昨日はよくもやってくれたわね」
相変わらず二ナは坂の下にいる。

もういつそ趣味なの？

ファウリーは冷たい眼差しで肩に掛かる鞆の重みを軽減するように、学生鞆の皮ベルト部分を握り締め、そつと嘆息した。

「訂正すると、何もしてないわよ。言っただけで」

「どうしてあんな酷いことが言えるのよっ」

いやいや、二ナ。

その発言はブーメランだから。

ものすっごい勢いで戻ってるから。

「あなたの趣味がものすっごく悪いのは判ったから、あたしに構うのやめてくれない？ あたしだって好きでレイシエンの隣に住んでる訳じゃないし」

「なんて罰あたりなっ！」

罰あたりって……

「昔はっ、あんたがレイシエン先生の妹だからと思って優しくしてあげたのにな」

怒鳴るような言葉に、ファウリーは瞳を瞬いた。

記憶を「ごそ」と探ると、確かに遙か大昔 二ナとは仲良く遊んだ時期もあったような気がしないでもない。

言われれば「そうかな？」程度の記憶なので、「昔から意地悪だったよね」と誰かが訂正すれば「そうだね」と塗り替えが簡単な記憶だが。

「それは残念ね。あたしはあんな外面ばっかの男の妹なんて冗談じ

やないけど」

「誰が妹になりたいって言ってるのよっ」

きいいてと怒るニナはそのうちに血管が切れるのではないだろうか。

ファウリーはやれやれといつも通りにその脇をすり抜けようとしたが、本日のニナは怒り心頭らしい。

がしりとファウリーの腕を掴んだかと思うと、今度は意地の悪い笑みを浮かべた。

「あんた、悪魔の子だっていわれてるの知ってる？」

「それは初耳だわ」

おそろく言い出したのはニナだろうけれど。

「その真っ黒な目や真っ黒な髪！ 悪魔の色だものねっ」

別に黒は悪魔の色ではない。

ただ、いないだけ。

黒灰の瞳に真っ黒い髪の間人は、この大陸にきつとファウリーだけだ。

子供の頃に幾度かパードルフに「何故自分だけ色が違つのか」と問いかけたことがある。

パードルフはファウリーを膝に乗せ、その黒髪を指にからめて笑って見せた。

「ファウリーの髪はお母さんにそっくりだよ。とても綺麗な人だね。誰より強くて、誰より自信满满で 腰まである黒髪が艶やかで、

オレはあの人が好きだよ」

「じゃあ……お父さんは？」

おそろおそろたずねると、途端にパードルフは不機嫌そうに瞳を眇めた。

「さあ。知らないんだ。気づいたらあの人はファウリーを抱っこしてた。抱っこして、自分の宝物だと言っていたんだ」
ぎゅっとファウリーを抱きしめて、パードルフは明るい口調で言った。

「ってことで、あんまり腹立たしいからファウリーを貰ってきちゃった。そのうちにあの人が怒り狂って追いかけてくるかなって思ったんだけど　　やっぱり色々難しいのかな」

遠いから。

くすくすと笑うパードルフに、ファウリーは小首をかしげた。

「あの人が迎えに来たら、ぱぱがどれだけファウリーを愛してるか、あの人を愛してるかちゃんと説明してね？　　じゃないと俺殺されるかもしれないし。何より」

パードルフはちゅっとファウリーの額に口付けて、とっておきの喜びを分け与えるかのように囁いた。

「あの人が来たらもう二度と離さない。ずっと一緒にいてもらうんだ。そしたら、あの人と、オレと、ファウリーでちゃんと家族だね。ぱぱはパパになっちゃうね」

あの時間いたことは、あまり考えたくない。

もしかしてそれは誘拐と定義されるのではないだろうか、とか。深く考えると色々とまずそうなので、ファウリーは「いつものぱぱの冗談」として流すことにしている。

「聞いているの、ファウリー？」

不機嫌そうな二ナの台詞に現実に戻され、ファウリーは嘆息した。
「悪魔でも何でもいいわよ。あたしはこの辺りの子供じゃない。レイシエンの妹でも、ぱぱの娘でもない。それで？　それがどうかしたの？」

「つとに、可愛くないっ。本当に悪魔なんじゃないの？」

二ナの激昂などいつものことで、ファウリーはふんつと顔をそむけて行こうとしたのに、顔を向けた先に人がいるとは、思わなかった。

ばふりと鼻から人にぶつかった。それは無様に。

「悪魔悪魔とうるさいガキだな」

「なっ」

ぶふつと勢いをつけてぶつかってしまった相手を見上げ、ファウリーは黒灰の瞳が零れ落ちるのではないかという程見開いていた。

「黒髪黒目がなんだっつうんだよ、このタコ。」

世間にはもつと奇抜な色がわんさかいるぞ。

毎日毎日、ガキは家帰って勉強でもしてる」

言われた二ナも瞳を見開き、ついで本当に悪魔にでもあったかのように悲鳴を上げて逃げ出した。

逃げ出したい気持ちは良く判る。

黒髪に黒灰の瞳を持つファウリーはこの辺りではもう認知されている。

いまさら、二ナのようにうるさく言ってくるものはいないし、何よりファウリーの保護者であるパードルフは有名で有力者で、そして厄介な相手であるから誰も好き好んで喧嘩を売ったりなどしない。

けれど、やはりこの国で黒髪は異質だ。

ファウリーは自分と同じ黒髪を持つ青年をじっと見つめ「あ、ガイジン」とつぶやいた。

それと同時に、やっぱり自分は「ガイジン」なのだという思いが飛来したが、それより先に手は動いていた。

「あのっ」

がしりと相手のシャツを掴みあげると、それまで唇を尖らせていた黒髪の青年が、ギョっとしたように飛び退ろうとしたが、ファウリーに掴まれていた為には阻まれた。

「うわあっ」

相手のあまりの慌てっぷりにファウリーまでおかしな声があがりそうになったが、ファウリーは更に手に力を込めた。

「この間、会った人ですよねっ」

「なっ、なっ、うおおおっ、俺何してんのおっ」

黒髪の青年は卒倒するような声をあげ、必死にファウリーの手を引き剥がして逃れようと暴れた。

「あのっ、ありがとうっ」

ファウリーの口について咄嗟に出た言葉は、何に對してのありがとうだったのか。先日、手を舐められたのはお礼を必要とする事柄であるのか、それとも今……今はかばわれたのだろうか。

まるで猫に見つかってしまった鼠のようにとびはね、ファウリーの手が離れた途端駆け出して行ってしまった相手に、ファウリーは落胆しながらそれでも必死に「あたしファウリーっ、あなたはっ」と名を尋ねてはみたものの、返ってくるものは無かった。

当然だ。

黒髪黒瞳を持つ悪魔には未だ名は無い。

ぎよおええええええつ。

悪魔は一足先にファウリーの部屋に飛び込み、ぼふんっとその姿

を最近気に入りのイモリに変化させ　どっからどう見てもヤモリ
なのだが、家守などという名前は悪魔的に縁起が悪いのでイモリ
自分を落ち着かせる為に冷たい窓にぺったりとひつついた。
小さな心臓が激しく鼓動している。
ドクドクドクドクという心音を間近で感じながら、うおおおと気
分だけ頭を抱えた。

何だって俺様ってばファウリーの前に立ってるんだよ。
駄目だろお。駄目だってばよ。

ファウリーが虐められていようと俺には関係ねえってのに。
無意識の行動にあうあうとうめいていると、遅れて帰宅したファウ
リーが自室に入り、鞆を机に投げ出し、そのままの勢いでぱったり
と寝台に身を投げ出した。

「うわぁーっ、すごい。やっぱり強く願えば叶うことってあるのね。
忘れないように日記に書いておかなくちやっ」
ぎゅっつとレイシエン作の枕を抱きしめて、ごろごろと寝台で転
がるファウリーの様子を視界に入れて、先ほどまで動揺していた悪
魔は

悪魔は　え、なにこいつ？
なにヘラヘラしてんだよ。キシヨっ。

と、別の意味で冷静さを取り戻した。

勿論　この日の日記を盗み見て冷静さなど吹き飛ばす男がどこか
にいるのだが、それはまた後日。

琴女

千八百五年 箱根の関所を抜けた山道にある大岩に腰をおろし、
旅装束の娘は白木の杖を手にあふりと欠伸を一つかみ殺した。

時節は春。娘の年はといえは十七・八か。

大きめの瞳に黒緑の髪。艶のある髪を結び上げもせず腰までたらし、下のほうで緩く結わえた姿は愛らしいが、何故か額には紫の鉢巻という一風変わったその姿は人目を引いた。

これがもし一人旅であつたならば、すぐさまどこぞに引かれ、若いその身は無残に散らされもしようが、娘には連れがある。

年の頃は彼女の父程にも離れたようにも見える男は山伏のような也をし、口元には無精髭が蓄えられ、その眼差しは厳しくあたりを睨みつけていた。

「琴、琴女 そんなに休んでばかりだと今宵は野宿になるぞ」

惘然と男が言えば、娘は唇を尖らせた。

「箱根の宿で泊まればいいじゃないの」

まだ関所は越えたばかり。ここはもとより宿場町ではないかと驚く娘に、男はもう幾日も手入れもされていない髪をかきあげたが、ずさんな髪に指が止まる。その頭は鬘も結わらずばらに伸ばして結い紐で結ばれただけだった。

「すくなくとも日暮れまで歩かなければ」

低く威嚇するような声で言えば、琴女はついつと視線をそらした。

「いやーよ」

「琴っ」

「歩くのに疲れたわ。お風呂も使いたい。彦だつて臭いし汚い。近くにいる人間の迷惑を考えなさいな」

つんと冷たく言い切る娘を忌々しそうに睨みつけ、彦 彦江は不精に伸びた顎髭を引つ張るように撫でた。

その時にくんつと鼻を二・三度動かしたのは、さすがに琴女の言葉が気に掛かったのやもしれぬ。

「誰の為に先を急いでいると思ってる」

「誰もついて来て欲しいなんて言ってるわ」

ああ言えばこう言うの見本のように突き返される言葉に、彦江はぎりりと奥歯を鳴らし、持っていた錫杖をがしやりと鳴らした。

俺がいなくば何もできないだろうに！

そう怒鳴ってしまいそうなのを必死に堪えた。確かに琴女言う通りで、彼女の道行きに半ば無理やりついてきたのは彦江のほうだった。だがそれは七割がた彼女の為であり、二割がしがらみであり、自分の意思は残りの一割に満たない。

時折山道に放り出してやりたい気持ちになるが、それでも彦江はいつだって耐えてきた。

「それにしても、江戸ってどんなかしらねえ」

産まれてはじめて江戸に入る娘は夢想でもしているのかにんまりと口元を緩めている。江戸の噂など数多耳に入っているだろうといえ、琴女は小首をかしげた。

「田舎者とか？ 東者？ 悪口なら山と知れてるけれど、それはどこも一緒よ。あたしは京ばかりが良いとは思わないわ」

そう言う琴女は都言葉を使おうとは思わない。「お里が知れる」と笑うが、それは決して悪い意味では無かった。

大岩に腰を落として歩こうとしない娘にげんなりとしてみると、ふいに空々しい程に明るい声が入り込んだ。

「足でも痛めなさったかい？」

穏やかな若者の言葉に琴女がぴくりと反応し、相手の姿が年若く楚々とした　いわゆる好青年であることに微笑んだ。

「ええ！　長い旅に足を痛めてしまいました。難儀しておりますの。どこぞかに良いお宿をしりませんか？」

声音まで変えて媚びを見せる琴女の豹変に彦江は苛立ちを覚えて琴女の頭をにらみつけたが、琴女はすでに藍色の着物の旅装束ではない着物の男に夢中といわんばかりの様子だ。

箱根に居を構えていると思いき男は、少しばかり淡く微笑み、ちらりと彦江を見たがすぐに琴女に視線を戻した。

一瞥で女の連れがただの用心棒風情と見たのだろう。

「私の知り合いの宿にお連れしましょうか。私の頼みなら宿賃も少しは融通してくれるだろうしね。立てますか？」

「よければ手を貸して下さいさる？」

琴女は口唇をゆがめて笑い、すぐるように男に手を差出した。

「ご親切な方、特別に教えて差し上げますが内密に願います」

琴女はもつたいぶつた口調で相手の瞳を覗き込み、囁いた。

「私は公家の日野の娘　内侍ないしの局じよと呼ばれておりました。どうぞ琴女とお呼び下さいな」

「何故あんなことをっ」

宿の部屋につくなり彦江が声を潜めつつも我慢ならぬというように言葉に力を込めた。

「ばれたらただでは済まんぞっ」

低く唸る言葉は自然と振るえを含ませる。

眼光は射殺す程の強さでもって琴女を見ていたが、当の琴女はものともしない。

「あーら、ばれたりしないわよ」

くすくすと琴女は笑い、長い髪を払った。

「内侍ないしの局じよがどんな娘かだなんて、誰も知らぬのですもの」
微笑を湛える琴女は、それよりもと部屋の中を見回した。

用意された部屋は十二畳程の部屋と隣には布団がしかれた二つ間になつており、しかも宿の離れという贅沢なものだ。わざわざ温泉までも別に引かれたそこは、偉い方を迎えるのに使われるのだと宿屋の主人は汗をふきふき言っていた。

「内密だと言つたのに、口の軽い男」

意地の悪い言いように、彦江はぶるりと身を震わせた。

宿屋の主人の下にも置かぬ扱いに、まるで不本意というように琴女は寂しげに眉を潜めて囁いてみせるが、そんなものは演技に過ぎぬと長い付き合いのうちでよく知っている。

琴女は他人をそうやってからかうのを楽しんでいるのだ。

「人に知られぬ旅にございます。どうぞ他言無用に願います」

公家に連なる日野の娘といえば、今上様の妹背とも謳われたこともある尊き姫君だ。よくよく考えればそんな姫君がこんな場に修験者のような也をした男と二人で旅をするなどあるう筈が無い。だが、高貴の娘といわれれば確かに琴女は神々しき娘に見えるし、そこはかとなく漂う妖しさがへんに説得力すらもたらす。いかめしい彦江はといえば、世を忍ぶ屈強な護衛にも見て取れる。

「それより、お風呂！ 温泉っ」

琴女は言いながらしゅるりと額に巻いた紫色の鉢巻を引き抜き、そのまま手から離れた。途端、慌てたように彦江がそれを掴んで綺麗に畳む。

琴女は我かんせずで着物の帯紐に手をかけてばたばたと隣室に作られている浴室へと足を向けた。

「琴女っ」

ぼいぼいと着物を脱いでいく女を呆れつつも彦江は追いかけて、落とされる着物の帯、腰紐と拾い上げては丁寧に処理していく。最後に汚れた足袋を拾い上げたところで、ぴしゃりと浴室の木戸が閉ざされ、大きく息をついた。

「一人で平気か？」

呆れが滲む声を木戸へとむければ、盛大な湯の落ちる音と共に陽

気な声が響く。

「髪を洗って」

当然のように命じられ、更に深く息をつく。

まったく手のかかる女だった。着物にしても自ら脱ぐことはできるが、それを着るとなれば彦江の手伝いがなければできず、着せ方が悪いと難癖までつける。不器用で口は悪く到底一人で生きていくには無理がある。

その琴女が「京を下る」と言った折りに彦江は覚悟を決めた。

自らも行かねばならぬのだということ。そうでなければこの女は途中の山で野垂れていたに違いない。

脱ぎ散らかされた衣類をきちんと纏め上げ、当然のように着替えを用意していない琴女の為に自らが背負ってあるいて行^こ行李から洗ってある着物を一揃え引き出し、あとで自らの風呂の時にでも琴女の汚れた着物を洗ってやらねばなるまいとやれやれと呟いた。

「ひーこー」

「うるさい」

なんだか腹立たしさを覚えてだかだかと足音をさせて木戸を開くと、室内風呂の桶縁に頭を預けた琴女があふりと欠伸をこぼした。

「……」

湯には柚子がぶかぶかと幾つか浮かび、その一つを手の中で弄ぶようにしながら琴女は唇を尖らせる。

柚子と同様にまるく形の良い白きふくらみがぶかりと覗くのを慌てて視線をそらすことで誤魔化した。

「足が痛むわ。眠る前に足をもんで」

「俺はおまえの下男か！」

怒鳴ってはみたものの、彦江は手馴れた様子で琴女の長い黒髪を手桶で流し、持参している石鹸を泡立てた。

湯殿に用意されているのは洗い品ときたら案の定『ぬか』で、こんなもので髪を洗おうものなら琴女は数日の間むっつりと口をつぐ

んで不機嫌を示す。この石鹼一つで長屋暮らしの親子四人が半年は暮らせるこの女は本当に理解しているのだろうか。

髪を洗っている間、琴女はふんふんと鼻を鳴らして気持ちよさげに唄を謳っていたが、やがて仕上げに湯を打ちかければ用は済んだとばかりに彦江を追い立てた。

彦、彦江、夜は怖い……

泣きながら彦江の手をぎゅっと握り締めていた幼い娘は 記憶の改ざんではあるまいか。

「ほら、あんたもお風呂入りなさいよ。その無精髭もきっちり剃るのよ。あたしの共をするならもう少し身綺麗にしないと崖から蹴落とすわよ」

俺が落としてやりたい。

彦江はふるふると身を震わせていたが、身綺麗になった琴女が着崩れた浴衣姿であらわれれば苦言も言う気が失せた。

自然と手を伸ばしてきちんと整えてやのながら、眉を潜めて濡れた襟に苦言を落とす。

「髪の毛をちゃんととらんと」

「それくらいできるわよ。あんた臭いって言ってるでしょ」

まるで野良犬でも追うように手を振られ、彦江は自らの着替えの準備を済ませて琴女の汚れ物と自らの汚れ物を手に風呂場へと入った。

白い足袋に浅黒くついた汚れは血だろう。

長く歩き、肉刺ができて潰れてはまた新たな肉刺を作る。

彦江は琴女の足袋を丁寧に洗いながら嘆息した。

今日の琴女は岩を見つけるたびに足をとめてその重い尻をどしりと落としていた。本当に足が痛んだのだろう。無理をさせていたつもりは無いが、まだ年若い琴女には長旅は厳しいものがあるのだろう

う。だが、だからといって駕籠ばかりを使つてなどいられない。

懐に余裕のある旅でなし、最後の手段としてある銭刀の中身などできれば当てになどしたくはない。この宿屋だとて、こんな良い部屋を当てられてもその代価を要求されれば払うことすらできない。琴女が困惑気味に「こんな高い部屋はお払いできませぬ」と言えば店主が慌てて「めつそもございませぬ。尊き姫君から御代を頂くなどつ」と言つていたが 事態がいつかわるかもしれない。

彦江は暗澹たる気持ちで首を振った。

最悪逃げる為の算段をしなければならぬだろう。

まったくいつだつて問題を起ささずには居られないのだ琴女という女は。

内心で琴女への悪態を羅列しながら洗濯に励んでいた彦江は、足袋を洗い終わりついで無造作に手にしたものが琴女の襦袢であることに気付いて小さく呻いた。

何故男に襦袢を洗わせて平気なのか、琴女。

ならば自分の禪を洗え 洗つてみせろ。のしりつつそれを想像した彦江は無言となり、ただもくもくと襦袢を洗いあげた。

京にいる家人には決して見せられない有様だ。大の男が女の襦袢を洗っているなどと嘆かわしい。だが、琴女にやらせたら最後着る服がなくなるおそれがある。

ぎゅっと洗濯物を絞り水分を切ると、空桶の中に放り込んでがりと木戸を開け放った。

「琴」

声をかけたその場に、琴女の姿は無く、彦江は抱えていた桶をどさりと落とす。

「内侍ないしの局」

「どうぞ琴女と。そもそも内密にとお願いしましたのに」

困惑を込めた口調に、藍色の着物の若者は慌てたように謝罪した。
「すみません。ですが、ああでも言わなければ部屋に空きがなく、大部屋などそれこそどんなやからがいるか判らぬ状態ですから」「私には屈強な護衛がおりますもの。ああ見えて彦江は忍びの流れのもの。どんな場でも私を守ってくださいさるのよ」

ふふつて唇をすばめて微笑を落とした琴女は、まだ足が痛むよう
で座る場を求め、仕方なく柳の木の幹に背を預けた。

「しかし、京の都の姫君がこんな場にいるなど」

「あら、私が誰かはあなたは判っているのではなくて？」

唇をにんまりと歪めて琴女が微笑み、その指先を相手の胸元に添
わせた。

「琴女様？」

「私は占女ですの。巫女として神域に住まうもの。お優しい方。

あなたの望みを、かなえてさしあげる」

妖艶な笑みを浮かべ、琴女は唇を引き結ぶようにして甘い吐息を
落とした。

「ひと時の夢を与えてあげるわ」

琴女が上機嫌で部屋へと戻ると、彦江は部屋の中央で胡坐をかい
て胡乱な眼差しで琴女を睨みつけた。

その顔に無精髭はなく、元々親子程の年齢差を思わせていたとい
うのに、今は兄のように泰然とそこにいる。

「何をしていた」

「やあね、怒りっぽいのは嫌われるわよ」

琴女は言いながら袂から巾着袋を一つ取り出し、ぽんつと無造作
に放り投げた。

がしゃりと音をさせて彦江の手に落ちたそれに、彦江は苦いものを

噛むような表情を浮かべてその中身を確認した。

黄金色に輝く小判が五枚……くらりと気が飛びそうな金額だ。

「売ったのか？」

「勿論。タダでなんてあたしは安くないわよ」

「幾つ？」

「五枚。あんまりねだるのだから。それ以上は駄目って言ったのに……どうしても欲しいって値までつりあげて。いけない人」

くつと喉の奥を鳴らして言う女を更に睨み、彦江は乱暴に立ち上がった。

「出るぞ」

「えーっ。今日はここに泊まりましょうよっ」

「この愚か者っ。おまえの『符』が評判になればなるだけ危うくなるんだぞっ。五枚だと？」

一枚きりだと幾度も念を押しているというのに、何故聞き分けぬっ彦江は言葉を吐き出しながら、どうしてこの女から目を離れたかと自らを叱責した。

占いだけであれば問題は無い。琴女の占いに害は無い。失せモノを探し当てるくらいが関の山、未来は見通すことなどできぬのだからだが、『符』は駄目だ。

琴女の扱つかう寿ことぎの『符』は一枚だけ使うのであれば「幸せな夢」を与えるだけですむものだ。家族を失ったものがその家族の夢を見る恋するものをその腕かひなに抱いだく夢を見るものもいる。たった一度の幸福感に酔いしれるのであれば害はない。

たった一度の夢は生きる希望となるものだ。

だが、人はただひとたびの幸せが幾度も続けばそれ無しで生きる事がかなわなくなるのだ。

琴女はまごうことなき神域に住まうもの。

だがその扱いを違たがえればそれは神の寿ことぎから地の呪いへと変貌する。夢に浸りすぎるものはやがて身を破滅させるのだ。

その能力が災いし、京を出たのではないか。引きとめようとするもの達が無理やりに閉じ込めようとするからこそ、そこから逃れたのではないか。

彦江は絶望の呻きを漏らした。

「きちんと約したわよ。年に一度だけ、その日だけと定めて使うように。決して他言は無用と」

ふんつと機嫌を損ねた琴女だが、ことはそう簡単に終わることは無かった。

「同様つ。琴女様つ」

今にも逃げ出そうと彦江が荷を揃えている場合に、離れのその客室にあわただしく足音が迫っていた。

「なんてことつ！ あの男ときたらちつとも秘密を守れないのだわつ」

憤慨する琴女だが、彦江はその両肩に手を置いて激しく揺さぶり「おまえは馬鹿かーつ」とどやしつけてやりたい気持ちを抑え、黙々と荷を詰めた。

琴女の共の名乗りをあげたこと

それはこういうことであるのだ。と。

琴女の符はその後二年の間江戸の町で名をはせる。

だがその騒乱と公家の姫君の名を語る不届き者を江戸幕府は許さず、とうとう琴女は牢獄へと落とされるが、その罰は江戸ところ払い

故に江戸の民はまことしなやかに噂したという。

琴女は正しく公家の姫であり、幕府はそれを保護、京へと送還したのだと。

したがそれは二年の後のこと。
琴女はこれより江戸へと下る。

悪代官への道

直参旗本といえは聞こえはいいが、その次男ともなればただの跡取りの代替品としての意味しかない。

外に放逐する訳にもいかず、ようは実家で飼ひ殺される人生。

その人生に不満ばかりを抱えていた訳ではないが、似たような境遇の連中と酒と女に明け暮れて過ごすのは皆が通る道と言って過言では無い。

幼名、中富次郎。

元服後の名は中富清治郎。

その名だとしてあまりにも適當すぎやしまいかと内心でぼやき、酒の席で友人にからかわれたものだ。

遊郭と居酒屋、賭場に通いむしゃくしゃとした人生をやり過ごす。それだとして金子は全て親や兄の世話になるしかなく、自ら仕事を求めることもできない下らぬ人生。

変えたいと望んだことがあつたとしても、それは兄を蹴落とすことに他ならない。

まったく、くだらぬ。

「ふんつ。何が代官だ 地方代官になんぞなつたら、俺はせつせと悪銭を溜め込んで果ては楽隠居で面白おかしく遊興に励むさ」

兄の清朗が地方代官という役職を受ける伝ができたという報告を肴に笑い飛ばした時期が俺にもありました。

「代官様つ、村のもんから喧嘩で怪我人が出たと訴えがっ」

「ええいつ。知るかつ。んなもんは内証でさつさと済ませる。いいか、いちいちこちらに話を持ち込むな」

内証　つまり、ナイショだ。

いちいち公正に書類を起こして事件扱いにしているは、どれだけの金子が掛かると思う。地方代官所に金があると思うなよ。

というか、俺だって金があると思っていた時期がある。

そう。地方代官になれば村や町の人間から銭を搾り取って、商人と暗躍して大判小判がざつくざくに飴あられな夢を見ていたものだ。

兄が流行り病でぼっくりあっけなく身まかり、その後に転がり込んできたぼた餅は、決して甘くはないものだった。

葬式のあとのしめやかさを携えて下男一人を連れて任地におもむけば、ついた場所は恐ろしい程の田舎だったが、田舎には田舎の楽しみがあるさと自分を慰めたものだ。だが、その自分を慰めるといふ行為が連日続けば恨まずにはいられない。

兄よ、何故に俺にこんな役柄を押し付けた。

俺は確かに自分の人生にくさくさとしていたさ。だが、あの時の俺に懇切丁寧に言ってやりたい。

お前は幸せだったのだと。

「代官、大野屋さんがお見えです」

「判った」

この村、町で一番の商人の出現に嘆息しつつ、一番目当たりの良い部屋にまで足を向けると大野屋雪也という名目上盲目の男は伏せた半眼をあげた。

雪也は所謂金貸しを副業としているが、金貸しという職業は特殊

なもので一般にゆるされてはいない。

「悪い、金を貸してくれ」

と清治郎が気安い口調で頼んだのが後のまつり「確か金貸しは盲目だか坊主だかでないといけないんじゃないやありませんでしたか？」と雪也は首をかしげ、金貸しの地位を奪い取られたのだ。

この書類の偽造により、確かに清治郎は悪代官といえなくも無い。隠密と呼ばれる人間にばればれば代官という地位を奪われ、こっぴどい仕打ちを受けざるを得ない所業だ。

だがしかし、この郡は果てしなく貧乏だった。背に腹はかえられん。

「雪也、以前の書類を精査して判ったんだが少し話しを聞かせてくれ」

もう馴染みの商人の涼しい顔に少しばかり顔をしかめ、清治郎は持ってきた書類をどさりと落として自分も胡坐をかいた。

「なんなりと」

雪也はうなずき、清治郎が差し出した帳面に視線を落とす。

「五年前まで収められていた年貢と、今年の年貢とを比べると明らかに差異がある。去年は凶作や何かがあつたのか問えば、そんなことは無いという。おまえ、わかるか？」

代官所の役人達は人手不足の為になかなかモノを知らぬ新しい代官の話聞いてはくれない。

なんとといっても、まっとう勉強などに励んだこともない新米代官なものだからその扱いは肥溜めの肥えより酷い。肥えは役に立つがもの知らずの代官は役に立たない。それに構っている程暇ではないというのだ。

「米を作る農家が減りましたから」

雪也はあっさりと言った。

「なんだ、それは？ 米農家が減る？」

「ええ、彼等はこぞつて今や蚕産業に精を出してますよ」
蚕、といえば絹糸だ。

ならばむしろ年貢は増えるのではないか？

清治郎の眉が潜まると、雪也は実におかしそうに喉を鳴らした。

「年貢の率が違うんです。米ならこの辺りでは五公五民。半分を年貢で収めなけりやならない。けれどお蚕さんは農家の妻のちよつとした内職扱いで、一公九民。つまり、一割足らずを年貢として収めればいいってことになる」

「……」

「当然うちの小作人達もこぞつてお蚕の育成にはげんでおりますよ」

につこりと微笑を浮かべる悪徳商人の顔を睨みつけ、清治郎は危うくもっていた大事な書類をぐしゃりと握りつぶしてしまいそうになった。

「くそ農家がああああ」

どつりでがっくりと年貢が減った訳だ。

だが、何が内職だ。思い切り本職にしているじゃないかっ。

「そんな話を聞かれたら、農民達が怒りますよ。それより、先日の貸付の話はどうなってます？」

「うっ……」

代官所の雨漏りが酷い為に屋根の葺き替えをしたのだが、屋根自体に腐れた箇所が幾つかあり、思ったより出費がかさんでしまった。その時に足が出た分をツケにしてあるのだが、悪徳商人は袂からそるばんを取り出すと、しゃらしゃらと鳴らした。

「まあ、色々と相談には乗りますよ」

ふんっ。何が代官だ 地方代官になんぞなったら、俺はせっせと
悪銭を溜め込んで果ては楽隠居で面白おかしく遊興に励むさ……

「すまん。少し待ってくれ」

そんな風に思っていた時期が俺にもありました。ええ……

黒の薬師

「刺繍が何の役にたつの？」

メイフェアーのように上手ならいいけど、私のようにヘタな人間はやらなくてもいいじゃないの」

窓辺に置かれたチェストが指定席だった。

それを椅子に、そしてテーブルに見立て、少女は自ら入れたホットチョコの入ったカップを揺らした。

猫舌の少女はふーふーと、かわいらしく息を吹きかけているが内容量は少しも変化がない。

十分に冷まさなければ、とろりと粘度の高い液体は簡単に彼女の舌の薄皮を引き剥がすといくつかの経験から彼女は承知していたのだ。

「そりゃ、できるにこしたことは無いと思うけれど……得て不得手って言葉だつてあるでしょう？ えっと……なんて言ったかしら？

適材適所？ それだつていいわ」

子供らしい高い声が不満をたらたらと並べ立てていく。

窓からは明るい日差しが良く入り、チェストの上に広げられたハンカチに包んで持参したクッキーが幾つかのせられている。

そして話し相手は置かれた布人形。

不恰好な人形は、主に黒い布で作られ、その頭は白髪。

そこはまるで小さな茶会席のようだとこのくに、そこを一步離れるだけでそれ以外の場所は世界が違つかのように暗く、陰気な空気と薬草の香り、湿ったカビのような香りに包まれている。

その中、壁に押し付けるように置かれている寝椅子の上にもりあがったキルトがもぞりと動いた。

「ずいぶんと難しい言葉を知っているな」

つまらなそうな声がそこから聞こえてくる。
低く老成し、重く疲れたような声。

上半身を起こしたのは、白髪の男だった。

いや　白ではなく、色を失ったと言ったほうが良いかもしれない。
老人のようなその髪の毛の面は存外に若い。といっても未だ十二の少女
にしてみればこの男は偏屈な老人と大差ないのだが。

少女は微笑んだ。

まるで相手よりもずっと年上のように。

「もう昼過ぎよ?」

「そうだろうな、小娘が屋敷を抜け出して来るのはそんな時間だ」
つまらなそうな言葉。

キルトをばさりと跳ね上げると、黒いズボンに上半身裸の姿でゆつ
たりと歩き、少女の座るチェストまで近づくと、チェストの上に置
かれていた紅茶のカップを持ち上げた。

見慣れたといったところで異性の裸に、少女の視線は戸惑うよう
にそらされた。

心臓がとくとくと早く打つのは、なにも裸だけが原因ではない。

その腹部に無残に残る引き連れたような跡。

それを利用するかのように茨のような刺青が入られている。

そしてこの男の傷はそれだけではなく、今は見えぬ背にも幾つか
の傷跡が残されていることを幾度か目にしたことがある。

「あ、だめよ」

少女は慌てて声をあげたが、男は気にしない。

男の手に取り上げられたカップを見つめ、唇を尖らせた。

「それは、妖精の為のものなのよ?」

夢見がちな少女らしい言葉に、男は鼻を鳴らして笑う。

多少冷めてしまっていた紅茶は、喉を潤すのにちょうど良く彼の喉
を流れた。

ついでにハンカチの上のクッキーをつまむ。
昼食としては悪くない。

「おれの家でおれが何をしようか問題は無い」

「そりゃ、そうだけれど」

「それで、領主館のお嬢さん。あんたは今日は何しにきたんだ？」

「そう矛先を向けると、少女はふっとこわばった。

その反応が判らず、男は首をかしげる。

「ねえ、ここを出て行くのですって？」

緊張をはらむその言葉に、男は口元を歪めて笑った。

「なんだ？ 聞いたのか」

「叔父様が、言ってるらして……ねえ？ どこに行くの？ 戻る？」

少女の瞳に宿るものに、男はますます楽しげな色を向けた。

この辺り一帯を治めているのは、少女の叔父だった。彼女の両親はすでに天上へと召されて記憶すら危うい。彼女は叔父の屋敷で叔父の子供達と共に暮らしているのだ。

「王宮」

簡潔に答えてやる。

「戻るかどうかはしらん」

「……何で？ 何をしにいくの？」

「仕事」

切って捨てるような返事。

少女は一瞬泣きそうな顔をした。

「私も、連れて行って」

「領主館のお嬢さん、莫迦なことを口走ってるな？」

男の黒緑の瞳が面白そうに揺らめく。

やがて意地の悪い表情に変わり、少女のふわふわと揺れている金色の髪を指に絡めた。

「叔父上の屋敷はおまえにとって居心地が悪いか？」

「……そんなことは無いわ。年の近いメイフェアとは喧嘩もするけれど、仲直りだってすぐするし。でも」

「でも、なんだね？」

少女は思いつめたような視線をあげて、ひたりとその翡翠の眼差しで男を見返した。

「あなたが好きよ、ラドック・ベイリル」

思い切ってその肩に手を掛けて背伸びをして口付けた。

目測を誤って、歯ががちりとあたる。

それが、リルファ・デイラス・デイラの初恋で、そして初めての家族以外との口付けだった。

黒の薬師 2

「大丈夫ですか？」

心配気な声に肩を揺さぶられ、リルファは翡翠の瞳を大きく見開き、目を覚ました。

労るように覗き込んでいるのは、ハウス・メイドのサーラ。

そばかすの浮いたかわいらしい少女の案じるような様子に、リルファは大きく息をついて微笑んでみせた。

「うなされているようでしたけれど……」

「悪夢だったわ」

リルファは言いながら差し出されたハンカチで眦に浮かんだ涙を拭った。

「ありがとう、起こしてもらえて助かったわよ」

「はい、あの　枕が低かったのでしょうか？　今夜は気をつけますので」

戸惑いを浮かべた少女に微笑みを浮かべ、リルファは寝台から足をおろした。

少し硬い寝台は確かに未だに慣れるものではない。

郷里の自室の寝台は優しくやわらかく自分を受け止めてくれたものだ。

といっても、この新しい寝台もすでに一月あまり使用している。

それが悪夢の理由ではないことは、リルファ自身が良く知っていた。

「新しい任務におつきになるとうかがいましたけれど、帰宅時間はお変わりにならないのでしょうか？」

朝食の席、紅茶を用意しながらサーラが口にしたのはおそらく「場を和ませる」という目的があったことなのだろう。だが、リルファは思わずもっていたスプーン用のスプーンをかしゅんと小さく鳴

らしてしまった。

「 さあ、今のところちよつと……判らないのだけれど」

「あの、何かご心配が？」

サーラが心配気に声をかければ掛けるほど、リルファの口元は引きつってしまった。

十四の年齢で軍属の道を目指し、専門の寄宿舎に入り士官学校へと進んだ。この夏に人事異動を受けて中央に転属。そこで一月を経て辞令を受けたのが昨日のことだった。

「まったく問題ない」

言い切ると、リルファは席を立ちあがりナプキンで口元を拭った。世話係として郷里からついてきてくれたサーラには感謝しても足りない。軍人など自分の世話はおるか上官の世話までするのが当然のところを、サーラが手をかしてくれるのだから随分と楽をさせてもらっている。

そう　だからこれもきつと、叔父であるカドラスの肉親としての配慮なのかもしれない。

未だ年若い軍歴の者たちが暮らす古い官舎を出て、近隣に建つ真新しいつくりの高級仕官用の建物が並ぶ一角に入る。

軍士官用の建物の区画は幾つかに別れていて、その中でも最上級の建造物。建物内に入るのにチェックを受けて、自分と入れ替わりになる軍人と引継ぎを済ませる。

書類にサインをする間、どこか哀れむような視線を向けられたがそれは完全に無視した。この視線はもう何度か遭遇していたものだ。そう、この辞令を受けてから。

「リルファ・ディラス・ディラ参りました。

失礼させていただきます」

軽くノックをし、応えを待たずに扉を開く。

つんつと、薬草の香りが鼻についた途端、ふいに泣きたくなった。広い部屋は雑然としていた。

本独特のにおいと、混じる薬草の香り。

寝椅子の上で寝ているその姿すらも変わらない。

こそりと溜息をついたのは、この上級官吏用の為の部屋には、奥に執務用の部屋もあれば別に寝室も用意されているというのにこの部屋の荒れようがすさまじい。

そう、きつと 神様は随分と意地が悪い。

昔、おそらく初めて恋した男の警護など。

そつと窓辺に近づいてカーテンを開く。

これでは警護とは名ばかりの小間使いみたいだ。

「光は書物をいためる」

突然の言葉に、どきりと心音が跳ね上がった。

「だからといって、湿気やカビも本を傷めます」

リルファはそ知らぬ顔で言うと、窓を開いて新鮮な空気を室内に招き入れた。

夏とも秋とも判らぬ風が室内に入り込み、よどんでいたような薬草とカビのようなにおいを一瞬さらっていく。なぜかほつと息をつけた。

「朝食は食堂に行かれますか？ それともこちらにご用意したほうがよろしいでしょうか」

「お前は護衛官だろう。下働きのようなことはしなくていい」

「前任者にもそのようにおっしゃったのですね。」

ですが、この部屋の有様もひどいものがありますし ほつっておくと貴方様は寝食をお忘れになるとお聞きいたしました」

「死なないかぎり生きています」

また阿呆なこと言ってる。

リルファは嘆息し「貴方様は宮城の薬師様でいらつしやいます。ご自身の健康のこともお考え下さい」

言葉を繰り返しながら、リルファは乱雑に置かれた本をとりあえず整え、丸められた紙くずをごみ入れに放り込み、書きなぐられた書類をまとめていく。

その間にこの部屋の主であるラドック・ベイリルは大きく息をついて立ち上がり、乱れた前髪をかきあげた。

「随分とつまらない女になったな」

鼻息混じりの冷めた口調を、リルファは無視した。

ラドック・ベイリル。

年齢不詳の青年は、相変わらずの様子でそこにいる。そこだけ切り取ったように以前とあまりにも変わらない。

九年という歲月すら、無かったかのように。

だが、ただ一点は違う。

リルファの記憶のなかの男は、老人のような白い髪を確かにしていたというのに、現在の彼は瞳と同じ黒緑の髪をさらしていた。

だから初めに彼を見た時、それがラドック・ベイリルだとは判らなかつた。

何より、黒い髪の青年は以前よりずっと年若くすら見えるのだ。

「本日のご予定は？」

どちらかに行かれる予定でしたら馬車の手配を

「

邪魔くさい。俺に警護などいらぬし、死ぬ時は死ぬ」

まるきりつまらないことのように口にするラドックにリルファはゆっくりと呼気をつき、できるたかぎり冷静に「申し訳ございません。それが私の仕事でございますから」とつけた。

「職務熱心なことだな。ならば扉の前で警護に励めばいい」

気難しい薬師。

数年前に妃殿下の産熟が悪く命も危ぶまれたときに窮地を救ったのは医学ではなく薬学だった。

その薬学を操る「薬師」ラドック・ベイリル。腕の良さもさることながら、その薬学の為に影ではヒトにはばかるような実験をも繰り返しているという噂がある。

黒い薬学師。

リルファは薬師の命令に一礼すると、そのまま部屋を出て扉の前で警護に立った。

任命を受けた時、これは「荣誉ある職」であると言われたものだが、言ってしまうえば「厄介払い」かもしれない。

「ラルは 扱いづらいからな」

いまさらばやいたところではじまらない。軍務につきたいと望んだのは自分だし、中央勤務を喜んだのも自分だ。

まさか、古馴染みの警護が仕事だとは思いつかなかったが 中央に来ることによって、彼と再び顔をあわせるかもしれない、ちらとも思わなかったといえば嘘になる。

リルファは部屋の前で直立不動の体勢を取りながら、自分の中できりきりと痛むものと戦っていた。

あなたが好きよ、ラドック・ベイリル。

精一杯の勇気を込めてそう告げた。

相手の年齢も、外見の異質さも。その全てを認めて好きだと告げた。だが、ラドック・ベイリルはそれを一笑に付してリルファに突きつけた。

「おれを好きだった？」

くつくつと肩を揺らし、それでも間に合わないのか腹を抱えて、そうしてラドック・ベイリルは幼い少女に手を差し向けた。

「ならばお嬢さん、おまえが俺のものだという、その証をおれにくれないか？」

彼が好きだった。

その想いは真実だけれど。その想いは間違いだった。傷つけられた十二の娘は、その日全てを失ったのだ。

ゾクリと背筋を這い登る寒気に、リルファは自分の内にある忍耐力を試されているような感覚を味わった。

これは、この任務は。

拷問に近い。

いや、拷問意外のなにものでもない。

ラドックの仕事はいくつかの場所で行われる。その一つが敷地内にある薬草園、図書館、官舎内にある研究室。そして、刑務所。

中央に犯罪を犯した者達がとどめられた牢獄には、さまざまな人々が押し込められている。

ラドックはその虜囚を使い、薬の実験をしているのだ。

幾つかの薬を合わせ、それを死刑囚に投与する。

その日のうちに命を落とすものもあれば、それまでであった病状が完治することもある。

それを目の当たりにし、見つめ続けることは　リルファの精神を少しづつ侵して行く。

「看守」

その日の薬の投与を終えたラドックは消毒薬で手を拭いながら、

監視の為にいる看守に視線を向けた。

「明日は女の囚人を用意してくれ」

「はい」

「できれば健康な二十歳前後」

「現在刑が確定されている女の中で該当するとすれば、十七くらいの娘がいますが」

「ではそれと、五十代の病弱な男」

「それならいくらでもあります」

どれでもいい、と軽く手をあげて牢官舎を離れるラドックの後ろをついて歩きながらリルファはわななく唇を押さえるようにしてその背に声を掛けた。

「……女性を、どうするつもりです」

「あなたには関係がない」

そっけない口調が返される。

「ラルッ」

思わず昔のように声を掛けてしまった。

かつんと、ブーツの足が止まる。

振り返った黒緑の瞳は冷たくリルファを見たが、やがて嘆息交じりに切り替えした。

「おれはおまえの上官だ」

「若い女性にどんな薬を投与するつもりですか！

いくら貴方が陛下に数々の権限を与えられているとしても……」

「では、お前が代わりに飲むか？」

睨み付けられたまなざしに、リルファは凍りつくような恐怖を感じた。

「俺がやっている実験はすべて陛下の命令だ。

それに口を出すことは、陛下への反逆にとられると知れ」

はき捨てられた言葉に胸元で手を握り締めた。

「……お前は明日、来なくていい」

ふいに、ラドックの口調が少しだけ柔らかかなものになった気がした。

それを頼りにするようにリルファが言葉を重ねる。

「私で良いのであれば、私が」

歩き出しかけた青年の足がまた、止まる。

その冷ややかなまなざしがひたりとリルファを射抜き、馬鹿にするかのように鼻を鳴らした。

「俺の仕事に耐えられないのであれば、さっさと郷里にでも戻って嫁に行くのだな」

悔しさにくつと唇を噛んだ。

「安心しろ。明日の実験は命にかかわることはない。」

だが、明日は来なくていい。休暇のつもりで体を休めていればいい」

「私は……」

「命令だ。リルファ・デイラス・デイラ」

毅然とした口調で命じられ、それ以上リルファは口を開くことができなかった。

遠ざかる背中も追いかける気力がない。何かをつかむように伸ばした手が、空をつかんでばかりと落ちた。

新しい任務を命じられ、一月と半がかるうじて過ぎた。

だが、その時間はただ過ぎただけで、リルファの中に新しい何かを築くことはない。

尻尾を巻いて帰れ。

そう言われたこともすでに一度や二度ではない。

この一月と半分で、自分の中に膨らんだものがあるとすればラドック・ベイリルに対する憎しみや恐怖ばかりだ。

あの男はこの一月と半分の日々ですでに片手では足りない程の罪

人の命を奪っている。

リルファは軍人だ。命じられれば他人の命を奪うこともあるだろう。だが、実際に誰かの命を奪ったことはただの一度もない。

自嘲気味に笑みを落とし、泣きそうな自分をごまかすように空を見上げた。

うつすらと星が瞬き始めた肌寒い空を

黒の薬師3

「リルファ様？」

肩を揺さぶられて目を覚ました。

「大丈夫ですか？」

心配気に覗き込んでいるのは、ハウス・メイドのサーラ。そばかすの浮いたかわいらしい表情にそっと息をついた。

「うなされていたようですけど……あの」

「ありがとうございます」

リルファは言いながら差し出されたハンカチで眦に浮かんだ涙を拭った。

もう何度も同じ朝を迎えていた。

滑稽なデ・ジャ・ビュ。

だがそれが最近の現実。

「本日はお休みとうかがいました、もう少し横におなりになられますか？」

サーラが労わるように言う。こうやって悪夢にうなされて目を覚ますことが、この一月半で増えた主に、サーラは悲しそうな眼差しを向けてくる。

牢獄で耳にする悲鳴やなにかが自分の中に澱のように溜まって行くようだった。人々が影で黒の魔術師、黒の悪魔とのしるラドックのことを、リルファは実際擁護できない。

彼が育てている薬草園の大半の薬が毒草と呼ばれるものであることも、噂ばかりではなくほぼ事実だ。

彼は　この華やかともいえる国の暗部だった。

「いや……もう起きるよ。シャワーでも浴びてくる。朝食は、そうだな……たまには食堂で食べる。今日はサーラも体を休めなさい」

来なくていい。

ラドックの言葉がずしりと腹部に突き刺さる。

自分はあるあなたの護衛なのだと言い切ってしまうえば良かった。

シャワーを浴びて軍服に身を包む。

今日のラドックはいつもと同じ時間に部屋を出て、薬草園で薬草の世話、その後は薬草の調査室で薬をつくり、その後はおそらく監獄に行く。ならばその間に部屋を片付けてしまおう。

リルファはパンとスープだけの簡単な食事を喉の奥へと流し込み、ふと人の気配に顔をあげた。

「ああ、そのままだ」

慌てて立ち上がり敬礼をしようとしたところを、とどめられる。

相手は人事部の総長であり、リルファにラドックの警護を任命した当人だった。

「君はよくやってきているようだね」

と、微笑まれ。リルファは胃にずしりと痛むものを感じた。

「……いえ、あまり役に立てず」

「いやいや、一月と半分もあの男についてもっているのは君くらいのものだよ。」

あれで敵も多いから護衛官はつけないといけないのに、一週間ももたずに誰も彼も逃げ出す始末だ。

あれも底意地が悪いからな」

「」

「それに、身近に人がいるのを嫌がる男だから、君が来てくれて良かったよ」

にこやかな上司の言葉に、リルファは複雑な表情を浮かべた。

自分が何の役に立っているのか、正直判らなかった。

毎日ラドックの後をついて回っているだけだ。護衛といったところで、ラドックはもともと官舎敷地内からあまり出ない。何者か

に狙われるということも無いし、荷物もちのようにただただついて回っているだけだ。

上司の言葉に空返事をいくつも返しながら、リルファはそっと自分の腹部を撫でた。ストレスで胃が痛む。

それとも、この痛みはラドックに幼い頃につけられた傷跡が痛むのか。

上司を見送り、食事を終えたリルファは嘆息し　すべてを払うようにふるりと首を振り「仕事だっ」と自分を奮い起こすことにした。

絶対に今日のはあのかび臭い部屋を片付けてやる。

埃をたたき出してやる。

あのごみだらけの部屋を倒してやる。

それはあのラドックをこてんぱんにしてやれるようで気分がよさそうだった。

リルファは鼻歌を歌うようにしてラドックの自室に行くと、さっそく薄闇に閉ざされた陰気な部屋のカーテンをすべて開け放ち、窓を開く。

「ふふふ、合鍵がこんなときに役に立つのさ」

憎しみを込めて室内を乱暴に片付けていく。

本に積もった埃を叩き落とし、本棚に順番に並べて戻す。

カビが発生した床をモップでふき取り、うっすらと色さえかわっているような窓をふき、机を拭く。

捨ててよいものかどうかわからない書類はひとまとめに箱にいれ、明らかに捨てて良いと思われる丸められたものは捨てる。

昼食まで抜いて片付けていたリルファがやっと一息ついたのは、太陽がゆっくりと沈み夕焼けで空が滲んだころあいだった。

埃と灰で一杯になっていた暖炉に火を入れ、要らないものを燃やしその熱で湯を沸かして、ふと　リルファは棚の中にある小瓶に

手を伸ばした。

「大丈夫、だよね……」

黒いペースト状の物体。おそらく、これを見て一目で判るものはないだろう。それでもリルファはそれが何か良く知っていた。

古そう、そう呟きながらもその中身をカップの中に落とし込む。

カカオ。

まさかあるとは思わなかった。

子供の頃はラドックの小さな小屋に行けば必ずそれを飲んだ。甘くてちよつとだけ苦い優しい飲み物。

本来のカカオはむしろ苦味の強いものだが、これには砂糖を練りこんであることも知っている。

子供の頃のラドックは、自分にとってこの飲み物だったのだ。

出窓はないが、窓辺に腰を預けてカップを傾ける。

疲れた体に甘い液体をゆつくりと流し込んだところで、ざつとリルファは血の気を引かせた。

何の気配もなかった。

それは突然自分の面前に突き出された。

ぐいっと窓の向こうから腕を差し入れ、リルファを背後から引き寄せてその顔に銀色の細剣を突きつける。

「ラドック・ベイリル　じゃ、ないな」

語尾はあせるようなものだった。

だから相手が間違えたのだと知るとリルファはすつと冷静になれた。持っていたホットチョコをためらわずに自分を背後からひきつけている相手になげかける。ひるんだところで身を沈め、床を転がるようにして距離をとり、胸元に入れている小さなナイフをそのまま投げる。

うろたえた男はそのまま窓辺から立ち去っていた。

「な……なに？」

考えるより先に動いたリルファは、肩で息をつきながら慌てて窓辺に行くが、その姿はすでにない。

そもそもこの部屋は三階なのだ。

遙か下に地面に叩きつけられたカップが粉々に砕け散り、ホットチヨコの黒い染みがひろがっている。

ソレを確認し、そこにきてはじめてぞくりと身が震えた。

敵の多い男だから。

自分ではなく、狙われていたのはラドックだ。

舌打ちしてリルファは自分をののしった。自分は、ラドックの護衛官という立場であるというのに、その身から離れていい訳がない。

血の気が引くような気を味わいながら、リルファは身を翻しおそらくラドックがいるであろう監獄へと足を向けた。

だんだんと暗くなる道を走り、敷地内の一番はずれにある監獄塔へとたどり着く、門前にいる看守が声を掛けてきたが、リルファはそのまま普段彼が実験に使っている部屋へと足を向け　突然、腕をぐいっと引かれた。

「どうした？」

低い声にすうっと腹部のあたりから血の気が引いた。

怪訝な顔をしたラドックが前髪に隠れる眉間に皺を寄せてこちらを見ている。険しいまなざしに泣き笑いの顔でリルファはほうつと息をついた。

「あ、ああ……御無事ですか」

「お前は無事じゃないようだがな。なんだ、その怪我は？　軍服も汚れている」

そう言われてはじめて、リルファは自分の軍服を見た。

黒く汚れているのはチヨコレート　肩越しに投げつけたので、左肩がチヨコで汚れてしまったらしい。これはきつとサーラが困る

だろうな。とぼんやり意味の無い思考がよぎった。

不愉快そうなラドックが左手首をつかんだまま、もう片方の手でぐいっとリルファの顎をつかみあげてくる。

「首、切れてるぞ」

「え、ええ？」

思わず間拔けな声を上げてしまい、慌てて捕まれたままの腕を動かし、指先で切られているという場所を確かめようとしたがラドックは舌打ちしてリルファを睨んだ。

「触るな。なんだその埃っぽいナリは？ 汚れが入ると破傷風になつたり　リル……？」

ふいに、視界がぶれた。

体がかくりと前に倒れる。それを感じながら、リルファは自分の馬鹿さかげんに小さく笑った。

自分が暗殺者なら、細剣に毒の一つも塗る、きつと……そうする。

力が抜けた体をラドックの腕が咄嗟に力を込めて支える。それを感じながらリルファは白い霧に包まれるような感覚に意識を手放した。

「莫迦な話だ」

つまらなそうな男の声が部屋に響いていた。

「俺を毒で殺せると思うのが浅はかだ」

「……」

ぐらぐらと頭がいたい。天井がぐるぐると回っている感触。吐き気がする。

リルファはふいに口の中に冷たい水を差し入れられ、すうつという清涼感と共にこみ上げる吐き気に身をよじって体内のものを

吐き出した。

そこまでできてやっと、ゆっくりと視界がクリアになる。

「ラル？」

ぼろりと出たのは、昔、彼を親しげに呼んだ愛称。

彼は決まって、人の名前を縮めるなど名前を訂正させたものだった。

「見えているか？」

覗きこんでいる黒緑の瞳にこくりとうなずく。だが体がしびれたようになんだか動きが弱い。

「どこからでも入手できる植物毒だ。もともと致命傷を与えるつもりはないのか、遅効性の弱いものだ。どこにでもありすぎて出所をつかむことは無理だが、幸い毒を抜くのは楽だ。後遺症も残らないだろう」

つまらなそういきる男に、リルファは瞳を伏せて「すみません……」と小さくわびた。「護衛官だというのに……情けない」
つと、涙が伝って落ちた。

「この程度で泣くくらいであれば、さっさと郷里に戻ることだな」

「その方が、いいのかもしれませんがね」

そう言葉にすれば、涙があふれてつぎつぎに頬を伝った。

ラドックは瞳をすがめ、近くのタオルを放り投げた。ばさりとそれが顔の上に落ちる。

それを抱くように顔を覆い、声を殺して泣いた。なぜ涙が出るのか、なぜ声を殺すのか判らない。

自分が情けないからか。

弱いからか。判らない。

自分がなぜここにいいのか判らない。

自分ほど役立たずなものなど地上のどこにもいない気がする。

自分の中のどろどろとしたものがあふれるように、涙があふれる。

隣にいたラドックの気配が遠のいていくのを感じ、さらに孤独を感じ

じた。

自分は 何のためにここにいて、何のために存在しているのだらう。

ちっぽけでどうしてよいのか判らない。

ひとしきり泣いた頃、ふいに鼻腔がくすぐられた。

甘い、ホットチョコの香り。

そっとタオルを顔からはずすと、面前に決まってきたとはいえないカップがずいっと差し向けられた。

「
」

どうして良いか判らないリルファに、ラドックは溜息をついてカップを寝台の横のテーブルに置き、未だ体がしびれた感じで動きづらいうりルファの肩口に腕を入れて起こしてやる。

その手に、カップを押し付けた。

「いま、お前が気を弱くしているのも涙がでるのも薬の影響だ。

それを飲んでゆっくりと休め いいな？」

忌々しいという様子の青年の姿に、涙で赤くなった目元を和ませたりルファはぎこちなく微笑んだ。

「ありがと、ラル」

「ラドック・ベイリル おれの名前をへんに縮めるな」

もう何度も聞いたフレーズを耳に入れ、リルファは子供のように両手でカップを持ち、こくこくと温かで甘いホットチョコをゆっくりと飲み込んだ。

それから三日の間、リルファは寝台から出ることは許されず薬師としてラドックもそれに付き合った。日々を重ねることに、リルファは自分がどれだけ迷惑を掛けてしまっているかで恥じ入るしかない。

ラドック・ベイリルはこの中央聖都で有数の薬師だ。その薬師を

三日もの間本来の仕事から引き離してしまったというのは 護衛官として許されるべきでない。

だから、動くことを許されたその日リルファはそのまま真っすぐに人事部へと足を運んだ。

「おや、元気になったようだね」

にっこりと、人事総長であるシリル・ドーナは微笑んだ。

普段から細い眼差しが、よりいっそう細く柔和に下がる。

「申し訳ありませんでした」

「なにか？」

「護衛官でありながら傷を負って三日もの間を無駄にいたしました。守るべき相手に看護までされては面目のしだいもありません」

「ああ、そんなこと。」

いいんだよ。ようはあの男が無事であるならね」

「つきましては、ラドック・ベイリル氏の護衛の任を解いていただきに参りました」

静かにこうべをたれるリルファに、シリルは、んーっと小さな声を出した。

「だが、当の薬師殿から解任願いは出ていないよ」

「ベイリル氏の問題ではなく、私の問題です」

「困ったね。こっちにも色々と事情というやつがあつてね。君には是非ともこれからもあの男の護衛官を勤めてもらいたい」

というか。

「護衛官でいてもらわないと困る訳なんだが」

ぼやくように言って、大きく息を吐き出すと背筋を伸ばし真っすぐにリルファを見た。

「君が今回の件を恥じ入るといっているのであれば、どうだろう。」

君には罰を与える それで今回は帳消しにしよう」

「罰、ですか？」

というか、当然何らかの罰則は与えられるものと思っていたリル

フアは怪訝気に眉をひそめた。

「かといって減法とか罰金はぼくの趣味じゃないから」

ふふふんつとシリルはにんまりと微笑むと、よいことを思いついたというようにぼんつと手を打った。

「あの薬師殿を毎日風呂に連れて行き、宮廷仕官という意識の低い男をちよつとは身奇麗にしてやってくれ」

それは無理！

思わず声をあげてしまいそうなほどの暴挙。

だから自然とかすれた声が漏れてしまった。

「無茶な……」

「そりゃ、罰則だからね。簡単なことをやらせても面白くない」

面白いか面白くないとかの問題ではない気がするのだが。

「まあ、せいぜいがんばってね」

ひらひらと手を振るシリルに、半ば追い出されるようなかたちで部屋を出たリルフアは頭を抱え込んだ。

身奇麗とは縁遠いのだ。

子供の頃もそうだった。あの男は汗とか垢とかと友情とか協定とかで結ばれているかのようにそれらを放置するタイプだったのだ。

そう思うと、そんな男を好きだと思っていた自分に「目を覚ませ」とこんこんと説教をたれてやりたい気持ちになる。

そうだ。あの男は最低最悪な男だ。

十二歳の小娘の体に、こともあろうに一生消えることのない傷をつけた……そこまで考えてぶるりと首を振った。

「くそっ」

はき捨てた言葉に、廊下を歩いていたらほかの軍人達がびくつと身をすくませていたがそんなことはかまっていられない。

黒の薬師 4 (前書き)

今回の話には「牢獄にて死刑囚使って試薬実験ってどうなのさっ」的なエグイ内容がちょっとばかり含まれます。

駄目そうだというひとはさくりと回避して下さい。Rで言えばR1程度ですが、嫌いな人はきつと凄く嫌いです。ご注意ください。

黒の薬師 4

リルファはなえてしまいそうな自分の気力を鼓舞し、自らの護衛対象がいる部屋へと足音も高く向かった。

たかが三日で陰気さを取り戻した部屋に入ると、朝の弱いラドックはいつもと同じように自分の寝椅子でキルトに包まっていた。

よく見れば、彼の汗と垢協定は立派に健在らしく、黒緑の髪は艶やかさという言葉とは無縁になんだかべつとりと額に張り付いているようだし、近づけば薬草とは違う異臭すら感じてくる気がする。

あくまでも気がするだけだが……

宮廷官吏として間違ってる。

確かに……

顔にはうつすらと髭が生えている。だがもともと髭に関しては薄いほうなのだろう。毎日そっている様子は無いが、さほど　ほかのことにくらべれば　むさくるしくはない。

自然と大きく息をついた。

「人の顔をみて溜息つくとはいいい度胸だな」

低い唸るような声に、けれどすでに慣れているリルファは「おはようございます」と声を掛けた。

「この男は身じろぎして起きたりしない。」

突然その目がぱちりと開くのだ。

ある意味不気味。

「人事に辞任を申し入れましたが、却下されました」

「だから？」

「今回の不始末に罰を言い渡されました」

「で？」

「ということ、浴室の準備が整っておりますのでどうぞ」「何がということだ？」

不機嫌そうな恫喝気味の声。だがこの程度でひるんではいられない。リルファはてきぱきとクローゼットの中から着替えを引き出した。

見事に黒い衣類ばかりだが、幸いなことにきちんと洗濯はされている。当然だ。それは小間使いの仕事だから、浴場で衣類を置いておけば洗濯女が洗濯し届けてくれるのだ。

問題は、ラドックは毎日着替えなし毎日シャワーを浴びたりしない。

「はい、着替えです」

「意味が判らん」

「お風呂です。髭も伸びていますし、髪も汗でべったりしています。もしかしてと思います、私が寝込んでいた三日の間シャワーも浴びてないのではないですか？」

「それがどうした」

素でいばられてしまった。

「汚いです」

「……」

「不潔です」

「……」

「病気になるますよ」

「病み上がりにいわれても説得力がない」

確かに

「とにかく、うるさい。お前は護衛らしく外で立ってる」

強い口調で怒鳴られた。

リルファはひきつりそうになったが、ふとテーブルの上に放置され

たカップを見つけた。中身はホットチョコではないようだったが、粘度は高い液体のようだ。リルファはすかさずそれを手にすると、力いっぱい相手の頭からかけた。

「……………」

「まあたいへん。浴室にご案内いたしますね」

リルファは自分の演技力の無さに眩暈すら感じたが、今のが故意であろうということくらいどんな愚か者であろうとも理解できるところだろう。

「このっ、くそ莫迦娘っ」

憎しみのこもったまなざしで射すくめられたが、ぼたぼたと謎の液体をかぶった顔では迫力も半減だ。

忌々しそうにぎりりと歯軋りし、ラドックは勢いをつけて立ち上がった。

だがリルファの思惑からはずれ、彼は浴室になどいかずにクロゼットにあるタオルを引き抜き、それで乱暴に髪を拭うにとどまった。

「……………」

「出て行け」

「……………」

「リルファ・ディラス・ディラ！ 外で立っている」

まるで悪いことをした学生に命じる教師のように怒鳴りつけられ、リルファはすこすこ退出を余儀なくされた。

護衛官らしく扉の前で剣に手を掛けたまま、考える。

「どうやればあの男を風呂にいれることができるか。そう、なおかつ毎日だ。」

毎日身綺麗にさせるといっのは実に荒業だ。

もつとべつたりとしたものをぶちかけてやれば否が応でも風呂に入るかもしれない。それとも背中にやもりでもいれてやるうか？

まるで子供の悪戯のようなものを考えていると、一人の男が部屋の前で足を止めた。

軍舎では見慣れない官邸服は、宮廷貴族のものだろう。初老を感じさせる男はちらりとリルファを一瞥すると礼儀正しく一礼した。

「ベイリル氏はいらっしやいますか？」

「滞在してございますが、どういったご用件でしょうか」
これではまるで門番だ。

「グロウスと言えばご理解いただけましょう」

その言葉に来客を待たせ、中にいるラドックに声を掛ける。

ラドックはまだ怒っているのだろう、きついまなざしでリルファを睨んだがすぐに相手を通すように命じ、

「お前は外で立っている」と、更に命じた。

リルファは嘆息してしまう。

自分がやったとはいえ、あの謎の液体をふいただけの格好で来客を迎えるのはどうしたものか……

いや、自分が悪いのだが。

いやいや普通あそこで浴場にいかないという選択肢はありえないはずだ。

外で真面目に立ってそんなことを考えていたら、さほど時間をたずに来客は去っていった。それを追うようにラドックが部屋を出る。

この時間ならば次に行くのは食堂　もしくは薬草園だろうとふんでいたというのに、その足は調剤室へと向いた。

何か薬を依頼されたのだろう。

いらいらした様子で棚の中の薬草をいくつもプレートに入れ、それを石臼でつぶしたりしながら作業している。

出て行け、という指示が無いのでおとなしく室内でその様子を見

ていたが、ふと リルファは窓の外が気になった。

そろりと身を動かし、カーテンが揺れる窓に近づく。人の気配がある気がし、ざっとカーテンを開くと驚いた様子の洗濯女達と目があつてしまった。

「そう殺気だつな。邪魔くさい」

「失礼しました」

「……調剤室じやくじつしつは人の目が多い。阿呆な暗殺者といえどもそうそうここで狙おうなどとは思つまい」

いいながら作業を続ける男を眺め、リルファは顔をしかめた。

自分は確かに護衛官だが。このままでは守ることなどできないのではないだろうか？ 自分の腕に 絶対の自信などない。

「ラル」

思わずそう呼べば、いつもと同じように「ラドック・ベイリル」と低い声が返る。

「ラドック……さま」

「なんだ」

何事かを口にしようとして、リルファは口を閉ざした。

ぶるりと首を振り、なんでもありませんと応える。ラドックはいぶかしげに眉をひそめたが、何事もなかったかのようにその作業を進めた。

リルファには彼がどんな薬を調合しているのか判らない。

ただ精密に重さを測り、いくつもの薬草を練り合わせたり火に掛けたりするのをただ静かに眺める。

昼を過ぎるまでそうしているから、リルファはふと彼の食事が気に掛かった。小さく息をつき、

「ラドック様、お食事をお持ちいたします。

しばらくお側を離れますが」

「かまわない」

「はい、ではどうぞこちらにいらしてください」

一礼してリルファは部屋を出ると、大きく息を吐き出した。ふわりと柔らかな空気が肺に入る。中にいる間は気づかないが薬剤の香りで頭が少しぼうつとするようだった。

かつんかつんつとブーツを鳴らし、別塔にある食堂へと足を向けた。

消化によさそうなものを幾つか頼み、プレートに乗せて戻るとラドックはちらりと視線の一つも向けることなく、短く命じた。

「先に食べていろ」

「いえ、これはラドック様の分です」

「おまえは？」

「私は結構です」

「病み上がりは栄養を取れ。食わないなら流し込むぞ」

黒緑の瞳に睨みつけられ、仕方なく「では食堂で済ませてまいりますので」と頭を下げる。だがラドックは何を思ったのか「ここにもってこい」と命じるのだ。

食べないとも思われたのだろうか？

信用がないな。

苦笑したが、命令であるなら仕方ない。言われたとおりに食事を運び、なんとも食わずらくも護衛対象を前に食事を済ませる。

当然、一緒に食事をしたところで、会話がある訳ではない。

もくもくとした味気のない食事。

ふと、手にしていたリゾットの皿とラドックとをちらちら見ていたら、さすがに浴場に行くのではないかとちらりとよぎった。

どろりとしたリゾットならばかけられればきっと相当気持ちが悪いに違いない。

左手で支えるリゾットの皿とラドックとをちらちら見ていたら、ふいに下を向いていた面が上がり、険しい視線を向けてきた。

三白眼を更に険しくし、口元には引きつるような笑み。

「それをかけたら殺す」

「しませんよ、そんなこと」

「ほう。そう願いたいな」

「でも、体は清潔にしたほうがいいですよ」
「思わず勇気をふりしぼってしまった。」

「薬師として説得力がありません」

「別に必要だと思っていない」

「でも、いつまでも結婚もできないですよ。そんなんじや」

「言ってしまったから、しまったと思いつかんだところで後の祭り。そんなことを面前の相手が思っているか、と問えば　欠片ほども思っていないに違いない。」

「ちらりとも女性に興味があるのであれば、もう少し身なりを気にするだろうし、髪型をきにするだろうし、髭を放置したりしないはずだ。」

「ほおおお」

低い声が這い登るように聞こえてくる。

「そうだったな。どこかの誰かは俺が好きなんだったな」

「　　いつの話ですか、いつの！」

「生憎と十二歳に一生残るような傷をつける変態下劣男など願ひ下げです」

「誰が変態下劣だ」

二人の間に史上最悪の空気が流れ出したところで、リルファは食事の終わったプレートを二枚、とりあげた。

「戻して来ますから、ここにいて下さいね」

「　　戻らなくていい。この後は人体実験に入る。お前は行かなくていい」

その言葉に一瞬血の気が引いたが、リルファはこくりと喉を鳴らして意思の強そうなまなざしを相手へと突きつけた。

「いいえ。貴方の警護が私の仕事ですから」

「そして、人体実験がラドックの仕事だというのであれば、それを見るのもまた自分の仕事だ。」

ラドックは目頭に皺を刻み、

「必要ない」

「私はラドック・ベイリルの護衛官です。貴方のいく場所に私は立ちます」

「勝手にしろ。」

だが、俺のすることに口出しすることは許さん。いいな」

はき捨てられた言葉にうなずく。

それ以降、ラドックは口を開こうとしなかった。黙々と監獄塔までの道程を歩み、なじみの看守に声を掛ける。誰を連れてくるかの支持を出すと、看守の視線がちらりとリルファへと向けられた。

「何か？」

今までも何度もこの実験には立ち会ってきたが、今のように咎めるかのような視線を向けられたのははじめてのことだ。

「いや、あんたも中に入るのか？」

「そのつもりですが」

「悪いことは言わない。その、外で待っていてくれないか？」

いいづらそうに言葉を探り、視線をそらす男にリルファは毅然としたまなざしを向けた。

「私はラドック様の護衛官ですから」

「いや、しかし……」

「ほうっておけ。そのうちにイヤでも逃げ出す」

ふんつと鼻を鳴らし、冷たいまなざしで一瞥を送ってよこすとラドックは看守を促した。

看守とラドックの不信な様子に、さすがにリルファの心にも不安感がつのる。だが、この場に留まると覚悟したのだから

実験用の部屋に入り、しばらくの間奇妙な沈黙が落ちる。ラドックは置かれている皿にもつてきた薬ビンを置き、グラスを用意してそれらを分けていく。と、看守が一人の男を連れて来た。

どんな罪を犯したのか判らないが、頬のこけた瘦せた男だ。

看守はその男を椅子に座らせ、足首と手足とを固定した。

その瞳にはこれからどんなことが起こるのか理解できずにこわばっている。

毒、だろうか。

きちんと見届けようと覚悟したものの、そう思うといたたまれない気持ちになった。

軍人らしく出入り口に仁王立っていたところで、背後の入り口から女の悲鳴が聞こえた。

「やめてっ、いやよっつ、いやあっつっつ」

力任せに暴れる女を、二人がかりで看守が押さえつけて連れてくる。どきりと心音が上がったのは、それが未だ年若い娘だったからだ。悲壮な様子で首を振り「やめてっ、離してっ」と叫ぶ。金切り声のその声音に、我知らず自分の腕をぎゅっつつかんでいた。

救いをもとめるかのようにラドックへと視線を向けるが、その視線はどこまでも冷めていた。

ラドックの姿に女の顔色が蒼白になる。

だが、そこにリルフアの姿を見つけると、女は瞳を大きく見開き声を張り上げた。

「助けてっ。ねえっ、あんた女でしょう！

助けてっ、こんなひどいことっつ、もういやよっ」

心臓が早く鼓動する。

女の声は悲鳴のように響き、切羽詰っていた。その女の動揺に、さきに連れて来られていた男ががちやがちやと戒めを鳴らす。

恐怖が伝染しているのだ。

看守は無表情に女を所定の場所に固定した。それでも諦めない様子で彼女は全身で悲鳴を上げ続ける。

「押さえろ」

ラドックは冷たい声音でそう命じた。

「やめて、いつそ殺してっ」

「お前は死刑囚だ　安心しろ。やがては自由の手に乗せられる」
ラドックはいいながら、看守が押さえ込む女に近づいた。

あまりの痛ましさにリルファは自然と唇を噛んだ。顎を固定されて液体の薬が流し込まれる。女は涙を流して首をふって抵抗しようとしていたが、看守二人に抑えられて抗うことは許されなかった。

やがて、ラドックの手にしていたグラスの中身が彼女の口に流し込まれ　唇の端から流れ落ちる。

リルファは目をぎゅっと目をつむってしまった。
もう、すでに後悔している。

見なくてよいと言われていたものを、見ると決意したのは自分だというのに。

やがて抵抗をしなくなった女に、看守二人が離れる。
新たなグラスを手にしたラドックは、その冷たい視線を男へと向けた。

男は恐怖でがくがくと震えている。だが、そんな男を前に、ラドックは静かに口を開いた。

「この薬は媚薬だ。

これを飲むことで命を奪われたりはしない　飲むことによつてお前は本能のままに女が欲しくなるだろう。生殖反応が現れれば、その欲求のままにこの女を抱けばいい。

これはそういう実験だ」
飲め

男はどうして良いかわからないという様子で辺りを見回していたが、やがてちらりと薬によつてとろんとした瞳になってしまった女を見て、ごくりと喉を鳴らした。

女ほどの抵抗はなく、男は薬を飲む。

リルフアはこの様子を呆然と見詰めた。

ラドックは二人に薬を投与し終わると看守に命じて二人の戒めを解いた。

女はとろりとした瞳をしてはいたが、それでも身の危険を感じているのだろつずりずりとあとじさる。男は何度も喉仏を動かし、欲望の瞳を女へと向けた。

それを 観察者のまなざしでラドックは静かに見つめ、ペンを走らせる。

吐き気が、した。

やめなさいつと叫んでしまいそうだった。

だが、やけに乾いた喉が言葉を失うように音を出さない。わななく唇と、ぎゅつと握りこんだ手だけが、小さな痛みを与えた。

女の瞳が涙に濡れ、自分の体を抱きしめて息を乱す。

頬が高揚していくのと、男が女の肩に手をかけるのとは同時だったかつんつと、リルフアのブーツが音をたてる。

一瞬だけ、ラドックの視線がリルフアを見た気がする。

莫迦にする、さげすむ視線。

だがリルフアは無言で背を向けてその場を離れた。

無力な自分にも吐き気がする。

五十過ぎの体力の落ちた男。

そう、それはおそらく……この国の主を想定しているのだ。この実験を止めることが、軍人である自分にはできない。

だが、だとしても あの娘があんな形で汚される理由になりはしないというのに。

汚い。

何もかもが汚い。

あんな実験を平気でやるラドックも、そんなことを命じる人間も、

それを とめることもできない自分も、なんて汚い！

監獄塔を出て、リルファは感情のままに壁を殴った。手の痛みも、表面が裂けて血が流れることも厭わずに力任せに殴る。

悔しいのかつらいのか、もう自分でも判らない。

悲鳴を上げて涙を流す、身を崩すようにずるりと地面に膝を折ったところで、血に濡れた手を、ふいに？まれた。

黒の薬師 5

「何をしてるの？」

「ぼんやりと視線を上げると、同じように軍服に身を包んだ青年がいぶかしむように自分を見下ろしていた。」

本来であれば人懐こいと思わせる茶色の瞳を細め、不快そうに顔をしかめてみせる。護衛官であるリルファとは違う、一般兵卒の制服はどこにでもあるものだ。

穏やかそうな顔立ちとは違い、その手は固く強い力でリルファの手首を掴んでいる。

掴み上げた腕をみずからに引き寄せ、血に濡れたそれを眇めて更に眉を顰めてみせた。

「これは……相当痛いだろうに。」

「おいで、傷の手当てくらいはしてあげるから」

「リルファは唇を噛んだままふりと首を振った。」

「こんな痛み、あの娘に比べればどうということはない。」

殺してくれとまで言っていたあの子は、きつと今日一度だけあの薬を使われた訳ではないだろう。経験があるからこそ、あれほど恐怖して拒絶したのだ。

「リルファの腕をつかんだままの青年は困ったような微笑を浮かべた。」

「何があったのか判らないけれど……早く手当てしたほうがいい。」

大丈夫、言いたくないことなら無理に聞いたりしないよ。ただ、この怪我や泣いてるのを放置していける程、人間終わってないつもりだから」

「まあ、ぼくの自己満足に付き合って。」

軽い口調で言いながら、ひょいっ引き上げるようにとそのまま立ち上がらせられる。

「歩く気がないなら、横抱っこするよ？」

さすがにそれは恥ずかしく、リルファはしゃくりあげながらゆっくりと足を動かし始めた。

ラドックの護衛としてこの場にいなければ、とは……：……：ちらりと浮かんだ。だが、ちらりとだけで、まるですべてを拒絶するようにリルファは一度瞳を閉ざし、歩き始めた。

口を開く気力のないリルファに、青年は困ったような微笑だけを浮かべ、リルファを近くの部屋に連れて行き、手を洗い消毒して包帯を巻きつけた。

衛生兵だろうか。やけに手馴れた様子で包帯を巻き、微笑む。

「しばらく痛むかもしれないけれど、すぐによくなるよ。」

まあ、風呂はしみるだろうけれど　あれ、君ってば首も怪我があるの？　怪我だらけだね」

怪我、といっても薄い切り傷だ。

今は包帯も巻いていない。軟膏だけはぬっているが、もともと薄皮とほんの少しきらられただけなのだからリルファは気にもしていなかった。

ただ、傷跡自体は目立たないのだが、その場に痣のようなものが出来てしまったのは不可解だった。日々薄れていくようなので、ほうっておけばこのまま消えてなくなってしまういそうなのだが、サーラが何故か視線をそらしたのは気がかりだった。

面前の青年は痣ではなく、その下に隠れている傷が気になるのか消毒液で首筋を拭い、微笑んだ。

「大丈夫？」

「……はい。お世話をおかけいたしました」

「いや、別にいいんだけど　まあ、自分を大事にしなよ？」

青年は微笑むと、包帯を片付けて立ち上がった。

「じゃあ、ぼくはいくけど。大丈夫？」

話し相手が必要なら、もう少し一緒にいようか？」

「いえ、あの 名前、教えてもらってかまいませんか？」

さっさと立ち去ろうとする青年に、慌てて名を尋ねると彼はくすりと微笑んだ。

「次、会うことがあったら教えるよ。」

別に恩にきてもらうようなことじゃないからね。ではね」

ひらひらと手を振っていかれてしまい、リルファは丁寧に巻かれた白い包帯をそっと撫でた。

「……」

ゆっくりとそれをなで、浅い呼吸を繰り返す。

心が泣いているのをなだめて、先ほどの牢獄塔へと戻った。

中に入ることはできなかった。彼らの嬌声を耳にしてみれば、その動揺はもつと大きなものになってしまいそうだったから。

だからただ、ひたすらにラドックが出てくるのを待った。

静かに、心を空にして。

やがて半刻程もたった頃、ラドックは幾つかの書類を手に入れたり口から顔を出した。その三白眼がちらりとリルファを一瞥し、何の言葉もかけずに歩き出す。

リルファはただ静かにその背後に従った。

研究室も薬草園にも寄らずにラドックは自室に戻る。リルファは暮れていく時間を前に、一礼してそのまま退出しようとしたがラドックに室内に入るようにと命じられた。

「座れ」

示された寝椅子は、彼が普段から寝台がわりにつかっているものだ。

乱雑におかれたキルトをよけて座る。ラドックは持っていた書類を机に放ると、溜息を落としながらふいにリルファの左手を取った。びくんと、体が震える。

そんな動揺などラドックは気にも掛けなかった。

丁寧に巻かれた包帯を、乱暴に解いていく。それを解かれると、真新しい傷がさらけだされてしまうことになぜか羞恥を感じて手を引込めようとした。

だがそれは適わない。

思いのほか強い力で手首を押さえ込まれ、一定のリズムでするすると容易くそれは解かれてしまった。

さらけ出された傷口は、ひやりとした外気に触れ、リルファは思わず視線をそらした。

「だから見るなど言ったのに　それでも利き手ではないところは褒めてやる」

ほそりとラドックの口から出た言葉に、唇を噛んだ。

キツつと一度はそむけた視線を向ければ、ラドックの黒緑の三白眼がすだれのような髪の間からリルファを睨みつけていた。

「　あれが、あんな非人道的な実験が、必要ですか？」

言葉にしながら理解している。

あれは、必要なのだ。

地位ある男のために。

世継ぎの君はいる。だが、何かあったらと思えば更に子を成したいと思うのだろう。

なんてくだらない。

「俺のやることに口を出すなと言った」

「あの子はっ。私よりも年下じゃないですか！

それがあんなふうに汚されるなんて許されないうっ」

ただの愚痴だ。

言っても仕方のないことだ。

ラドックを責めて　責めても、何も変わらない。

「所詮死刑囚だ。死を待つだけのものを利用して何が悪い」

「だからって！」

「だから何だ？　誰かがやらなければいけないものだ。だれかで実験して献上される薬だ。」

えらそうなことを言ったところで、誰かが犠牲になることに代わりはない」

ラドックはえぐるようなまなざしで叩きつけてくる。

「あの娘を哀れんで、お前がその身を差し出せるのか！

それができないのであれば、お前にとやかく言う権利はない」

「私が！」

とっさに出た言葉に、リルファはびくりと身をすくませたがそつと首を振ってひたりとラドックを見た。

「私が、実験体になればあの子はもう使わないのですね」

「莫迦か、お前は」

ラドックは心底あきれたという様子で息をついたが、リルファは小刻みに震える体を抱きしめて不安に揺れる瞳を叱咤して言葉を吐く。

「私が」

ラドックの言う言葉は正しい。

非難したところで、誰かがその身を差し出さなければこの実験は終わらないのだというなら、汚いだの何だのと叫ぶ前に、自分が身を投げ出せないのであればそれはただの偽善だ。

ラドックはぎりつと歯を鳴らし、はつと息を飛ばした。

「いい度胸だな、莫迦娘」

ラドックはがんと乱暴な音をさせて席を立つと「半刻、よく考えろ。頭を冷やせ　俺が戻った時にまだその考えが変わらないのであれば、お前を実験体にしてやる」

リルファの身が、震えた。

時間をおけば今の考えは簡単に覆ってしまいそうだった。

勢いか、といわれればきつと勢いは大きい。時間がたてばたつほどにきつと自分は自分の発言に身を震わせて無様に動揺して自分の言葉を後悔し覆し、またのたうつ。

いっそ今このときに薬を渡されてしまうほうがマシだ。

ラドックは憎むような眼差しを叩きつけ、ふいっと身を翻して自身の部屋を出て行った。

半刻。

それがこんな長いことを、リルファははじめて感じていた。

頭の中が沸騰してしまいそうなほど、さまざまなのが頭をよぎっていく。あの娘が哀れだと、あんなあつかいは不当で非道なのだと訴える自分とともに、だからといって自分がそれを成せるのかと罵倒する声が頭で響く。

身を縮め、外界からの声を遮断するように耳をふさぎぎゅっと強く目を瞑る。

あの娘は未だ十七だろう。自分はそれより四つも年上で、何より陛下に仕える軍人だ。この身は陛下の為に存在する。

あの子が汚されたというのであれば、自分はなんだ。この身はすでにラドックにより傷つけられた。

リルファは自分の左腹部をきつく押さえた。

その時の証は　今も失われることは無い。

ならば、ならば

ダンっと、音をさせて扉が開かれた。

ハッと身をすくませて顔を上げれば、ラドックが自分の頭をタオルで乱暴にふきあげながら、普段はすだれのような前髪に見え隠れする黒緑の瞳をむき出しにしてさげすむような眼差しをこちらへと向けた。

ほんわりとただよう石鹸の香り。

リルフアは小さな振るえを必死に押し込み、冷え切った男の言葉を耳に入れた。

「決まったか？」

「私は軍人です。この身はもとより陛下の為に……」

言うほど、勇ましい音にはならなかった。

小刻みに震えるからだのように、言葉も多少頼りない。

だが、それでも必死に自分を奮い起こした。

「ふん。立派な軍人魂だな。莫迦らしい」

ラドックは言いながら一旦リルフアの横を通り過ぎたが、すぐに柵の中から小さな薬瓶を引き出し、グラスの中にそれを落としこんだ。

ずいっと 差し出される。

「飲め」

「……あの」

手を差し出しながら、かたかたと手が振るえ、つま先がグラスを二度はじいた。

「ここで、ですか？」

相手は？

戸惑う声に、無表情の監察官の声で男は「見知らぬ囚人に抱かれるのに記憶を持っていたいのか？ 薬が利いてきたら入る手はずになつてる」

と素っ気無く返される。

リルフアはすつと血の気が引くのを感じながら意を決してグラスを受け取るとその中身を吐き気と共に飲み込んだ。

激しい頭痛が眠りを妨げた。

夢を見ていたは覚えている。いつもの悪夢だ。

子供の頃、森の中にある小屋で暮らしていた青年の夢。牢獄で数多の薬を投与されて命を落とす囚人の悲鳴。

いつも中心にいるのは、黒い悪魔のような男だ。

冴え冴えとした眼差しですべてのことを淡々とこなす。人の命を救う為の薬を作る為に、数多の人を犠牲にできる男。

「ラル……」

泣きながらその人を呼んだところで、目がぱちりと開いた。

一瞬焦点の合わなかった瞳が、だがすぐに薄暗い天井を写す。見慣れたものではなかったが、それでも知らないものではない天井。

高官が暮らす寮の天井だ。

涙でこわばった瞳に手をあてて、はりついた目元をそっともむように撫でた。

むき出しの腕が、目に入る。

ぼんやりと記憶をたどっても、なぜここで眠っているのかは出なかった。記憶をもっと深く手繰ろうとして 辞めた。

思い出したくない。

そろそろと寝台を出れば、下着だけの姿の自分。

リルフアの軍服は室内にある椅子に掛けられていた。

皺になる。

そんなことを思って、自嘲気味に引きつった笑みがこぼれた。意図もせずに、つっと涙がこぼれてしまう。

自分の身に何があったのか、理解したくなかった。

ただ莫迦みたいに、笑いたくて泣きたくて、吐き出したかった。

けれどそんな自分の頬を一発殴りつける。

自分で選んだ道だ。

後悔ならしている。いっぱいしている。

だが、それがどうした。

あの娘は自分で選ぶこともできなかった。相手を面前にしていた。自分のように記憶しないように顔を合わせないという配慮すらなか

った。

そう　少なくとも、それはラドックの配慮だろう。
リルファは昨夜の出来事を記憶していない。

激しい体のたるさも、頭痛も　ただそれだけのものだ。

唇をかみ締めて頭を振る。痛みには顔をしかめたけれどそれだけで、
リルファは寝台をぬけだして軍服に身を通した。

寝室を出れば、こちらこそ見慣れた本と書類だらけのラドックの
私室。その主は珍しくすでに起きだし、何かの書類を作成していた。
「おはよう、ございます」

声が震えたが、それを隠すように瞳を伏せて笑った。

「ああ」

不機嫌そうないつものラドックの声。こちらを見ようともせず、
ただ黙々と書類を作成しつづける。

「あの」

昨夜は、と言葉を続けようとして飲み込んだ。どう口にしてよい
のか判らない。

昨夜は、良いデータがとれましたか？

というのは激しく間が抜けているような気がする。

それに自分から掘り起こして楽しい話題ではない。

どうしようかと迷っているところで、ラドックはちらりとリル
ファを見た。

「朝食を運んでくれ。二人分」

「あ、はい」

「湯を用意して行け」

命令口調に、リルファは慌てて暖炉脇に置かれている水入れの中
身を薬缶ケトルへといれ暖炉に掛ける。そしてそのままの勢いで部屋を出
た。

食堂　ああ、その前に朝の身支度をしていないじゃないか。

手洗いに外向き鏡の前で身支度を整える。はじめの気たるさなど

どこにいったものか、十二分に睡眠をとった時のように、やけにすつきりとした顔立ちに泣きそうになったが、頭から水を掛けるように顔を洗って首を振った。

仕事だ。何事も。

嫁に行けない？

そんなものは知っている。傷のあるこの身を求める者など元よりありはしない。

『リル、軍なんて行かなくても……俺の妻になればいい。そんなことでリルが変わる訳じゃないだろう』

ふと脳裏によみがえるメイフェアの兄の言葉をふるりと振り払う。従兄弟であるジェイコブはリルファが嫁に行けない身になったのだと承知して、そんなリルファの救済の為に自らを犠牲にするような言葉さえ掛けてくれた。

愚かで、優しい人。

たとえその道しか無いのだとしても、その手にすがるなど出来よう筈がない。

リルファは自嘲の笑みを浮かべながらそっと自らの腹部を撫でた。

このままオールドミスになって軍人として果ててやる！！

新たな決意を胸に抱き、食堂でプレートを手にはラドックの部屋に戻ろうとしたところでふとその笑顔に気づいた。

「お、はようございます」

「おはようございます。昨日の怪我はもう大丈夫ですか？」

と、手の怪我を消毒してくれた青年が首筋のタイを閉めながら微笑む。

両手が二人分のプレートを手に行っているリルファに「持とうか？」と声をかけてくれるがそれは辞退した。

「上官と君の分？ 仲良しなんだね」

てらいなく微笑まれ、リルファは微妙に引きつった。
仲良し？ これほど似合わない単語もないだろう。

食うか食われるか、そういう関係かもしれない。

「じゃあ、またね」

と、手を振られ、慌ててリルファは声をあげた。

「あの、わたくしはリルファ・ディラス・ディラと申します。ラドック・ベイリル様の護衛官を勤めております。あなたのお名前を頂いてよろしいでしょうか？」

「ああ じゃあ、もう一度出会ったらにしている？
もう一度顔を合わせたら結構運命的じゃない？」

なにが楽しいのか笑いながら彼は立ち去った。なんだか不可思議なものを見送りながら、リルファは肩をすくめてしまった。

いくら広い軍官舎といえども、顔くらいそのうちにまた合わせるだろう。

運命なんて大げさだ。

だが、そんな軽口にほんの少しだけ心が軽くなった。

運命？

運命論など信じていない。ラドックとの腐れ縁も、この出会いも、きつと意味は無い。

自嘲気味に、苦笑がこぼれた。

黒の薬師6（終）

「お待たせしました」

器用にプレートを支えて扉を開き、ソファの前のテーブルにプレートを並べる。湯が煮えていたので棚から茶葉を出して紅茶を準備する。一瞬ホットチョコをいれようかと思ったが、朝食には向かないだろうと結論づけた。

ラドックはぱたりと書類を閉ざし、朝食を取るためにソファに座る。

静かな朝食だった。

わずかな食器の音が静寂の室内に響くだけの、味気なさばかりの。その静寂を破ったのは食後の紅茶をゆっくりと喉の奥に流し込んだ男だった。

「おまえ、郷里に帰れ」

「は？」

リルフアは真剣に驚いた。

先ほど軍人として果てる決意を新たにしたところでそう言われてしまうとは思わなかった。

「試験実験をするたびに身を差し出すのか？」

到底おまえのような脆弱な精神ではこの仕事は耐えられない。そうなる前に郷里に帰って叔父上の膝で身を丸めている」

「お断りします」

リルフアは身を整え、意思の強い翡翠の眼差しで相手をねめつけた。

「私は軍人として生きる決意を固めたところです。

貴方の指図は受けません」

「まったく結構な決意だな。

そうやって囚人が哀れだと泣いては薬の投与を受けていくつもりか

「？」

「それが軍人としての仕事であれば、もとより私の身は陛下のものです。陛下のご命令、陛下の御為とあれば私が受けるのも辞さぬ考えです」

「こんな風にいえるのは、きっと昨夜の出来事を記憶していないからだ。」

「どんなに吐き気がしても、どんなに恐怖に身を震わせても、記憶がないからこそこうしてられる。」

「だれとも知らぬ男に犯された記憶を持って、果たして毅然とした態度でいられるかどうかは正直判らない。」

「だからこれは、ラドックに言わせればただの上っ面だけの言葉なのかもしれないけれど。」

「本当に下らない。」

「貴様など軍人以下だ」

「ぐつと唇を噛む。」

「ラドックは憎しみに満ちた眼差しでリルファを射抜いたまま、乱暴に立ち上がると、薬棚に足をむけ、そのまま彼女の面前に薬瓶を置いた。」

「飲め」

「「ご命令ですか？」」

「命令だ」

「その薬が何か、問うことはしなかった。」

「心は凍っていた。ラドックへの感情が、憎しみなのか恐怖なのかも判らない。ただ、命令だというのであれば、もう従うしかない。」

「小瓶を手に、ためらい一つ見せずひといきにリルファは煽った。」

「苦い味が口一杯に広がり、喉の奥が拒絶するように吐き気がこみ」

上げた。それを押さえるように慌てて冷めてしまった紅茶で飲み込んだ。

厳しいラドックの瞳。

それを睨み返していくうちに、ゆっくりと体に変化していくことにリルファは息を詰めた。

まるで熱病のように、体に熱が生まれて、時折ふつとその熱が冷める。

その奇妙な変化は、何故か身を震わせる。つと汗が流れて、心音が耳元で響くようになる頃には、我慢できずに自分で自分の体を抱いていた。

ラドックはゆったりと反対側のソファにすわり、ただ傍観者の瞳をしてこちらを見ている。その視線が怖くて、リルファの瞳は伏せられた。

歯が振るえてかちかちと小さな音をたてる。

口の中に溜まった唾液に、慌ててそれを喉の奥へと流し込んだ。

「どうした」

「いえ……」

声が震える。

両腕で自分の体を抱きしめ、ぎこちなく視線が泳ぐ。熱いのか寒いのか判然としない。上半身は熱いのに、下半身が冷たいような気がする。

血の気が漣のように引くような頼りなさ。

下げていた視線が、不安に揺れてつと上がる。

戸惑うその瞳を、ラドックの冴え冴えとした黒緑の瞳が貫いた。

「あ……」

心の中を無理やり踏みこむような瞳に、リルファの眦から何故かつと涙がこぼれた。

その手にしがみついてしまいたい衝動に愕然として、身を叱咤する。すがりついて泣いてしまいそうな自分を　叩きのめす。必死に自分を抱いているリルファに、ふとラドックは溜息をついた。

乱暴に席を立ち、リルファの面前的のテーブルにどさりと勢いをつけて座るから、リルファは体を震わせて背中を向けた。

触れてほしいという思いと、触れられる恐怖。

ラドックは苛立つように手を伸ばし、リルファの顎を無理やり上向かせた。

小刻みに震え、赤く潤む瞳から涙がこぼれる。

「つらいか？」

「いえ」

強がるように小さく応えた。

ぞくぞくと身が震えて何かにすがってしまいそうなのを必死にこらえているのに、それを出すのは彼女の矜持が許さない。

ラドックに負けたくない。

ただそれだけで睨み返した。

たとえ、リルファが必死に毅然とした態度をとっているつもりだとしても、ラドックには到底そうは見えなかった。

「誘うな」

だからにやりと口元をゆがめて意地悪く男の口は言葉を囁いた。

潤む瞳も、小刻みに揺れる唇も。男の心をぞくぞくとなで上げるには十分な所作だろう。だが、ラドックは余裕のある態度でリルファを眺め、口角を引き上げる。

「莫迦なことを、いわないで下さい」

「そうか？　誘っているようにしか見えないがな」

「侮辱するつもりですか」

「どこまでそうしていただけるのか、実に見ものだな」

ラドックは顎にかけていた手を乱暴に離し、観察というよりも楽しむかのようにゆったりと椅子に腰を下ろした。

「これ……昨日の、薬と……おなじ？」

あえぐように言葉にすれば、ラドックはクツクツと笑う。

昨夜の薬はすぐに意識を失ってしまった気がする。それとも、この奇妙な感じをただ忘れていただけだろうか？

その疑問に、ラドックは耐え難いともいっような口角をゆがめた。

「莫迦か？ 昨日飲ませたのはただの睡眠薬。」

今おまえが飲んだのが真正銘の催淫剤 実験の様子では、男を知っている女程おぼれるのは早いぞ？」

とどめとばかりに告げられた言葉に、気力が萎えたかのように、体を支える力が奪われ、がくりと身が沈む。かろうじて寝椅子の背もたれにもたれるようにして状態を建て直し、必死にラドックの黒緑の瞳を睨み返した。

この変態下劣男！

内心でののしつても、すでにその言葉が口からこぼれない。

息の荒くなつた唇は、気を緩ませると涎を落としてしまいそうでありルファは必死だった。

体が熱い。

体に触れている軍服が、自分が動くたびに皮膚を刺激して小さな悲鳴をあげそうになる。

大きく体を動かせば、ふいにテーブルや寝椅子の縁に体が触れて身が縮む。

全身の神経がむき出しにされたように冴え渡り、まるで蛇にらまれていたかのように身動き一つできない。

ラドックは実に悠然とそんなリルファを見下ろし続ける。

「……ら、る」

耐え難い苦痛だった。

救いを求めるように、声が漏れる。絶対に屈服しないと心は強固に訴えているというのに、頭が霞がるように何かすがれるものを求めていた。

「良く耐えているが、もう駄目か？」

楽しそうに言われ、意識がふつと浮上する。

悔しかった。

いったん堰を切ったように声をあげれば、きつともうそれはとどめなく嬌声となってあたりを満たしてしまいそうだ。

殺してやりたい。

腹のそこからそう思った。

この面前の男が憎くて、憎くて仕方が無い。なぜこんな苦痛を強いらなければならないのか判らなくて、なぜこんなに非道なことができるのか判らなくて、ただ純粋な殺意がリルファの腹部に溜まっていく。

「どうした？」

楽になりたいならそう言え。俺も悪魔じゃないからな」

くすりと笑う男を睨み付ける。

「だが、その時はとつと郷里に戻るんだな。」

まったく田舎の小娘がいるような場所じゃない」

肩をすくめて言われる言葉が、果てしない侮蔑や侮辱に聞こえる。確かに自分は田舎の小娘かもしれないが、そこまで言われる必要があるのか？

リルファは脂汗を流しながら、唇を噛んだ。

意識が奇妙な薬ごときに支配されそうになる。それを許せず、リルファは咄嗟に胸の脇に仕込まれている小さなナイフを引き抜き、そのまま自分の足に突き刺そうとした。

とたん、だんつとナイフだけが弾かれる。

恐ろしい程の正確さで、ナイフの切っ先をよけて小さなグリップを蹴られたのだと気づくのは随分と後になってからのこと。

呆然と手元を見つめた。

ナイフを跳ね上げたのは、ラドックの足で 弾いたナイフは少し斜めにあがったものの、くるくると回ってラドックの手の中に納まった。

ナイフを持たない手が、物凄い勢いでリルファの胸倉を？みげ、ナイフを受けた手は力任せにソレを壁へと投げつけ、その勢いのままにリルファの頬を容赦なく、打った。

「ったく 予想外の動きばかりするお嬢さんだ」

激高した声が憎々しげに吐き出され、頬を強く打った手はもう一度 今度は逆の頬を打った。

痛みに気が遠のく。

ついで腹部に容赦の無い一発をいれられ、目元が霞むままに力を抜いた体を、ラドックはもののようにどさりとソファに投げつけた。

ひんやりとした手が頬に触れる。

熱を持ったそこに、冷たい手が ひたりと触れる。

もう何度もそうされたから、リルファはなんだかうれしくてすりと頬を摺り寄せた。

「リルファさま？」

優しい声に名を呼ばれた。

瞳を開くと、手と思った冷たいものは絞られたタオルだった。タオルをそつとリルファの頬に寄せてくれていたのは、ハウス・メイドのサーラで、リルファは自分が自室にいるものと一瞬勘違いした。

質のよい寝台はラドックの私室のものだ。

また、ここに泊まってしまった。

溜息が落ちた。

「熱をおだしになってお倒れになりましたのよ。病人を移動させるのはおかわいそうだとおっしゃって、ベイリル様がこちらのお部屋を使わせてくださったんですよ。」

「優しい方でいらっしゃいますね」

「につきりと微笑むサーラを、思わず人外生物を見るような眼差しで見えました。」

ラドックが優しい？

それはどんな勘違いだ。

「ラドック……様は？」

乾いた喉で告げると、サーラは微笑みながら水の入ったグラスを差し出し「薬草園に行かれました」と告げた。

「今日はいつ？」

乾いた舌をゆっくりと動かして問いかけると、自分の記憶の中の数字から一日変化していた。

「そう、一日眠っていただけなのね」

まったく護衛官として情けないにもほどがある。

「リルファ様、まだお休みになっていらしたほうが……」

「サーラ、私は大丈夫」

きつく言い、寝台に押し留めようとする手を払い、壁に引っ掛けられている自分の軍服に袖を通していた。

「お前は部屋に戻っていていいから」

「はい」

鏡を見てそつと頬に触れてみる。ほんの少しだけ頬が赤くなっているが、さほど見苦しいこともないだろう。慌しく寝室の扉を開くと、廊下の扉が開くのはほぼ同時だった。

「仕事が溜まっている。来い」

「はい」

一瞬立ちくらみを覚えつつも、ラドックの命令に体は素直に従った。室内の椅子に立てかけられていた細剣を腰に吊るし、足速にそのあとに続く。

ラドックは室内の薬瓶を幾つかトレーに載せて歩き出したが、部屋を出る数歩手前で足を止めてすっと壁に向けて手を伸ばした。

何だ？

と首を傾げるより先に、ラドックの手が突き刺さったナイフを引き抜いてこちらへと示した。

「リルファ・ディラス・ディラ」

「はい」

「命令だ。おまえは俺の為に怪我を負い、俺の為に死ぬ。」

馬鹿の一つ覚えのようにその身は陛下のものだと言っていたが、間違えるな。おまえはおまえの身をそれ以前に俺に差し出している。おまえは俺のものだ。俺意外の理由で傷を負うつもりなら、俺がおまえを殺す」

手渡されたナイフを胸の横の小さな隠しに滑り込ませながら、リルファは顔をしかめた。

意味は判りかねるが、どうやらどちらにしろ死ぬのが前提らしい。

「……ラドック様」

「なんだ」

苛立つような視線が振り仰ぐ。

不満そうな音。

「私は、貴方の護衛官として任官することが許された、ととってよろしいのでしょうか」

ラドックは背を向けた。

「勝手にしろ」

その背に静かに従いながら、リルファはどこか静かな心に触れていた。

いつか、自分はラドックを殺すかもしれない。

いつか、自分はラドックに殺されるかもしれない。

それはきっと、ありえない話ではないはずだ。

翡翠の護衛官

カチリと首筋のホックをはずすのを合図に、ふっと心の緊張が緩んだ。

特別護衛官という任務を賜ったのは新任地について一月。

着任して三ヶ月。

歪む窓ガラスに映りこむ自分をみれば、なんとなく……瘦せた気がする。

いや、やつれたというべきか？

胸回りに手を当てて確認しながら、自然と眉根が寄ってしまった。

「どうしたね？」

「はあ、いえ　もう少し筋肉をつけるべきかと思ひまして」

直属の上司に当たるマディル・コーリアス大佐に背後から声を掛けられ、リルフア・デイラス・デイラは乾いた微笑みを浮かべた。

まさか仕事のストレスでやつれたなどとは言えない。

あまり訪れることのない軍舎はリルフアにとってはなじみのない場所だ。

新任地に訪れて一月、その後数度だけ報告の為に訪れただけの場所。名ばかりのリルフアの机は、誰のか判らない荷物が我が物顔で占拠している始末だし、とうてい居心地が良いとも思えない。

自分の机である筈のそこ　いくつか備え付けられている引き出しの中に男性向け風刺雑誌エロホッを発見し、見なかったフリをしてそっと閉ざし、リルフアは自分よりも幾分高い場所にあるマディルの顔を見上げた。

「それより、一週間も護衛任務からのはずされたのは、何か私の落ち度ということでしょうか？」

このさい、この本が自分に対しての嫌がらせであるのか、それともただ他の隊員が隠しただけのものであるのかはどうでもいい。リ

ルファが気になっていたのはソレだった。

今朝方、突然ルルファが寮の自室で休んでいると従卒の青年が一通の命令書を持って現れたのだった。同じ部屋で寝泊りしているハウスメイドのサーラがおろおろと主への突然の命令に慌てていたのが気の毒で仕方ない。

ルルファの視線を真っ向から受け、マディルは唇をぺろりと舐めた。

「何か失敗の覚えがありますか？」

「まあ、細かいことをいえばきりはありませんが」

彼女が自分の護衛対象者と喧嘩もどきの怒鳴りあいをするのは、二日にいっぺんはあることだったし、護衛官としてはあまり役にたっていないのではないかと思われる点は多々ある。

もとより、ぽつとでの田舎兵卒如き、突然中央転属というだけでも破格の出世だというのに、更に研修終わりで専任護衛官など明らかに叔父が心配した挙句に裏から手を回したのではないかと危惧している程だ。

地方領主のコネ程度、結構簡単にまた飛ばされてしまいそうな気がする。

「いや、以前の報告の時に言っていたでしょう？」

少し体を鍛えなおしたいと。護衛の任務をこなしながら体を鍛える時間を作るのは至難だろうから、一週間程離れて専念させようと思っただのですが、問題でも？」

その言葉に、沈んでいた表情が一気に明るくなった。

やはり自分の仕事に問題があれば、叔父に迷惑が掛かることになるのではないかと思っただけに、その杞憂がぱあっと見事に霧散した。

「いえ。何か問題を起こしてのことでないのであれば、一週間といわず一月でも一年でも大歓迎です」

あまりの明るい言いように、マディルは苦笑を落とした。

「あ、でもその間の　ラドック・ベイリル様の護衛任務は……」
「安心しなさい。ほかの者を当てている。といっても、いつ戻されてくるか判らないですがね」

最後はぼやくように苦笑を零され、リルファも乾いた微笑みが張り付かせた。

ラルは我俣だから　とは飲み込んでおく。

噂でしか知らないが、今までの護衛官も一週間と持つのはマレだったのだという。

確かに我儘で残虐で意味不明な男ではあるが、だからといってただ護衛するだけならばうるちよると動く訳でもないし、本人の奇行など無視し続ければいいと思うのだが　そのてんにおいてリルファは自分が多少の免疫と豪胆さ、そしてずぼらさを持ち合わせていることを気づいていない。

「嬉しそうですね」

あまりにもこやかになってしまったリルファの様子に、マディルは呆れた様子で眉を顰めた。

「そりゃあ、一週間もあの腐れ頭と離れていられる訳ですから」と、素直に感情を吐露してしまったのは愛嬌ということ許して欲しい。

だが、マディルは片眉を跳ね上げ「ラドック・ベイリル薬師殿は我が国の重要人物だということを忘れてはいけませんよ」と、静かに諭した。

「この一週間、好きに使ってかまいません。

他の隊に入り、鍛錬してもいいです。一人で鍛錬してもいい。官舎内の誰かに師事するのであれば私に言うといい。書類を作成してあげますから」

あまりに至れり尽くせりぶりにリルファは上機嫌になってしまった。

中央の机につき書類仕事へと戻ろうとする上官に頭を下げ、リルファはこの日からはじまる一週間の自由に口元が緩むことが止められなかった。

まず、何をすべきか。

護衛官としても少し体力と筋力をつけるべきだろう。

と、リルファは自分の手のひらをじっと見つめてくいくいつと開いたり閉ざしたりを繰り返した。

女である自分は、どうしたって力でもって男性に劣る。それは努力でどうにかなる問題ではないのだ。ならば違う道を切り開くべきだ。

「まずは、アレだな」

リルファは自分の机の中、棚の中をこそごと探り始めた。

「……なんです？ 何をしているんです？」

あまりにも不審な動きを始めたリルファに、マディルは首をかしげた。

「あ、ロープが無いかと思いましたが」

「ロープ……？」

がさごそと荷物をあさる手はそのままに「数日前にラドック・ベイリル様の私室の様子が変わっております。どうやら窓から不審者の侵入があったようです。ですが、ラドック様の私室は三階なので いざと言うときに三階から階下におりられるように訓練を」

「報告を受けてないですよ」

「はあ、室内進入だけですから」

「莫迦ですか。私物に毒物でもいれられたりしていたらっ」

と、慌てる上官に、リルファは「毒程度で死ぬ人じゃないんで」と実につまらなそうに言う。

「……あなた、豪胆すぎやしませんか？」

日一日壁おり、壁下りを繰り返した。

夕刻、地面に転がったりリルファを、三階の窓から紅茶のカップを片手にマディルが眺め「生きてますか？」と声を掛けると、すでに筋肉痛に苛まされた娘は乾いた笑みしか浮かべられなかった。

「生きて、ます」

「壁掃除は終わっているのですか？」

「……明日でいいですか？」

マディルは嘆息した。

明日までこの奇怪な足跡を残しておく趣味が、彼にはない。それに、階下の部署からはすでに苦情もきていた。

窓の向こうを人が降りたりのぼったりを繰り返しているのだから、確かにたまったものではないだろう。

「グレン、グレンドル」

マディルは自分の仕事を終えて戻っている部下をちらりと見やっ
た。軍人らしく短い髪、左額に小さな火傷跡あるいかつい男はとたんに嫌そうな顔をした。

「言っておきますが、自分は壁歩きしながら壁拭きなんて器用な真似はできませんから」

その体重も、おそらくリルファの二倍以上ある男だ。

マディルは「使えない」とぼやくと、持っていた紅茶のカップを机におき、部屋の隅にあるスポンジを濡らして窓辺のロープをつかむと、軽々と窓から滑り降りておる過程で壁をふき、二階の窓枠に足を引っ掛けて壁をふき、地面に降り立って壁をふく。

リルファは筋肉痛で転がりながら、内心でうわあっと悲鳴をあげていた。

上官に掃除をさせてしまった！

「で、そこで討ち死にしている阿呆な護衛官。動けませんか？」

「はあ……最近めつきり鈍っていたようでして、面目しだいもありません」

言いながら、それでも腕に力を入れて立ち上がるうとする。筋肉が悲鳴をあげるが、それでもあまりにも無様なので必死に力を入れる。

「グレン」

マディルは声を張り上げ部下を呼んだ。

「はい」

「綺麗に洗ってしまっておいて下さい」

と、マディルは持っていたスポンジを三階に向けて投げ込むと、頼りない小鹿か何かのようによろよろと立ち上がったリルファの腕を引き、肩下に自分の腕を入れて支えた。

「っ、すみませんっ」

「腐っても部下ですからね。丁度いい、薬師殿のところに行っているクラウドの様子も確認ができるだろうし」

「って、行く気ですか？」

「あなた、擦り傷だらけですよ？ 打ち身もあるでしょうし。」

軟膏なりいただいたほうがいいでしょう。

それともまさか、薬師殿の護衛官であるあなたが、医師の治療を受けるつもりですか？ それはそれでイロイロと問題になりそうですよ」

ぐっと、リルファは言葉に詰まった。

確かに、それではまるきり「この薬師は信用できませんよ、へボですよ」と護衛官が吹聴しているようなものだ。

それはそれで楽しそうで心からやってみたいことの一つだが、あの護衛対象にネチネチと恨まれそうな気がする。

ネチネチというか、ネチャネチャとそれはそれは執拗に。

リルファは眇めた眼差しで虚空を睨みつけた。

せつかく一週間もの間顔を見ずにすむかと思っていたのに どうやら怪我や病気を煩うと、自分は強制的にあの顔の前に突き出され

るようだ。

まさか訓練の怪我で罰せられたりはしないだろうけれど……ふと浮かんだ思いにリルファは更に深い溜息を吐き出した。

翡翠の護衛官2

ラドック・ベイリルの仕事部屋へとひきずられるように到着すると、部屋の前でマデイルの部下であるクラウス・ヒューがほっとしたような表情を浮かべて敬礼した。

「お疲れ様。一週間がんばれそうかな」

マデイルはよいしょっとリルファを抱えなおし、その衝撃にリルファは喉の奥で呻いた。

上官からの言葉に、クラウスは苦渋の混じるような奇妙な表情で「善処、いたします」と短く応え、リルファは打撲の痛みに顔をしかめながらクラウスを盗み見た。

何度か挨拶を交わしてはいるが、元々部署でやる仕事ではない為に付き合いは無い。

つんつんと少し癖のあるブラウンの髪を無理矢理撫で付けているが、髪質が固いのか寝癖のようにはなえている。少し垂れ目な為にリルファより幼くさえ見えるが、確か年齢で言えば四つ近くは上に当たる。善処、いたします とは、また微妙な返事だ。

リルファなどはそう思ったが、マデイルはそれを良いほうへととったのだろう。

「薬師殿はおいでだね。この怪我人の治療を頼みたいんだが、とりついでおくれ」

「はい、少々お待ちください」

護衛官は門番でも部屋番でもないのだが、ここではそういう扱いになってしまふのだ。リルファは見慣れぬ自分の同僚に深く同情し、また 普段の自分の任務がそれだと思つとえらくへこんだ。

中の応えに、リルファは上官の手を断りそろそろと見慣れた室内に入りこんだ。

薬を調剤する為の部屋であり、また問診などをするその部屋で黒

い薬師はそのうつとうしそうな前髪の奥にある黒緑の瞳を細めた。

「なんだ、おまえか」

「はあ、失礼します」

どう口にすれば良いだろう、と思案する矢先、マディルは丁寧に胸元に手を当てて頭を下げた。

「薬師殿、お忙しいところを申し訳ありません。

私の部下のかすり傷の治療と 本日より任務につきました護衛官の様子をお聞かせ願ひまして構いませんでしょうか？」

「護衛官など誰でも同じだ」

あんまりさりと言われたため、リルフアは一瞬息をつまらせた。そりゃ、確かにそうだろうが 自分の専任護衛官を前に言う台詞ではないだろう 思い切りへこむ。

「まあ、そうかもしれません」

マディルは苦笑した。

その瞳がちらりとリルフアを見たのは、少しだけ哀れんだのかも知れない。

ラドックはつまらなそうに顎をしゃくり、リルフアに座るようにと命じた。リルフアはおかれている椅子に座り、ロープですれた白手を引き抜いた。

幾度もロープをつかみ、滑ったりもしていた為に本来白いはずの手袋は土で汚れ、すれて穴が開いている。穴があいている場所には、見事に擦過傷がのぞき、指の付け根下は固くなっていた。

繰り返せばそれはそれは見事なタコになりそうだ。

手首をつかみ、その傷を検分していたラドックはおもむろに手近にある消毒薬をつかみ、何の躊躇もなくどばりと傷の酷い手に掛ける。

「うぐつひゃあううつ」

予想だにしない痛みに思いのほか高い悲鳴が上がる。途中で耐えようとした為にその声は奇妙に裏返った音になった。

思わず体が拒絶するように逃げようと跳ねたが、ラドックの手はしっかりと手首を押さえ込んでいてそれが適わない。

マディルは医療とみるには容赦のない攻撃に視線をそらした。

ひくひくと引きつるリルファに、ラドックは冷たい眼差しを向け、

「しばらくそのまま放置しとけ。消毒薬が乾いたら薬を塗ってやる」

「って、このままですか？」

まるで手首に輪をはめられた罪人のような格好で座っているリルファは情けない声を上げた。

手は消毒液でぐっしょりと濡れているし、それがひりひりと痛む。

「ああ、打身もあるんですが」

と、思い出すようにマディルが言うが、むしろそれは余計な世話だった。リルファは泣きそうな顔を自分の上官に向けたが、それは取り合ってもらえない。

「どこだ？」

「腕や臀部　訓練の過程で何度も転がっていたので、間接部には多く。筋肉痛も厳しくなりそうですので、それに合う薬があったら出していただけると……」

「さて、今、臀部とかいった？」

リルファは心底、この優しい口調だけの上官をにらみつけたくなかった。

「わかった」

ラドックはいいながら、いつもと変わらぬ無感動な視線をひたりとリルファに向けた。

「自分で脱ぐか、はがされるか選べ」

「いや、あの。」

軟膏だけいただければ、自室でハウスメイドに塗ってもらいますから」

及び腰になって、まるで言い訳のように訴えてみたのだがラドックは感知すらない。威圧だけで脱ぐように命令する男に、さすが

にマデイルは間に手を差し入れるようにしてさえぎった。

「えっと、当人もそういつていますから薬だけいただければ」

「患部を見ずに薬が出せると思うのか？」

軟膏くらいおとなしく出してくれ。頼むから。

嘆息交じりに肩を上下させ、リルファはふと手が乾いていることに気づいた。ひらひらと手を動かし、

「では、薬は結構です。お忙しい薬師様のお時間を無駄にいたしまして申し訳」

逃げよう。

そう思った矢先、ラドックはおもむろにリルファの腹部をぐっと押した。

「いいいいつ」

「これは擦過傷かな、それとも打撲か？」

面白いくらい怪我人だな 訓練場のことでよかつたな」

言いながらそのまま肩を押され引き倒される。筋肉痛と打撲によってリルファの体が悲鳴をあげる。

「ちよつ」

抗議の声をあげるより先に、軍服の胸の脇 隠しナイフがすらりと抜かれ、そのまま首筋、軍服の襟口に引き入れられた。

リルファも彼女の上司もあまりの速さとその行動のとっぴさに息を飲み込み、判断がおくれてしまった。

「このまま引き裂かれるか、自分で脱ぐか選べと言っている」

ホックにナイフの刃が引っかかり、上着の生地がぴんつと張るのを感じて、リルファは目を閉ざして観念した。

「自分で脱ぎます」

「まったく手を焼かせるな」

つまらなそうに鼻を鳴らし、ラドックは手にしていたナイフを手のスナップだけで壁に突き刺した。

タンツと小気味良い音をさせたナイフの響きの中、リルファは

情けない思いを覚えながら自ら襟口に手をまわし、カチリと音をさせて第一ホックをはずし、ゆるゆると上着を脱いだ。

上着、シャツ　さすがに薄い下着は大丈夫だろうと二枚の上着を椅子の上に放った。

外気に触れてはじめて、左の腕の擦過傷がひりひりと痛むのに気づいた。はじめのうち、きちんと着地でできずに幾度か転がった時のものだろう。右側をかばった為に左側に負担がかかっている。

「利き腕は良くかばってますね」

おそらくそれは上官のほめ言葉なのだろう。

リルファはふいっと右手にいる上官をみあげ、乾いた微笑みを返した。

「まあ、今日のような阿呆な訓練は一日続けるものではありませんけれど」

としつかりと釘もさされる。

リルファの腕を掲げもち、その怪我の具合を見ていたラドックはふんつと鼻を鳴らし、先ほどと同じように無造作に消毒液をその腕にかけた。

「くひあああつ」

予想できたはずだが、上官との会話に気を取られていたリルファは何の心構えもなく消毒液の洗礼を受け、跳ね上がった。

「おまえは本当に拷問には向かないな」

冷ややかなラドックの言葉に、思わず上官がいるというのも忘れてリルファは声を張り上げた。

「貴方は本当に拷問官に最適ですね！

人を痛めつけて楽しいですかっ」

「俺の適正などどうでもいい。おまえ、骨は大丈夫なんだろうな？」
言うや、触診しようと手を伸ばされる。リルファは避けた。

「大丈夫です！

骨は無事です」

だから触らないで。骨の異常は無いと断言はできるが、何より触られるのが痛い。

リルファは自分の隣に無造作に置かれている軍服を掴み、痛む足をすばやく動かしマデイルの腕をつかんだ。

「大佐！ 帰りましょうっ」

「え、ああ はい」

「失礼しました。さようならっ」

半ば逃げるように部屋を出たリルファを見た代替護衛官クラウスはぎよつとした。

それも当然で、上半身だけとはいえ下着姿の若い女性が慌てた様子で出てきたのだから、誰だとして同じ反応を示すに違いない。

「デリラ護衛官、上着、上着」

「はいっ」

リルファは慌ててシャツと上着とを着るが、どうにもぴしりといかない。

マデイルは大きく息をついた。

「確かに、薬師殿のやりようは誉められたものではありませんが、

デリラ護衛官 貴女の態度も少し問題ですよ？」

「は、はあ……」

「あの方はあれで陛下の覚えもめでたい方です。

薬師としての腕も研究者としての腕もわが国で並びなき方なんです。その方に対して怒鳴りつけたり、よりにもよって拷問官に最適だなど……」

マデイルは額に手を当て、大きく息をつくひとりとリルファを見下ろした。

「場合によっては、貴女の任務を考えなければなりませんね」

ぴくんと背筋が伸びた。

「ちよつ、と待つてください？」

そうすると僕は、まさか……」

その場で警護任務についているクラウスは驚愕に瞳を見開いた。

「まあ、その場合は君にそのまま任務についてもらうのが一番妥当だとは思いますが。」

なんですか？ 何か問題が？」

問題があるのは十分に理解しているだろうに、マディルは相手に口を挟ませない威圧を向けてくる。

クラウスは一瞬悲壮な顔を浮かべはしたものの、がくりと肩を落とすつも「いえ、問題ありません」と小さく応えた。

ラドック・ベイリルの護衛から外れる。

それはなんと甘美な誘惑だろうか。

だが、ふとリルファは顔を曇らせた。

それは、許されるのだろうか？

ラドックは以前リルファに言ったことがある。

自分の為に死ぬ、と。

もちろん任務なのだから。軍人なのだから、勤務からはずされればそれは仕方のないことなのではないか？

「デイラ護衛官？」

マディルの問いかけに、リルファは口を閉ざした。

任務だから仕方ない。

それが通じる男であれば問題は無いのだが。

翡翠の護衛官3

専任護衛官として外される。
ちらりちらりとそれが脳裏を掠める。

掠めたところで何が変わるわけでは実際ないのだが。リルフアは軍人で、ラドック・ベイリルの護衛任務を外れたとしても他の誰かの護衛官として任命を受けるだろうし、またまったく違う軍務につくことだと考えてられる。

それは人事の領域で、一般兵にどうとできるものではない。

「何を余計なことを考えている！ やる気があるのかっ」

激しい一喝に、リルフアはびくりと身をすくませた。

面前に刀剣が振り下ろされる、慌てて地面を蹴ってそれを避けた。

「つたく、ちよろちよるとっ」

剣戟の講師として紹介された騎兵隊長の一撃は重い。リルフアにしてみればそれを受け流すのも苦労だった。だから自然と足を使い、体を動かす。

胴を風ぐように剣が動く、それを身を沈めてかわして地面に手をついたところでそれを軸にして足を回す。咄嗟にやってしまったことだったが、剣戟にこれはもちろんタブーとしかいいようがない。隊長であるダグラスは持っていた刀を地面に突き刺し「この小娘っ」と怒りをあらわにした。

「剣戟の訓練に来ているのか、曲芸をしにきているのかどっちだ！」

「すみませんっ」

ですが、ダグラス隊長の剣を素直に受けては私の体が持ちません」

すでに体力も磨り減ってしまった。

腰に細剣を戻し、リルフアは汗に濡れた前髪をかきあげた。

「おまえは剣が向かないな。ナイフやムチを師事したらどうだ？」

体は軽いしよく動くから組み手もいいかもしれないが、あがいても女の腕だからな」

リルフアはそつと細剣の柄を撫で嘆息した。

確かに、剣は自分にはあまり向かない。

「鞭……ですか」

「武具庫に行けば幾つかあるだろう。」

「そうだな、離れた場所に的をおいて試しに打ち付けてみたらどうだ？」

「どうやらダグラスはすでにリルフアに教える気が無いらしい。せっかく上官であるマディルにわざわざ書類を作ってもらったというのに申し訳ない。」

それでもそのまま放置するような真似はせず、ダグラスはリルフアを連れて武具庫へと赴くと、壁に飾られている鞭を幾つか引き出し、その長さを確認した。

「意外に重いですね」

「重心がしつかりとしているからな。だが鞭部分は皮製だ。軽いぞ。先端に重石が付いている。」

たとえば

「ダグラスはふいに鞭を振るうと、部屋の入り口付近にある無造作に立てかけられている棍棒へと鞭をうった。」

鋭い音をさせて鞭はしなやかに伸び、鞭の先端から数十センチ離れたところで棍棒に触れるとそこが軸となり重石部分を有する先端がくるくると巻きついた。最後までそれを見定めず、くいつとダグラスが腕を引く。

「立てかけられていたそれは、その勢いでもって空を飛び、たちまちのうちにダグラスの元へとそれを運んだ。」

「パシンと音をさせて棍棒を受け取るダグラスはニヤリと笑った。」

「面白いだろう？」

「……面白い、というか、すごい」

「相手の武器を奪うこともできるし、相手を傷つけることもできる。ただ、これはコントロールが難しい。やってみるか？」

「ずいっと手渡されたのは、ダグラスが使ったのとは違うものだった。」

た。重さと長さが違うようだ。

リルファはためしに同じようにふりあげてみようとおもったものの、ダグラスに慌てて止められてしまった。

「とりあえずは外でやれ。」

室内でやるには十分にコントロールできるようになってからだ。それに、これはそもそも室内でやるには無茶な武器だぞ?」

「では覚えてもあまり……」

難色を示すと、ダグラスは笑った。

「これでコントロール能力がつかと、ナイフを投げるのも巧くなる。もちろんナイフは投げるものじゃないが、そういう使い方もできるようになる。いろいろ覚えるのは悪いことじゃない。そうだろう?」

その言葉にリルファはうなずいた。

自らに最適な武器を見つける。

それは軍人であるリルファにとって急務だ。

十四の年齢から軍人になる為の訓練を受けてきた。それなりに腕には自信があるものの他の者より卓越しているとはどうしても言いがたい。

ラドック・ベイリルの護衛官でなくなったとしても、必要なものであるのに変わりはない。

リルファは中庭に出ると、言われたように的を用意して離れた場所に足を固定した。

「その鞭は8メートルだ。」

つまり、的との距離を把握しなければいけない。相手が人間であったとしてもそれは代わらない。体にしっかりとその距離を覚えこませる。そして大事なことは、相手は動くということだ。相手の動きを見極める。先を読み、超える」

少し離れた場所でダグラスは腕を組んで楽しそうに眺めてくる。

リルファは多少息を整え、手にした鞭をぱらりと垂らし　振り上げた。

「あれ?」

パシんつと地面の土と雑草とを削り取り鞭の先端が落ちた。

思いのほか離れた場所を鞭は打ちつけ、置かれた的　グラス
はものともしなかった。

「肩に力が入りすぎだ。もっとやわらかくていい」

「素晴らしいですけど、先端の動きが把握しきれない。意外に重い」
「重かるうがもつとゆつたりと打ちつける」

がははつと笑いながらダグラスは言う。どうやら楽しんでいるらしい。

リルフアは内心で溜息をつき、ちらりと鞭の握りの部分を見た。

先日のロープの豆もどきから未だ四日。

「こりや完全に豆になるな。つぶれたら痛いだろうなあ」

思わずぼやいたが、ダグラスに「なんだ？」と問われて慌てて首を振った。

「いいえ、いきます！」

大きく息を吸い込んだ。

新しく与えられた鞭を護衛官室の自分の机　未だ誰のか判らない荷物が載っているが　で手入れをしていると、室内に上官のマ
ディルが舞い戻った。

大きく息をついて肩を上下させる様子は「疲れてます」と書かれているようで、リルフアは鞭をベルトで纏め上げ、

「お疲れ様です。お茶でもいれましょうか？」

本来護衛官としては必要ではないスキルが磨かれているリルフアだった。ラドックの元にいると、まるきり自分がただの茶組みにでもなつた気持ちになれる。

「……ああ、ディラ護衛官」

乾いた微笑みを浮かべたマディルの背後、続いて現れたのは更に顔色の悪いクラウスだった。

「あれ？」

クラウドはリルファがいることに気づくと、まるで長年の親友にでもそうするように、突然駆け寄りリルファを抱きしめたのだ。

「もう勘弁しろっ」

はい？

「あの人酷い。酷すぎる！」

「まあ、あんまり人としてどうかとは思いますが」

これは何事？

リルファが救いを求めるように上官へと視線を送ると、上官も参ったというように額に手を当て、

「デリラ護衛官は、あの人……まあ、刑務所内での仕事を知っていますね？」

鎮痛な面持ちでそう口を開いた。

ああ、あれか。

リルファはうなずいた。

いわば人体実験だ。確かにあれは趣味が悪すぎる。

ラドックは死刑囚を使って薬の試薬実験をしているのだ。それを護衛官として身近に見続けるのは確かにつらい仕事の一つだ。

ラドックに言わせると「どうせ死ぬなら役に立て」ということらしいのだが……

「俺だって仕方ないと思うさ。これが仕事だ。」

だからただ見ているだけならここまで嫌がったりしない！」

と、リルファに抱きついたまま半泣きのクラウドは叫んだ。

「あの人、俺に毒を飲ませやがった！」

「あ、ああ……？」

なんだ？

と疑問を抱くリルファに、マディルは嘆息交じりに説明してくれた。おそらく、本来であれば説明してはいけないようなことだったが。

「つまり 実験、というか今日は確実に死刑執行だったらしいのです。」

相手は8人の子供を犯して殺した残虐非道な輩だったわけですが、それを相手に新しい丸薬の実験をすることになっていたようです」

だが、男は口を開こうとしなかった。

毒を飲まされると感じていたのだろう。ただの薬だと言ってもがんとして口を開けない。

「そこで、薬師殿はクラウスを呼び、口の中を診察して丸薬状態になっていた薬を放り込んだそうです」

「……」

ぶるぶるとクラウスが震えだす。

「意地でも飲まなかつたけどなっ」

それでもラドックの目は「飲め」と威圧していたが、クラウスは飲むフリだけで通した。

「相手の男はそれに安堵したのか、やっと薬を飲んだ」

「そうしたら！ 突然目がむき出しになって首をかきむしって、血や泡を吐き出してっっ」

お願いですから力説しないで下さい。

「俺がどれだけ恐ろしい思いをしたかっ！」

「まあ、口の中に傷や口内炎がなければ害が無いということらしいんですが」

「そんなこと説明されなければ判らない！ それより飲ませる気満々だったっ。俺飲んでたらあぶねえじゃんっ」

あんまりにもクラウスが哀れで、リルファはぼんぼんとその背中を撫でながら、おそらく自分がその場にいたら自分も同じことをされていただろうことを想像し、更にクラウスに同情を寄せてみた。うっかりしっかり薬を嚙下したところで、実験体が一人増えただけのこととして処理されるだろう。

「もう駄目です。もう耐えられませんっ。俺はあの人を守るなんて金輪際イヤですからっ」

うっうっ、不憫な。

自分が口に含んだものと同じ薬で目の前で悶死されたら、それはさ

ぞ恐ろしいことだろう。

クラウドスは慌ててそれを吐き出したが、口の中が痺れるな気持ちにぞっとしたという。

「それ以前の問題ですよ、クラウドス」

ひんやりとしたマデイルの言葉に、クラウドスの振るえる体が一瞬こわばった。

「あれ、では今は誰が？」

「一応今はグレンドルに任せてありますが　グレンは元々他に仕事もありますし」

大きく嘆息し、

「リルファ・ディラス・デイラ護衛官」

「はい」

「通常任務に戻っていただいでかまいませんか？　もちろん、私としては貴方の護衛対象への無礼を思えば個人護衛はまだ早いのかもと思いますが……少なくとも、代わりに用意する者が現れるまでの間は、貴女に頼るよりないようだ」

マデイルは更に深く息をつき、

「まあ、ラドック・ベイリル様から苦情はきていませんから……ああ、胃が痛い」

「あのお」

「なんです？」

ただの興味で聞いてみた。

「私がおう絶対にいやだーっという状態になった場合は、考慮してもらえるのでしょうか？」

「　三ヶ月あの人とやっていける豪胆さは素晴らしいですよ。デイラ護衛官」

引きつったような微笑をマデイルは向け、リルファに張り付いたままのクラウドスを引き剥がし、外へと引き立てていってしまった。

豪胆さなど褒められたところで嬉しい訳はない。

リルファはせっかくの訓練期間が終わりを告げたことにくぐりと肩を落とし、嘆息した。

翡翠の護衛官 4

翌日から構わないといわれていた為、リルファはありがたくその言葉の通り翌日の朝に通常勤務　つまり、ラドック・ベイリルの護衛任務につくことにした。

一週間という自由は二日を残して消え去った訳だが、それでも五日間というのは充実した日々だった気がする。

少なくとも、四日の間他人と喧嘩らしい喧嘩をしないでいられたというのは喜ばしい限りだ。

リルファはラドックの私室の扉の前に立つと軽く胃痛を覚えつつもノックし、当然のように応えが無いのは判っていたので、持っている合鍵でさっさと扉を開いた。

ふわりと最近忘れていた薬草の香りが鼻腔を刺激し、泣きたいような気持ちになるのは何故なのか。

薄暗いなんとなく陰気な部屋。そして、寝台ではなくなぜかいつも寝椅子に眠っている部屋の主。

上半身裸に薄い掛け布だけを引きかぶり眠り転がっているラドックは、珍しく昨夜遅くにでも浴室にでも出向いたのか未だ濡れている上にかすかに石鹸の香りまでさせている。

放置しておくとも五日でも七日の間でも体を流すということをしな
いのだから困った男だ。

リルファは暖炉に近づき火種を引き出して炎を強めると、水差しの中身を薬缶に入れて暖炉の上の鉄板部分においた。

強い火力はほどなく水を湯にかえる。

手馴れた様子で紅茶を入れ、自分用にはホットチョコをいれた。

「相変わらずだな」

ぼそりと不機嫌そうな声が耳に入る。

相変わらず、の枕詞がホットチョコを示すものであると理解した

リルファは「カカオは高価ですからね。私のような一介の護衛官の口にはなかなか入りません」と肩をすくめた。

もぞりと寝椅子の上のラドックが身を起こした。

ラドック・ベイリルの特徴の一つとして、彼は突然その目をぱかりと開けるのだ。まるでずっとおきていたかのように。

「リルファ」

「　　なんです？」

低い声に呼ばれた。

不愉快そうな声はこの男にとっては基本ベースだ。機嫌の良い状態というのはあまり無い。誰かをいじめている時がそれにあたるかもしれない。

つまるところ、この男は相当趣味が悪いのだ。

「リルファ・デイラス・デイラ」

「だから、なんです？」

なんだかムツとし、唇を突き出すようにして言えばラドックは上半身だけをあげたままの状態で、未だ湿ったままの前髪をかきあげた。

その体の傷を目にいれ、幼い子供の頃に視線をそらしていたことを思い出した。

だが、今は違う。

リルファはただ静かに、上半身を起こしている男の体を　　左腹

部に刻み込まれた蔦の刺青を見つめた。

ラドックはリルファの視線など気づかぬ様子で、大きく息をつき、目を閉ざした。

そのしぐさがあまりにもラドックらしくからぬものにうつり、リルファは何故か不安を覚えた。

「ラル？」

とたんにラドック・ベイリルはいつものラドック・ベイリルへと変化する。

「ラドック・ベイリルだ。」

紅茶、よこせ」

ぎろりとにらみつけられ、リルファは嘆息しつつ紅茶をもって近づいた。

「今日からまた護衛官として勤めさせていただきますから」

「勝手にしろ」

「まあ、もちろん勝手にさせていただきますが……あの、どうかされましたか？ 顔色が悪いように思えますが」

紅茶のカップをテーブルに置き、リルファはラドックの顔を覗き込んだ。

もともとラドックは室内型の不健康な人間だが、いつもより白いむしろ青白い気がする。

言われたラドックは更に不愉快そうに目を険しくしていたが、ふいにしばらく考え込んだかと思えば、紅茶を一口のどの奥に流し込み、

「寝る」

と寝椅子にばかりと倒れこんだ。

「……寝不足ですか？」

「どうか自分はどうしたらよいのだろうか？」

掛け布にくるまり寝やすいようにもぞもぞと動いていたラドックにおそろおそろたずねると、冷ややかな声が返った。

「おまえは護衛官だろう」

「了解致しました。では外で立ち番をさせていただきます」

軍人らしく敬礼をすると、彼女の護衛対象は低くうなるような声で「うるさい、静かにそこで座ってる」と命令しむっつりと口を閉ざした。

意味が判らない。

やがて寝息が聞こえてくると、リルファは冷めたホットチョコを飲み下し、大きく息をついた。

何をすることも無いので、とりあえず室内の掃除からはじめる。

五日間で溜まった埃を落としながら、できれば寝室で寝てくれればもっと楽だし、本人も埃がいかないのにと小さくぼやきが落ちてしまった。

昼過ぎまでそうして片付けをしていると、遠慮がちなノックの音。リルファは寝椅子の脇をそっと通り重厚な扉を開いた。

「ああ、ここにいたんですか」

「大佐？ どうされたんですか？」

上官であるマデイルの姿に、リルファは危うく声をあげてしまいました。うになった。

「薬師殿もこちらですよ？ このたびの不手際の謝罪に来たのですが……」

疲れた様子のマデイルに、リルファは声を潜めたまま「お疲れの様子で、今は眠っていらつしやいますか」

起こす、という選択肢はありえない。

リルファにとっても、そしてマデイルにとっても ラドック・ベ

イリルは上位者に他ならないのだ。

「待たせて頂いてかまいませんか？」

実は私室は空だろうと思っておりましたので、施設内をイロイロと回りすぎました。この後に時間を改めて探すのは時間のロスですから

「えっと……まあ、大丈夫です」

やはりこういう場合は寝室に寝ていてくれたほうが良かった。リルファは内心で思ったが、そのままマデイルの為に扉を開いた。

寝椅子はテーブルを挟むようにして二つ置かれている。その一つを占拠しているのはもちろん部屋の主である。それを前に「どうぞお座りになってください」と言うのは気がひけたものだが、他の椅子といえは奥にある執務用の椅子だ。これはラドック専用といわれれば確かにそうなので、他の人間に勧めるのははばかれた。

リルファは薬缶の湯でもって紅茶をいれ、マデイルの前においた。

その小さな食器のすれる音に、ふっとラドックの瞳が開く。

「なんだ？」

突然開いた瞳に、マディルは一瞬だけ動揺を見せたもののすぐに微笑みを浮かべて、

「護衛管理官として、このたびの不手際について謝罪に参りました」「どれについて言ってるのか判らん」

ラドックはむくりと身を起こし、不愉快そうに不遜な視線をマディルへと向けた。さすがに上半身裸のままというのもよろしくないので、リルファは続き部屋のクロゼットを開き、着替えの一そろいと共に黒いシャツをラドックへと手渡す。

相手が誰であったとしてもそうなのだろう。

ラドックは慥然としたようすのまま、その場でシャツに頭を通した。「クラウドス・ヒューのことです。」

貴方に対して剣を抜いた 立派な不敬罪、および反逆行為だ」その言葉に、リルファは大きく瞳を見開いた。

勿論、昨日のことは承知している。だが、自分の代わりに護衛任務についていた人間が、まさか主へと剣を向けているなどは承知していなかった。

護衛対象への抜刀……果たしてそれがどれ程重い罪であるのかを思い、リルファは身を震わせた。

「彼は現在、軍の独房に送致してあります。」

守るべき護衛対象へと行った行動に……謹慎程度では済まされないとは熟知しております。上からの達しでは、貴方のお気のすむようにということでしたので」

ひやりと血の気がひいていく。

そんな台詞、猫にネズミをどうする？と聞いているようなものだ。散々追いかけて、引つ掛け、転がし、ねぶり倒してその命を奪い去り、あふりと欠伸一つで放置する。

ラドックは唇を持ち上げ、ニヤリと笑みを刻んだ。

「その意味が、判ってるのか？」

「承知しておりますが、できれば寛大な措置を……」

マデイルの言葉に、ラドックは口を開いた。

黒い悪魔が次に何を言うのか想像はついたし、またその言葉にマデイルが頭を垂れて従うのは目に見えていた。

だからリルフアはとっさに声を上げてしまった。

「掃除の手伝いをしてもらいましょう。」

調剤室、薬草園、執務室、すべてやるのはなかなか手がかりからね！ 立派な罰則でしょう！」

二人の、四つの瞳がリルフアをひたりと見た。

マデイルは驚愕したように、そしてラドックは冷たく。

ラドックがもう一度その薄い唇を開くより先に、もう一度リルフアは言葉を重ねる。

「かまいませんね？ ラドック様」

「ああ、勝手にしろ」

それきり、ラドックは興味を失ったようだった。

寝椅子から立ち上がり、前髪をかきあげながらリルフアの横を通過してその奥にある執務室へと入っていく。

「リルフア、食事を何か運んでくれ」

それだけを残してはたりと扉は閉ざされた。

しんと、部屋に静寂が落ちる。

そして、それを破ったのはマデイルの大きな溜息だった。

「デイラ護衛官」

「はい」

「いろいろと問題はありますが、貴女が彼の護衛官としてやれているのは事実です。それに、今回の件はおそらく貴女でなければクラウス・ヒューを救うことはできなかった。礼を言いますよ」

ふつと、マデイルの口元に微笑が浮かぶ。

「まったく、最悪は軍事法廷もなく薬殺を覚悟していたというのに、まさか罰掃除で済ませるとは思いませんでしたよ」

「ラドック様は面倒臭がりですから、考える時間を与えずに畳み掛

けるのがコツです」

ぐつと拳を掲げての力説に、マディルは微笑み、ふいにリルファの頭にぼんつとその大きな手をおいてくしゃりと撫でた。

少し照れたリルファに、だがマディルはすぐにその表情を引き締めめる。

「貴女も気をつけなさい。

今回のようなことがあった場合、貴女を救える人間はいない。私がかばったところであの男がおとなしく従うとは思えない。

貴女を生かすのも殺すのも、あの男の手の内にあるのだと自覚なさい」

ぴしゃりと叩きつけられ、リルファは唇の端を引きつらせながら「肝に銘じさせてもらいます」と小さく応えた。

「デイラ護衛官、食事を取りにいくのでしょう？」

その間は私がここにいますから、その間にいつていらっしやい」

マディルはころりと表情を柔和に変え、リルファを促した。

翡翠の護衛官（終）

「失礼致します」

執務室の扉をノックし、マディルは窓辺の椅子で本を開いていた部屋の主に一礼した。

前室よりも更に本と謎の瓶に占められた室内は、かび臭いような香りがほのかに鼻につく。それでも最近ではリルファが風を入れ替えているのだが、長年つちかわられたものは早々に覆されたりはしないのであろう。

「まだ何かあるのか？」

不愉快そうに視線すらあげずに本の表面を見つめ、ぺらりとページを繰る。

「護衛官としてリルファ・デイラス・デイラは未だ未熟です。

ご要望があれば、屈強なものを選別する配慮を取らせていただきます。いかがでしょうか」

マディルは言いながらこくりと喉を鳴らした。

リルファが未熟であることは人事異動で配属された当初より承知している。専任護衛官に任命を受けるものは、誰より秀でたものであると定められているというのに、リルファ・デイラス・デイラは確実にそれには値しない。ある日、ぽんつと浮上したその人事には疑問が多すぎた。

リルファ・デイラス・デイラをラドック・ベイリル薬師担当官として任命せよ。それは、すでに定められていた人事であった。

面前の人物が自らそのように手配したのかと思ったこともある。だが、それはマディルの杞憂であることはすでに調べがついていた。

「いくらでも連れて来い」

ラドックはあくまでもつまらなそうに言葉を返す。

「薬を試すのに囚人ばかりじゃつまらんからな」

「クラウス・ヒューに毒を飲ませようとしたのはそういう理由ですか？」

ラドックは初めて興味をひかれたとでもいうように視線をあげ、にやりと口角を持ち上げてみせる。

目元に掛かる髪の毛の奥の瞳がひたりと自分へと向けられると、マディルは自分の芯の部分が底冷えするのを感じた。

「知っているか？」

毒蛇はその牙で相手を傷つけて毒をその傷口に流し込む。傷さえなければ、やつらの毒はいくら掛けられても体内に入って体を犯すことはないらしい。

だがそれは本当なのか？ 皮脂から浸透はしないと？

では口の中ならどうだ？

口内に傷がなければ毒は体内をそのまま巡って排泄されるのか？

他人がやった実験など、どの程度信ずればいい？」

「……」

「では、胃が荒れていた場合、その毒は作用するのか？」

実に興味深いと思わないか？

楽しげにクスリと微笑む黒い悪魔の姿に、マディルは瞳を細めた。

「クラウスが生きていたのはただの偶然でしかないようですね」

「どうだろうな？」

たとえあの丸薬を飲んだところで解毒くらいしてやるとは思わないのか？」

目つきの悪い瞳が細まり、更に鋭さを増した冷たい眼差しに、マディルはふっと自分の中の何かが怯みそうになってしまった。

相手の言葉が何一つとして信用できそうにない。

だが、ここで怯んではかりなど要られない。

相手は確かにこの国の中枢にすら手の届く要人といえど、一介の薬師でしかないのだ。軍属である自分が怯むなど本来あっていいものではない。

「それと、もうひとつ」

マディルは先の話題を早々にかえるように口にし、半眼を伏せてゆっくりとたずねた。

先日、偶然見てしまった事柄について。

「デイラ護衛官の左下腹部にある鳶の……」

問いかける途中で視線をあげたマディルは、相手が冷たい視線のまま、ゆっくりと口元に笑みを刻み込んだことに気づき言葉を呑みこんだ。

「いえ……何でもございません」

「ふんっ、度胸がないな」

言いながら、ラドックは机の引き出しから六角形に折られた薬包紙を一枚取り出し、人差し指と中指とで挟みこんでぴしっとマディルへと向けて投げた。

ぱしんつと、思いのほかい音をさせてその薬がマディルの手に収まる。

「胃薬だ。あんたも胃が弱そうだ」

「ありがとうございます」

マディルは喉の奥にたまる唾液を、まるで苦いもののように流し込みながら一礼した。

このまま話していることで、何らかの毒が体内を巡る。その考えにぶるりと身が震える。

「失礼いたしました」

ぱたりと執務室の扉を閉ざしながら、自分の体が冷たく、ぎこちなく動くことに腹立ちが這い登る。

そう、あの瞳が。悪魔の視線が、威圧が、言葉が。脳内を侵食する。

まるであの男そのものが毒のように！

ぎゅっと握りこんだ右手、かざりと小さな薬包紙が音をさせるのとほぼ同時に入り口の扉が開き、リルファが入室した。

「大佐？」

「……」

「どうかしましたか？ 顔色が悪いようですよ」

「いや、なんでもありませんよ」

自嘲するような乾いた笑いを零し、マディルはふと、この手の中の薬を今リルファが手にしている食食用プレート その湯気をあげるスープに混ぜ込んでやりたい衝動に駆られた。

すつと手のひらを開く。

何の変哲もない五角形に畳み込まれた薬包紙は、マディルの手の平の上で小刻みに震えていた。

リルファはその薬包紙に気づくと「何ですか？」と眉を潜めた。

「胃薬らしい。飲みますか？」

浮かんだ微笑は、どこかきこちのないものとなっていた。

そんな相手と薬とを一旦見比べ、リルファはマディルとは真逆ともいえる柔らかな微笑みを浮かべて見せた。

マディルのそのこわばった表情から、どのような経緯でラドックに薬を渡されたのかまでは推し量れはしなかったが、マディルがそのクスリを不信がつているのだけはすぐに推察がついた。

「あの人が胃薬だというのであれば、そうですね。」

危ないクスリの場合何言わずに押し付けますから、危険ですけれど。胃薬だと口にした場合は信じて大丈夫です」

簡潔な説明に、マディルは一旦瞳を伏せ、気安い様子でリルファの肩にとんとんと手を置いた。

「がんばりなさい」

リルファは怪訝気に眉を潜めて上官を見送った。

そう、例えリルファを今更その任から離れたところでどうなる

だろう。

もとより承知している。

長く薬師に付き添うものは、決してもう無事では要られなどしないのだ。

国の深淵を覗いた者に、穏やかな未来などありはしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9858o/>

詰め合わせギフトパック

2011年11月29日00時51分発行